

山の頂にあるものは

息抜き用ID

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリ主が登山したりしなかったりします。一人称オリ主もの。

目次

第24話	196
第23話	187
第22話	180
第21話	173
ほのか視点	168
第19話	156
第18話	146
第17話	134
第16話	128
ここな視点	122
第14話	110
第13話	100
第12話	91
ひなた視点	84
第10話	73
第9話	65
あおい視点	60
第7話	49
第6話	41
第5話	28
かえで視点	22
第3話	15
第2話	7
第1話	1

最終話
第25話

211 201

第1話

『ここに登ってみたいって？ 無理無理、もう少し大きくならないとな』

『ああ。いつかいつしよに登ろうな。お父さんとの約束だ』

あの日交わした約束が、いつまでも心にこだましている。

春、放課後の教室。今学期はじめての授業実施日を終え、クラスメイトたちはみんな新しい友達と楽しくおしゃべりしている。

(私は机、私は机……)

そんな中、私、山本マヤは気配を殺して帰り支度を始めていた。小中学校時代を通して鍛えられた隠密術のおかげか、クラスメイトたちは私に見向きもしない。

普通の感性を持つ人なら、新しい友達を作る絶好のタイミングにどうしてコソコソするのかと疑問を抱くだろう。その答えは簡単、私がいわゆる陰の者だからだ。

人類は二つの人種でできている。一つは陽の者。めっちゃ明るくて社交的。

もう一つは陰の者。めっちゃ暗くて内向的。私はこっちだ。

大抵の場合は同じ人種ごとにグループを作って関わり合うことはないのだけれど、何かの間違いで陽キャが陰キャに話しかけることもある。

すると、陰の者は強い陽のエネルギーによって消滅してしまう。だから絶対話しかけられないように、私は息を潜めているわけだ。

「あの子とかどう？」

「あの子は……無理じゃないかな。中学一緒だったけど、付き合い悪いし」

「でも一応、ね。雪村さん？」

さて、荷物をまとめて後は同胞に声をかけて帰るだけというとき、同胞の名前が呼ばれた。

見ると、陽の者たちが同胞——雪村あおいさんに声をかけている。

「丸玉三ミリ二十個、丸小ビーズ一二個、テグス一号、二十センチ四号——」

「ゆ、雪村さん？」

「はっ、はい!？」

しかし雪村さんは趣味の手芸に夢中だった。再び呼ばれたのに慌てて応えている。ほんの隙間時間でもあれだけ熱中するあたり、本当に好きなんだろう。

どうやら女子グループでお茶に出かけるようで、雪村さんを誘ったようだ。法事とか買い出しとか犬の散歩とかで時間がないから、と断る雪村さん。とっさによくあれだけの訳をでっちあげできるな。

やっぱりダメだったでしょ、と女子グループが退散。それを見計らって声をかける。

「ゆ、雪村さん」

「ひゃっ!?! って、山本さんか」

普通に正面から声をかけたのに驚かれた。

「もー、相変わらず影薄いんだから。びっくりしちやつたじゃない」「わ、悪かったね。それより早く帰ろうよ。陽キヤパワーで消滅しそっ……」

「ぶっ、何それ？ まあちよつとは分かるけど」

明るくおしゃべりを楽しむ女子グループの方を、雪村さんはちら見する。そしてまた声をかけられたらたまらないとでも言うように、そそくさ帰り支度を初めた。

雪村さんとは中一からの付き合いだ。初めておしゃべりしたのは忘れもしない体育の時間——

『はいみんなー、二人一組になってー』

我々陰に生きる者にとって死刑宣告に等しい、破滅の呪文が唱えられたときだった。その日クラスの人数が奇数だったこともあって私

は絶望していた。

すると、私と同じように顔を青くした雪村さんと目があい、同族のシンパシーを感じ取り。それ以来お互いを同胞として認め合う仲間になった。

遠方の趣味仲間には「いつしよにしたらその雪村つて子がかわいそう」と言われ、「ほのかだつて人のこと言えないじゃん!」と言いつ返した。口をきいてくれなくなった。泣いて謝った。

そんな関係だったので、クラス発表の貼り紙に雪村さんの名前を見つけたときはとても嬉しかったんだ。

けれど――

「あおいー! 久しぶり! 小学校以来だね!」

どうやら私の同胞とはここで別れらしい。

唐突に明るい声音を響かせ、雪村さんの机に手をついたのは倉上ひなたさん。もう見るからに陽のエネルギーにあふれた、陰の者とは対極にある元気っ子少女だ。クラスの自己紹介の時点でもう危険な子だと確信した。

「またいつしよの学校なんて運命かも! 思い出すよね、昔二人で見た朝日!」

「ひなた、ちゃん?」

倉上さんの態度と、雪村さんの何かを思い出すような口ぶりからして、久しぶりに再会した幼馴染のような雰囲気。なんだかとっても仲睦まじく見える。

「ねえ山本さん! この後、あおい借りてつていいかな?」

「どつ、どうぞどうぞ」

「ええ!? ちよ、そんな勝手に――」

「ありがとー! さ、行くよあおい! 約束の山に登ろー!」

「や、約束つて何のことよ!? 山本さーん!」

涙目で助けを求める雪村さんの視線に対し、私は小さく手を振って応えた。雪村さん、中学時代はありがとうさようなら。

友達が自分の知らない子と仲良くしていたら、妬ましく思えてしまうのはどうしてだろう。器が小さいのか、独占欲が強いのか。

たぶんどつちもだ。

自己嫌悪と喪失感で満身創痍になった私は、フラフラと教室を出ていった。

私の唯一の趣味は登山だ。でも去年目標を達成したのを機にすっぱり辞めた。

理由の一つはなんたつてお金がかかるから。靴やザック、雨具などの装備は良品を買えば数年はもつけれど、登山口までの交通費や宿泊代、消耗品の費用が重い。山岳保険だつて子供の身には安くはない。そんなわけで、高校生になつたら山から離れてバイトを頑張ろうと決めていた。高校卒業後の生活費をちよつとでも稼いでおこうと。

「いい景色……はっ!？」

じゃあなぜ私は今天覧山の展望台でいい気分になっているのか。これが分からない。

……。

天覧山は標高一九七メートル、山道は整備されてスニーカーと普段着でも気軽に登れる。登山というよりハイキングとして見る人もいる。

つまりこれは登山ではなく散歩だ。けつして私の意志が弱いとか、雪村さんのことがショックで癒やしを求めてつい登っちゃったなんてわけじゃない。

なにはともあれせつかく登つたんだから、飯能市の眺望ときれいな空気を楽しんで帰ることにしよう。

「こんにちはー!」

「こんにちは。つて、ええ!？」

後ろからあいさつが聞こえたので反射的に返答しつつ振り返ると、意外な二人組が目に入った。

雪村さんと倉上さんだ。どうやら今登頂したらしい。

倉上さんとはかく、インドア趣味な雪村さんがこんなところにい

るのは珍しい。

私が目を丸くしていると、二人はなぜか不思議そうに首をかしげる。

「どうかした?」

「あつ、すみません。私、倉上ひなたっていうんですけど……どこかで会ったことあります?」

「えっ」

「わ、私は雪村あおいです……」

私は言葉を失った。こいつら、私のこと分かってない。

たしかに普段と山行では装いを変えている。人と目が合わないよう両目を隠している前髪はゴムでくくってちょんまげにしているし、学校の外だと気が大きくなつてハキハキした喋り方になる。

だからつてつい昨日会ったばかりなのに……雪村さんとかもう三年の付き合いになるのに……

「私は山本。んー、悪いけど記憶にないなー。似た人と勘違いしてるんじゃない?」

あえてとぼけてみる。ほら、二人のクラスに山本っていたじゃん。背格好とかドンピシャで似てる人いたじゃん。さすがに気づく——

「そうですね! お邪魔しました。行く、あおい」

「う、うん」

「じゃあね」

気づかなかった。

私は笑顔で手を振る裏で、寂しさのあまり膝を折りそうだった。雪村さんは最初から同胞ではなかったのかもしれない。

雪村さんは倉上さんと仲良く展望台のベンチに座り、ストーブでお湯を沸かしてティータイムを楽しんでいる。基本単独行しかしない私には眩しすぎる。

ささくれだつた心に導かれるまま、私は天覧山に連なるもう一つの山、多峯主山の登山口へ足を向けるのだった。

私と同年代でソコ登山を楽しむ人は結構少ない。だから山で見かけると、仲間意識から話しかけて仲良くなることがある。

そういった人たちの中でもっとも気安い趣味仲間には、私は某トークアプリで愚痴を垂れ流していた。

『と、いうことがあったわけ。ショック。なぐさめて』

《かわいいそう》

『テキストすぎ！』

《普段からハキハキしゃべればいいじゃない》

《私だって分からないよ、そんなの》

『そんな！ ほのつちなら滑落したぐちやぐちやの私を見ても余裕で分かるくらいの仲だと思ってたのに！』

《そうやって縁起でもない冗談言うから友達できないんじゃない？》

『正論ヤメテ！』

《じゃあ少しは反省して》

《というか結局登山やめてないんだ》

『いや天覧山はめっちゃ整備されてるし登山のくくりにはギリ入らな』

《そういうの、意志薄弱っていうんだよ》

『うるせー隠れブラコン！』

《それは今かんけ》

《かんけないでそよ!!!》

照明を落とした狭い自室、布団にくるまった私はニヤニヤしながら、真新しいスマホをタップするのだった。

第2話

入学式から二ヶ月ほど経ったお昼休み。夏服に衣替えしたクラスメイトたちが好きなグループでお昼ご飯を楽しんでいる。

同胞を失った私は当然一人ではぼっち飯——かと思いきや。

「く、倉上さんは登山が好きなんだ」

「うん！ この前はあおいといっしょに天覧山に登ってさ！ あおいの作ってくれたサンドイッチが超うまかったんだ！ ね、あおい！」

「そ、そだね……」

なぜか雪村さん、倉上さんといっしょにご飯を食べている。

経緯はかんたん、お昼のチャイムが鳴ったとたん『山本さん、いっしょに食べよう！』と倉上さんがやってくる。『やかましくてごめんね』と雪村さんも苦笑しながら席につき、私は『あ、はいどうぞどうぞ』とうなずく他なかつたというわけだ。

必然的に社交的な倉上さんがおしゃべりの中心になって、登山が話題に出た。

雪村さんはどこか気まずそうだ。たぶん、私が登山に興味ないと思っっているんだろう。

実はめっちゃあります。

ついでに言うと雪村さんが登山を初めた理由にも興味あります。なので話題に乗ります。

「ゆ、雪村さんが登山するのは、意外」

「それは——」

「約束の山に登りにいくんだ！」

ヤクソクノ山——そんな山日本にあったっけ？

私が首をかしげていると、倉上さんが矢継ぎ早に続ける。

「小さい頃、お父さんが私とあおいを山に連れてってくれた。で、またその山頂から朝日を見る約束をしたってわけ！」

「へー」

「あおいったら約束のことすっかり忘れてるんだよ！ ひどいよね！」

「わ、悪かったわよ！」

「ふーん……ん？」

幼馴染同士の心温まるストーリーだ。妬ましい。

でもちよつと待ってほしい。この前二人が教室で再会したとき、倉上さんは「小学校以来」と言っていた。これはつまり、

「その約束って、今から何年前のこと？」

「小学一年の頃だから、九年前かな。それがどうかした？」

「……倉上さん、雪村さんのことが本当に大好きなんだね」

「へっ？」

二人揃って仲良くきよとんとしている。幼馴染同士の友情が眩しすぎて私はもう瀕死である。

「九年間ずつと、あおいさんと約束のことを想い続けてきた。顔を見たらすぐ分かるくらい」

「あつ、いやそれは、その、なんとうか」

「あう……」

倉上さんは目に見えてあたふたしだして、雪村さんは耳まで真っ赤にしてうつむいた。尊い。

「そ、それより！ 山本さんってあおいと中学いつしよだったんだよね？ こいつどんな感じだった？」

「ちよ、ひなた!! 別にそんなことどうでもいいでしょ！ 山本さん、答えなくていいからね!!」

「えー、いいじゃんー！」

照れくさい空気を払拭するためか、お互いぎゃあぎゃあと言いつつ二人。なるほど、倉上さんといっしょにいと雪村さんは陽の者になるらしい。私と話しているときは比べ物にならないほど眩しい。

「隠すことないじゃん。あ、もしかしてなんか恥ずかしいイベントでもあったのー？」

「そ、そそそんな訳ないじゃん！ ひなたこそなんかあったでしょ、あんたそそっかしいんだから！」

「なにおー！」

値引きシールの貼られた菓子パンを無言でかじる。

なんだかいつもより甘い気がした。

友達かどうかは分からないけれど、私にだって山行に付き合ってくれる知り合いはいる。

「着きました！・高尾山は向こうですね。行きましょう！」

「おー」

高尾山口駅前、私の手を引いて張り切って進んでいく彼女がそうだ。

青羽ここな。中学二年の小さな女の子なんだけど、見た目にそぐわない行動力があって、動物が見たいからという理由で山歩きを敢行する元気な子だ。

知り合ったのはどこかの低山を散策しているときだった。その山はほとんど林業関係者しか出入りしないマイナーな山で、登山道は獣道に毛が生えた程度。

そんな場所で行くわした彼女は『鹿さんに会いに来たんです！』と輝く笑顔で言った。服装は普段着と運動靴。いくら低いとはいえ山は山、心配のあまり登頂から下山まで同行した。それ以来都合があうたびいつしよに登山するようになったんだ。

「でもびっくりしました。まさかマヤさんの方から誘ってくれるなんて」

「ん、なんか無性にここなちゃんの顔が見たくなつてね」

「まあ、嬉しいです！ 私もマヤさんになら、いつでも会いたいですよ！」

ああ、癒やされる。

雪村さんと倉上さんへの嫉妬心が浄化される。ここなちゃん好き。

「今日はきつとモモンガさんを見つけましょうね！」

「あつ、はい」

ああ、罪悪感で死にそう。めっちゃ冷や汗が出てくる。

ここなちゃんを誘うとき、動物好きだからと「高尾山にモモンガさ

ん見に行かない？」と言ってしまったのだ。誘い慣れていないゆえの大ポカだった。

高尾山にいるのはモモンガでなくムササビだ。しかも夜行性。

これに気づいたのはさっき電車の中でスマホをいじったときだった。高尾山は小さい頃から登り慣れているだけに、もう知らないことはないとタカをくくっていたんだ。

どうしよう、いくらここなちゃんでも怒るかな。それとも普通にながかりするだろうか。どっちにしても言い出すのが辛い――

「マヤさん？　もしもーし？」

「はっ!？」

「どうしたんですか？　さっきからぼーっとして。……まさかまたご飯を抜いたんですか？」

「ち、違う違う。どのルートにするか考えてただけ」

どうやら考えすぎていたようだ。ここなちゃんが心配げに顔を覗き込んでくる。

ここなちゃんは私が食費を削ってまで登山していることを知っている一人だ。でも今回はきちんと食べてきた。

しかしよく考えると、三度の飯より趣味を優先するのって女としてダメな気がする。やっぱりそろそろ登山は辞めたほうが――

あつ。

この前辞めるって決めたの忘れてた。

「ならいいんです。さ、いきましょー!」

「おー!」

まあいいや。今日は天気もいいし張り切ってるここなちゃんがかわいいから、特別にノーカン。

今回だけ、今回だけ。

ここなちゃんとはぐれた。

事が起こったのは山に入ってしばらく経ってから。複数ある登山

ルートのうち、一号路と呼ばれるルートで登山を始め、登山鉄道高尾山駅に着いた。

そこで売られている三福だんごのおいしそうな匂いにつられたのがまずかった。

高尾山への交通費の往復分だけで財布はすつからかん、到底お団子を買えるお金はない。それでももついついお団子をガン見しつつよだれを垂らしてしまう。

そしてふと我を取り戻したときには、ここなちゃんが消えていた。

「ああ、あの子？　リスさーん、つて言いながら山頂の方へ走つていったわよ」

近くのハイカーさんに聞くと気が抜けた。それなら山頂に歩いていけば合流できるだろう。

しかし私の予想に反してここなちゃんは見つからなかった。一号路の途中にも山頂の展望台にも。焦燥の炎が再び燃え始める。

ここなちゃんは自分勝手な子じゃない。リスを追いかけるのにくたびれたら、どこか分かりやすい場所で連れを待つはずだ。そうしないということは、何かのトラブルに巻き込まれた可能性が否めない。

「そうだ、スマホ……」

スマホはバッテリー切れだった。電気代をケチってあまり充電していなかったことと、電車の中でいじっていたのが災いしたようだ。

えーい、じゃあ直接歩いて探せばいいじゃない！

日暮れ時、ここなちゃんは見つかった。もつとも険しいとされる六号路コースの登山口で、なぜか雪村さん、倉上さんといっしょに談笑している。なにがどうやってそうなった？

私はといえば、疲労困憊で木陰にうづくまって声も出せない状態だった。ここなちゃんを探しながら複数の登山コースを往復したからだ。お昼ご飯も食べてないので力が入らない。

「マヤさん、結局会えませんでした……」

「大丈夫だって！ 山に慣れた人なんでしょ？ もうとつくに降りてるよ」

「だといいんですけど、心配性な人ですから」

「電話も通じないならたしかに心配かも。山中探し回って今頃その木陰とかでぐったりしてるとか」

「ないない！ そんな体力オバケいるわけないよ！」

「ここなちゃんを安心させるためだろう。雪村さんと倉上さんが茶化すように言っているけど、凶星過ぎて怖い。普通の汗に混じって冷や汗が出てきた。」

今回は私のミスだ。お団子に気を取られてはぐれた挙げ句、勝手に不安を膨らませて山中くまなくトレイルラン。ここなちゃんは動物を見るための単独行には慣れている。高尾山には人も多いから、万一トラブルがあっても助けは呼べる。

要は私の取り越し苦労だった。

「死にたいっ！」

「えっ!？」

「しまったあ!？」

木に全力で頭突きをかますと、三人の驚く声が聞こえた。そりやそうだ。

すぐに山へ逃げ込もうとするが、疲れて体が言うことを聞かない。そうこうしているうちに三人に回り込まれてしまった。

「あ、山本さんじゃん」

「ここなちゃんの友達って山本さんだったんだ。でもその格好——」

「マヤさん、もしかして……!？」

「違う！ 違うから！」

目を丸くするここなちゃんの言葉を遮り、私は必死で言い訳を考える。

「ほら、高尾山って名所が多いじゃない？ 引っぱりだことか、男坂とか、登山アニメの聖地にもなってるし。いろいろ回ってたら日が暮れちゃって、大慌てで降りてきたんだ。あつ、ここなちゃんは先に降りてきてたんだね。よかったー」

「めちやくちや棒読みムグッ」

「あおい、しー！」

我ながら完璧な言い訳だ。ここなちゃんは優しいから、私の身勝手な苦勞にも責任を感じるかもしれない。それはダメだ。

「ここなちゃんは一度口を開きかけ、何かを呑み込むようにうつむくと、ぎこちない笑みを浮かべた。

「……マヤさんは、仕方ないですね」

「ちよ、な、なんで抱きつくの!?!」

そしてなぜかハグされた。同じくらいの背丈なので、ここなちゃんの顔が見えない。

「待って、今汗臭いから！ 今だけは勘弁して！」

「ダメです。私がいいっていうまでこのまま」

「ひゅーお熱いねー！」

「ひなた……」

「からかってないで助けて！」

私のアホくさい苦勞の汗でここなちゃんが汚れる！ じたばたしつつ雪村さんと倉上さんに助けを求めるが、二人は微笑まじげに見つめてくるだけだった。この両想い幼馴染どもが！

結局私の抵抗は空しく、開放されたのはそれから体感一時間くらい（実際は数分くらい？）後だった。

『と、いうことがあった。ドヤ！』

◇◇

『おーい、既読スルーは辛いぞ』

『笑って！ からかって！ 笑い話にして！』

《バーカ》

『……それだけ!?!』

『ははーん、さてはここなちゃんに嫉妬して』

『ほのかさんにブロックされました』

『あれえ!?!』

電話口で泣きながらほのかに謝ったのは、久しぶりだった。

第3話

お昼休みの教室、今日も今日とて私は雪村さん、倉上さんといっしょにお昼ご飯を食べる。倉上さんが話して雪村さんがツツコミ、私が小さくうなずくという役割ができつつあった。

「で、そのマヤちゃんって子が汗だくで木陰に隠れてたの！ あれは相当必死に探したんだろうな。あおいが遭難したら、私もあんな風に探してあげるね！」

「ミイラ取りがミイラになるわね……」

「そんなことないよー！」

「普通に通報、しよう」

冗談に真面目に答える禁じ手により空気が死ぬ、ということにはならず、倉上さんが「そりゃそうだ！」と笑い飛ばしてくれた。危ない。本当に空気読めないな私！

ともあれ、二人から話を聞いたことで、先日の高尾山の一件の謎が解けた。

登山届にも書いておいた一号路と六号路はまっさきを探したのに、日暮れまで見つけれなかったこと。これは単にすれ違ったらしい。

山頂で靴の裏がはがれて困っているここなちゃんに、雪村さんたちが遭遇。応急処置をしながら連れ（私）のことを待つがなかなか現れないので、日が暮れる前に下山することに。

たぶんすれ違ったのは山頂だろう。展望台や休憩所など、何かの施設の陰にいた三人を私はスルーして六号路へ。そのまま下山してまた別のルート of 探索へ行った、というわけだ。

「……っ!!」

「山本さん？」

「急に頭抱えてどうしたの？ パンにタバスコでも入ってた？」

「……なんでもない」

自分の落ち度だらけの行動を思い出して悶絶しているだけだ。あの意味タバスコより辛いけど、なんでもない、うん。

しばらく変なものを見るような視線を向けてきた二人。すると雪

村さんがふとした調子で私の机の上を指さした。

「ところでそれ、登山の小説？」

「あ、うん。『剣岳』と『サイレントブラッド』。面白いよ」

「ふーん。うひゃー、文字だらけ！ 絵はないの？」

「小説が文字だらけなのは当たり前でしょ！」

顔をしかめる倉上さんに雪村さんがツッコむ。

が、それだけだった。二人は私と山での私を連想しない。

この本は二人にそれとなく『陰キヤの山本さん』山のマヤさん』説をアピールするために図書室で借りてきた、山っぽい内容のものだ。効果はいまひとつ。ちなみに読んだことはない。

（声と背格好と名前まで同じなのになんで気づかないかなあ……）

下の名前まで一致していると分かれば、さすがに分かるだろうか。でもそこまですると負けた気がする。

登山をしている自分自身は結構好きだ。学校で縮こまっている自分は嫌いだ。だから、好きな自分と嫌いな自分が別物として考えられるのはシヤクなんだ。

まあ卒業までに気づいてもらえればいいや。

とはいったものの。

「これはキツイー」

狭い自宅アパートの畳の上で、私は齒ぎしりしながらスマホ画面を睨みつけていた。

画面に表示されているのは高尾山の一件の際連絡先を交換した、雪村さんからのメールだ。

『こんにちは。今度みんなで飯能河原に集まろうってことになったんだけど、マヤちゃんも来ない？ ここなちゃんも来るよ』

雪村さん……友達だと思ってたのに……教室での私は誘ってくれないんだ……。

何度見返しても、メールの宛先は山での私用に用意したフリーメー

ルのアドレスになっている。つまり教室での私は誘われることすら
ない要らない子。

……。

考えてみれば、人と目を合わさず何を考えてるかも分からない暗い
女を誰が誘ってくれるんだろう？ そう、悪いのは雪村さんじやな
く、陰に生きる私――

ぴこん、と軽い着信音。

『今度私とひなたとあと何人かで飯能河原に集まるの。よかつたら山
本さんも来ない？』

「ヤツタアアアアア！ ひえっ、すみません……」

良い子は寝る時間にもかかわらず絶叫してしまった。お隣からの
壁ドンにヘコヘコしつつ、メールに星マークとロックをかけておく。

小中通して陰キヤ、高校でも変わらずかと思われた私の生活によろ
やく差し込んだ光。それをもたらしたのは同胞でした。やったぜ。

さて。

「影分身の術、覚えなきや……」

ひとまずコンビニで少年誌を立ち読みして分身の術のやり方を調
べよう。体を二つに増やせれば、二人分楽しめるもの。

断じて現実逃避してるわけじゃない。

ないったらない。

川遊び当日の朝、私は前髪をちよんまげにまとめた山登りスタイル
で家を出た。

空蝉の術は覚えられたけど分身の術は無理だったので、教室での私
の方はお休みだ。誘いを断る文面を考えるのに三時間はかかった。

お昼ご飯は倉上さんともう一人初対面の人、おやつは雪村さんとこ
こなちゃん、私は何も言われなかったけど、水分補給用のスポドリを
持っていくことになった。重いものには慣れているからへっちゃら
だ。

飯能河原を一望できる割岩橋のたもとに昼前に集合ということだったけど、待ち合わせ場所に着いたのは午前九時だった。ソワソワしてとても落ち着けなかったんだもの。

欄干によっかかってぼんやりしていると、河原には徐々に人が増え始め、川遊びではしゃぐ楽しいげな声がこつちまで聞こえるようになった。見ると、水着姿の少女たちが水のかけあいで遊んでいる。

「……やっぱ帰ろっかな」

橋の下は異空間だった。山とも教室とも違う独特の雰囲気——いわゆるリア充のたまり場みたいな空気がある。

といってもここまで来といてドタキャンするわけにもいかない。

私はリア充の余波で焼き焦がされないようくりと回って欄干に背を預ける。

すると橋の一方から待ち人がやってくるのが見えた。まずはここなちゃん、雪村さんに倉上さん、一年前から音信不通になってる趣味仲間のかえでさん——えっ？

「かえでさん!？」

「マヤちゃん!？」

お互い同時に名を呼んで目を見開く。相変わらず身長が高くてスタイルが良くて知的な眼鏡のまぶしい美人さんだ。

思いもよらない再会だったけれど、登山の大好きなかえでさんが初心者の雪村さんたちと知った仲なのは不自然なことじゃない。飯能市在住って言うってし、近くの登山用品店は一つしかないし、どこかで鉢合わせて仲良くなったんだろう。

私は嬉しさのあまりかえでさんに駆け寄り、

「生きてたのね……もう、連絡くらいしなさいよバカ!」

「むぐっ!？」

視界が真っ暗になった。

この柔らかい感触……どうやらかえでさんにハグされているようだ。身長差のせいで顔が胸の谷間に押し付けられている。

息ができない。

「む——」

「二人はお知り合いだったんですね。それにとつても仲良しさんです！」

「きつと気が合うと思ったけど、もう知り合いなんてびっくりだよ。ね、あおい！」

「言ってる場合!?」　ちよ、かえでさん、マヤちゃんタップしてますよ!?!」

「え? ご、ごめんなさい、大丈夫?」

「う、空蟬の術……!」

「いや、できてないから」

やり方を知ってるのと実際にやるのは違うみたい。雪村さんの呆れたツツコミが刺さる。

私はフラフラになりながら息を整え、改めてかえでさんに向き直った。

「久しぶり、かえでさん」

かえでさんと出会ったのはソロ登山を初めて間もない頃だった。

何かと要領の悪い私は雨具を忘れたり、道に迷ったり、電車賃が足りなくなったりとトラブル続き。歩き慣れたはずの低山で捻挫した上、杖にもなるストックが折れたあの日は本当に危なかった。

そんな私を助けてくれたのがかえでさんだった。ストックを貸してくれて、下山までゆつくりしたペースで付き合ってくれた。それ以来、数少ない登山仲間として連絡をとりあうようになった。

「へー、さすがかえでさん!」

「マヤちゃんでもそんな風に困ることあるんだ」

飯能河原にしたいレジャーシートに座り、雪村さんとここなちゃんを用意してくれたフレンチトーストをかじりつつ、談笑。話題はやはりかえでさんとの関係だった。

かえでさんはカラカラと笑う。

「この子すつごく不憫なのよ?」　捻挫したその日に限ってストックが

二本とも折れるんだもの！」

「あ、あれはたまたま運が悪かっただけ！ 不憫じゃないし！」

「ふーん、たまたまねえ」

含みのある笑みを向けてくるかえでさん。

たしかに私が山に行くときと天気予報にかかわらず七割方天気が荒れたり、事故や故障で交通機関が止まって登山口にすらたどり着けないこともままあったけれど——たまたま運が悪かったただけだ、きつと。

「まあこういう子だから、『剣岳制覇してきます』ってメールが来たときは本当に焦ったのよ」

「「「剣岳!」」」

「おまけにそのメール以来音信不通。万が一のことが起こっちゃった、って思うじゃない？ そしたら何食わぬ顔でひよっこり現れて『久しぶり』って言うのよ。まったくもう！」

「それはマヤちゃんが悪いね！」

「うん、悪い」

「悪いです！」

「ご、ごめんなさい……使ってた携帯が壊れちゃって……」

倉上さん、雪村さん、ここなちゃんが声をそろえる。縮こまって謝るしかなかった。

「ま、無事だったんならいいわ。それでどうだった？」

「へ?」

「剣岳」

剣岳は難易度の高い登山の代名詞としてかなり有名だ。日本人が富士山を知っているように、登山家のほとんどが剣岳の名を知っている。

その有名に違わないハードな山行だった。累積標高や距離もさることながら、岩場、鎖場、浮石だらけの岩壁など多数の危険箇所——辛い思い出はあげればキリがない。三度途中で撤退して四度目でもやっと登頂できた。

お父さんといっしょに剣岳を登るといふ約束がなければ、絶対行くことはなかったと思う。その約束だってもう果たしたし、やりきった

感があるし、お金がかかるし、登山はもうやめた。天覧山と多峯主山と高尾山はノーカン。

とにかく劔岳の感想を一言でまとめるなら、

「落ちなければ安全な山でした」

これに尽きる。

なかなか的確で分かりやすい感想をまとめられたと思う。

しかしかえでさんはしばし目をパチクリさせた後、なぜか「ふふつ」とふきだした。

「ここなちゃん、雪村さん、倉上さんの三人は顔を見合わせている。

「かえでさん、もしかして……」

「マヤちゃんって」

「天然さん？」

「違う違う、天然ポンコツよ」

「誰がポンコツだ!？」

すぐに否定したら四人は余計クスクス笑いだした。たいへん遺憾な評価に断固として抗議するも、四人には勝てない。

ふてくされてフレンチトーストをもさもさしていると、かえでさんが笑いをこらえながら「ごめんごめん」と彼女の分のトーストをちぎって分けてくれた。

おいしかった。

かえで視点

『スタイルも頭もいいけど、変な人だよね』

『山登ってるし……一人で怖くないのかな』

それが私、斎藤かえでの中学時代の印象だった。

同級生たちは変わり者を避けるため、私と距離をおいた。私が山に行くたび生傷をこさえてくるから、距離感をもっと空いた。それでも登山趣味を隠すことはなかった。好きなことを隠してまで誰かと仲良くなったってきつと面白くないし、何より大切な友達が一人、もしかすると二人はいたから。

『また高い山登るの？ 装備とかちゃんとしてる？ 大丈夫なの!？』

一人はゆうか。私が新しい傷を作ると毎回顔を青くして心配してくれて、山に登る前は私本人よりも慎重で心配性になる。本当に心配してくれる人がいるのはとても心地よかった。

でもあのときの私はゆうかの気持ちなんて全然考えてなくて――

『大丈夫、今度おみやげ買ってくるからさ』

『そういうことじゃなくって』

『平気だって。ゆうかには迷惑かけないよ』

『……っ』

いつかの教室でのやりとりだった。毎度のごとく心配をつのらせているゆうかと話していると、ゆうかは急にむっとして一人で帰ってしまったんだ。

どうして機嫌が悪くなったのか分からなかった。登山の前には情報と装備をきちんと整えて万全を期しているから大丈夫。それに、何が起こってもゆうかには迷惑かけない。

何度考えてもゆうかの気持ちが変わらなくて、翌日山に登っているときもずっとモヤモヤしていた。モヤモヤのせいできつい山道、きれいな景色、気持ちいい風、登山の楽しさが全然味わえない。

「待たれいー」

「へ？」

登頂しても爽快感は薄く、上の空で下山を始めた道半ば、変なテン

シヨンの声がかかった。これが二人目との出会い。

見ると、山道の隅に座り込んだ小さな女の子が神妙な顔つきで私を見つめていた。

私と同じか、もつと下か。それくらいの女の子が一人で山にいるのは珍しい。そう考えながら足を止めると、女の子はすつと山道の先を指さした。

「ここから先は足場が悪い。ぼーっと歩いてたらケガしますぞ」

「……本当ね。わざわざありがとう」

「いえいえ」

指さした先では、小さな沢の上にくけむした大小の丸岩が敷き詰められている。不安定な岩に体重をかければ転倒の恐れがある。ゆうかのことを考えてぼーっとしたまま渡っていれば、私もケガをしていたかも。

お礼を言って通り過ぎようとすると、その女の子の足首にグルグル巻きにされたテープリングが目に入る。それだけでなく、女の子の体には無数の擦り傷があつて、服には苔や土などの汚れがあつた。

もしかして——私よりも一瞬早く、女の子がニヒルに笑いながら口を開く。

「ふっ、ぼーっとしているとケガしますぞ。私のようにね！」

「笑ってる場合じゃないわよ!?!」

「ふふん、笑いたくもありません。っーか笑うしかない」

女の子はヤケクソ気味にザツクにくくりつけたストックを目線で示した。両方とも折れてる!?!

「この山には何回も来てますが、捻挫したのは初めてで、そんなときに限ってストックくんが寿命を迎える、と。逆に運がいい気がしてきた、あはは」

「だから笑ってる場合じゃ……ああもう、見せて」

相当ひどくひねったらしく、女の子の足は腫れ上がってはいたいけど、処置は完璧だった。一週間も安静にしていればきれいに治るわね。問題はこの山から帰れるかどうか。

「……ごめんなさい」

私が一瞬黙り込むと、女の子は一転してしょんぼり肩を落とす。

「ご迷惑かけるつもりで声をかけたんじゃないんです。ただ、その道が危ないですよって伝えただけで」

「別に迷惑なんて思っていないわ。それより下山よ。歩けそう？」

「なんとか。ちよつと休めば、日暮れ直前くらいには下りれます。大丈夫です」

「大丈夫じゃないでしょー!」

大きな声が出たことに自分でもびっくりした。女の子も目を丸くしている。

「足引きずって下山して、もっと大きなケガしたらどうするの! どこが大丈夫っていうの!」

「あ、その……」

「もう怒った。勝手にやらせてもらうわ!」

その後、私は女の子にストックを貸して、手を引きながらゆっくりと下山した。

あんなに怒ったのはすごく久しぶりだった。当時はどうして自分が怒ったのか分からなかったけれど、今なら分かる。私はあの女の子に自分を重ねていたんだ。

大丈夫でもないのに強がって人の心配を受け付けず、迷惑をかけたくない、かけていないと言い張るところが、私にそっくりだった。優しいゆうかを怒らせたダメな私に。

『ゆうか、その……今までごめんね』

『へ? 何、どうしたの?』

『ゆうかは今まで私のこと心配してくれたのに、私いつもヘラヘラしてた。ゆうかの気持ち、全然考えてなかった……』

『あ、ああ、いいのよ別に。勝手に心配してるだけだもん。ま、もうちよつと自分の身を大切にしてくれたら嬉しいけど』

女の子と出会った翌日、私はゆうかに朝イチで謝りに行った。そしてゆうかはカラカラ笑って許してくれた。

あの女の子が鏡みたいに私のダメなところを教えてくれなかったら。あの子が上の空な私に注意してくれなかったら。私はまたケガ

をして、ゆうかを怒らせていたかもしれない。

そんな感謝の気持ちもあつたんだろう、私は山であの子——山本マヤちゃんと鉢合わせるたび話をするようになった。

『この山は私の庭みたいなもんです。かえでさんを華麗にガイドしてみせましょう』

『頼りにしてるわ。って、いきなり間違えてるわよ!?!』

『はい?』

『そっちはただの獣道! 登山道はこの分岐を左!』

『えっ、これって分岐? あ、ほんとだ』

あるときは分岐を素通りして藪に突っ込みかけ、

『かえでさん、すみません……』

『まあ山の天気は変わりやすいものね』

『にしたって程があるでしょ! 三度目ですよ天気が荒れるの! しかも私が来たときばかりい……!』

『いいじゃない、それも山よ。この後どこいく?』

あるときは変わりやすい山の天気 to 翻弄されたりした。

ろくな目に合わなかったけれど、年の近い山仲間 is 初めてだったから、新鮮でとても楽しかった。

でもある日、『ちよつと劔岳登ってきます!』と唐突にメールで知らされて、それ以来連絡がとれなくなつてしまった。

劔岳は軽い気持ちで臨んでいい山じゃない。毎年のように遭難者、滑落事故が発生している上級者向けの山だ。ちよつとポンコツ気味なマヤちゃんが登れるとは思わなくて、連絡がとれなくなつたとはそういうことなんだろう、とひどく落ち込んだ。

このときの落ち込みぶりといったらひどかったらしい。ゆうかの励ましがなかったら立ち直れなかった。

マヤちゃん、ゆうかが怒ってるよ。『うちのかえでにこんなに心配かけちゃって! 会って直接文句言わなきゃ気がすまないわ。また連絡がついたらすぐに教えてね!』って。

マヤちゃん、怒ったゆうかは怖いよ。怖がりなあなたなら、泣いちやうかもしれない。それくらいあなたが心配なの。だから——

ねえマヤちゃん、今、何してるの？

「はい、あーん」

「あむ、むぐむぐ」

「仲いいわね二人とも」

飯能河原、レジャーシートの上にくつろぎつつ。

あれだけ心配をかけたマヤちゃんはリスみたいにはっぺたを膨らませてお昼を楽しんでいる。それもここなちゃんに甘やかされながら。

つぶらな瞳に小柄な体躯、餌付けされる様子を見ると本当にリスみたいだ。

「リスさんみたいでかわいいですー！」

「ちよ、ちよつと待……むぐっ」

ここなちゃんは甘やかすのに夢中で気づいてないけど、マヤちゃんはどうだいぶ苦しいみたい。口を開くとすかさずお代わりが突っ込まれるのは少しかわいそう。

涙目で助けを求められるけど、にっこり笑顔を返しておいた。マヤちゃんは登山している割に体も食も細い。この機会にたくさん食べちゃいなさい。

「待ちなさいひなたあー！」

「へへーん、そんなんじゃないよーだ」

川の中ではあおいちゃんとひなたちゃんが水鉄砲で遊んでいる。位置関係からして流れ弾が怖いわね——あ。

「ここなちゃん」

「はいっ。」

「マヤちゃんから少し離れた方がいいわ」

きよとんとするマヤちゃんと、首をかしげるここなちゃん。ちなみに私はもう距離をとってる。マヤちゃんの不幸体質からして先の展開は読めちゃう。

ここなちゃんが釈然としない表情で位置をずらしたその時——マヤちゃんの顔面に凶弾が直撃した。

「あつ」

犯人はひなたちゃんだ。『あつ、よりにもよって一番付き合いの浅い子に！』って心境みたいね。

私はすかさず水鉄砲をマヤちゃんに投げ渡す。

「マヤちゃん、パス！」

「……ひなた貴様ア！ 蜂の巣にしてくれるわあ！」

「うひゃあ、マヤちゃんが怒った！」

マヤちゃんはひなたちゃん狙いで水鉄砲を連射——するかと思いきや、あおいちゃんの方に駆け寄っていき、

「動くな、この女がどうなってもいいのか！」

「汚っ!! 助けてひなた！」

「あおい、ううっ、あおいのことは忘れないから……!!」

「わぶっ……ひくなくたく！」

人質にされたあおいちゃんだったけど、容赦なくひなたちゃんに撃たれる。人質は犯人と手を組み、二対一になったひなたちゃんが逃げ回る構図になった。

「みなさん、楽しそうですね」

「そうねー」

すごく心配をかけられたことにはもう少し文句を言いたい気持ちがあったけれど、あんなに楽しくはしゃいでるのを見ると、なんだかどうでもよくなつてきちゃった。

ソロ登山とは大きく違う、賑やかで緩やかな川遊び。心地よくて新鮮な時間が、ゆっくりと流れていく。

第5話

高校生になってからというものの、私の生活はずいぶん明るくなった。

中学ではお金のかかる登山趣味をやめようやめようと言いながらつい山へ行つて、自分の意志の弱さに落ち込むばかり。高校ではまあ落ち込むことはあるけれど、雪村さんと倉上さんのおかげでリア充の巣窟みたいなところで楽しく遊べた。趣味仲間のかえでさんとも仲良くなれた。

ここまで回想するとやはり気づく。

私、実は陰の者から陽の者にクラスチェンジしてるのでは？

だってクラスメイトと飯能河原で川遊びなんて中学時代の私にはとても無理だ。なんなら教室で前髪をおろしてる陰キャモードの私も無理だ。つまり登山スタイルの私——前髪をちょんまげにくくった状態の私は陽の者になっていると思われる。

じゃあ登山スタイルで学校に行けば陽キャデビューできるじゃない。

もう陰キャ特有の悩みに苦しまなくていい。登校時、微妙に追い越していく速度で歩く陽キャ集団の後ろでアタフタしたり、授業中に指名されたとき声が裏返ってクラス中から生暖かい視線を集めたり、ペアやグループなどの単語で冷や汗をかかなくてもいいんだ。

自室にて、手鏡の中の私を見る。目を覆う長い前髪をかきあげ、ゴムでくくったその姿はたぶんきつと、陽キャだ。

さようなら暗い私、こんにちは明るい新生活。

そうして私はうきうきしながら家を出たのだった。

「前から気になってたけど、山本さんって前髪長いよね」

「あ、それ私も気になってた！ 前見えなさそう！」

「う、うん……」

教室、授業の合間の休み時間。あおいちゃんとひなたたち——もいい、雪村さんと倉上さんの指摘に、私は顔をそらした。

陽キャデビューなんて無理でした。

「前髪は心のバリア……短いと謎のエネルギーに焼かれて死ぬ、ので」
「マジで!?! 前髪すげー!」

「謎のエネルギーって何よ……」

謎のエネルギーとは、学校という異空間に満ちる特有の謎エネルギーである。山中に放置された古い鳥居をくぐると急に空気が変わるけれど、学校にはそれと同じような独特の空気があるんだ。

その空気に触れると私みたいな陰の者は昇天してしまう。だからやっぱり前髪バリアは外せない。

ふと、倉上さんの方を見てみる。彼女は私の前髪をじっと見つめて、手がうずうずと落ち着かない。

私は反射的に額のところでクロスアームブロック。

「……だめ?」

「ダメ。めくられると昇天する」

「ちえー」

めくりたくなる気持ちは分かるけど、私も学校で昇天したくはない——あ、そうだ。

前髪なくなったら二重生活のことバレルじゃん。

雪村さんと倉上さんは、前髪をおろした私と登山スタイルの私を別人として考えている。

気づいてもらえないことに最初は不満だったけれど、最近はずいぶん私も楽しくなってきた。この勘違いを利用して何か面白いことをできないか、暴露するならどのタイミングが盛り上がるか、といういろいろ考えている。

陽キャデビュー云々ですっかり忘れてた。危ない。

「じー」

「ぞ、そんな見られても」

なんて考えている間にも、倉上さんはものほしげに私の前髪を見つめてきた。

ここで悪ノリして無理やり迫ってこない距離感が、この人のいいところだ。まあ視線ビームだけでもなかなかの威力なんだけども。

雪村さん、黙ってないで助けて——あれ？

「ゆ、雪村さん？ どうかした？」

「ふえい!? いや、あの」

雪村さんは何か言いたげに、口を開いては閉じるのを繰り返していた。

「えつと……今度、みんなでキャンプ行こうって話になったんだけど……山本さんもよかつたら、いつしよに……」

「やつと言えたね！ もうちよつと遅かったら私が言ってたよ！」

「う、うるさいなあ、私のタイミングがあるのよ」

やった。

メールじゃなくて直接誘われるのは始めてだ。うれしい。相手が雪村さんだとなおのことうれしい。

前髪状態の私が前回断ったこと、インドア派っぽい見た目なこともあつて誘いにくかつただろう。それに、雪村さんとは中学時代、いっしょに遊んだことはなかった。お互い名字で呼び合う程度の浅い付き合いだったんだ。

そんな関係が深まった気がする。なぜ、という気持ちより嬉しい気持ちの方が大きい。

「行く」

「即答!？」

「い、行かせてください、お願いします」

「謙虚！ いやー、よかつたねあおい！」

「ほ、ほんとにいい？ 初対面の人とかいるけど……」

「大丈夫」

初対面についてもここなちゃんとかえでさんだろう。前髪状態で会うのは初めてだけど、あの二人なら大丈夫だ。

雪村さんはほつと胸をなでおろして、明るい笑顔。

「よかつたー。実は山本さんに会ってほしい人がいてね」

「会ってほしいひと」

「うん。マヤちゃんって言って、山本さんにそっくりなんだよ」

「ひよえっ」

「ひよえ？」

二人が首をかしげると同時、チャイムがなる。担当教員が入ってくるなり号令がかかり、授業が始まった。

変な声も出るってものだ。なんとたつて雪村さんのあの笑顔、登山スタイルと前髪の私の両方が参加することにとっても喜んでいるようだった。どっちかが欠ければ、きつとがっかりするだろう。

雪村さんに喜んでもらうため——今度こそ、分身の術を習得してやる！

——
某トークアプリにて。

『かえでさん』

『タイムマシンってどこにありますか？』

『はいはい。それで何やらかしたの？』

『なんならいっしょに謝りに行こうか？』

『いえ』

『すみません、現実見ます』

——
約束当日。

前髪を下ろした状態の私は、雪村さんと倉上さんに連れられ、学校から直接待ち合わせ場所へ向かっていた。

倉上さんが残念そうに口をとがらせる。

「ちえー、マヤちゃんも来ればいいのに」

「仕方ないよ。外せない約束があるって言ってたでしょ」

「そうだけどさー」

「……」

はい、とても現実的な運びになりました。

登山スタイルの私が『ごめん、その日は外せない約束があるから』とメールを送ったときには罪悪感でのたうちまわってしまった。一応嘘ではないんだけど。

でも難しい問題や辛いことがあると現実逃避するのは私の悪い癖だ。そう考えると、現実的に分身の術を諦めた今回の選択は成長だと思おう。よくやった私。

しかしこれだけ重い葛藤をしなきゃならないなら、そろそろこの二重生活も辞めた方がいいかもしれない。二重生活を利用した二つの面白いことを試したら、後はみんなの驚くタイミングで劇的にバラして終わりにしよう。

「そのマヤさんって、どんな人？」

面白いことの一つ目。他人からの評価を聞く。なんだか盗み聞きしてるようなスリルがある。

登山スタイルの私は陽キャだし、たぶんマイナス評価にはなっていないはず——

「んー、そそつかしくてほっとけない人、かなあ」

「それとノリが良くて面白い人だね！一言で言えば」

「天然ポンコツ」

「誰がポンコツだ！」

「え？」

あかん、誘導尋問や。この二人実はもう気づいてるんじゃないかなろうか。

ごまかし方を考えつくより早く今回の待ち合わせ場所が見えてきたので、「着いたね」と強引に話を切って歩調を早めた。

キャンプと聞いてどこのキャンプサイトに行くのかと思えば、倉上さんちの広い庭だった。もともとは山へキャンプに行くはずが、雪村さんのお母さんが危ないからと反対したので、勝手知ったる幼馴染の

おうちにお泊り会することになったとか。

そんなこんなで到着した倉上さんちの外観は、

「でっかい」

思わずそうつぶやくくらいの豪邸だった。

なんちやらLDKとか何坪とかは知らないけど、これ家？ 宿泊施設とかじゃなくて？

小学時代の林間学校で泊まったペンションより大きいんですが。

あつけにとられる私とは違って、雪村さん、倉上さんの二人は慣れた足取りで大きな玄関の方へ向かっている。

「ただいまー！」

「お邪魔します」

「お、お邪魔します」

「おかえりひなた。おや、あおいちゃんと——」

「や、山本といいます。よろしくお願いします」

玄関に入った途端、優しそうなお父さんが出迎えてくれた。人見知りを発動しながらもどうにかあいさつすると、お父さんはなぜか私の方をまじまじ見つめている。

「もーお父さん、あんまり見とれてるとママに言いつけちゃうよ？」

「ば、バカ、そんなんじゃない。すまないね山本さん、どこかで会ったような気がしたんだけど、気のせいだったよ。ゆっくりしていいからね」

「は、はい」

その後、倉上さんが家のどこからテント一式を引っ張り出してきて、三人で庭へ。

すると、畳んだ状態のテントを抱えた雪村さんがふと「そういえばひなた」と声をあげる。

「今朝はよくもやってくれたわね！」

「え、何の話？」

「夢の話よー！」

ふむふむ、冷房をつけっぱなしで寝てた雪村さんが、倉上さんと雪山に登っている夢を見た。

倉上さんは途中で力尽きた雪村さんを置いて、「頂上に着いて女子力アップ、一人だけモテモテになってくるよ!」と行ってしまったと。

「ね、酷いわよね、山本さん!」

「山に登っても女子力はないと思う……」

「そこ!?!」

「勝手な夢見て文句言われてもねー」

「日頃の行いが夢に出てくるの!」

夢の中でさえ仲良しかこの二人。妬ましい。

ちなみにどこの山のとっぺんにも女子力は置いてないと思う。根拠はかえでさんと私。

あんまり二人にノロケられても反応に困るので、さっさとテントの設営を始める。グラウンドシート敷いて、風向きにあわせてテント広げて、フレーム通してペグ打って――

「山本さんすごく手慣れてるね?」

「うん、あおいより筋がいいよ!」

「むっ」

「そ、そそそそう?」

しまった、前髪状態の私らしくないムーブだった。

テント設営には割と慣れている。というのも、山行中に天気が荒れてビバークを強いられることがしょっちゅうあったからだ。緊急時のビバークなんて普通は百回に一回あるかどうからしいけど、なぜか天気が荒れる不思議。

程なく五人は入れそうなドームテントが完成。

すると、玄関の方から二人歩いて来ているのが目に入った。ここなちやんとかえでさんだ。飯盒炊きさんで使う食材を手にさげている。

ここからが正念場だ。

私はこの二人に対し初対面を演じなければならぬ。二重生活のネタばらしで一番面白いタイミングはここじゃないのだから。

「マヤさん! 今日来れないって聞きましたけど、来てくれたんですね。うれしいです!」

「どうしたのその前髪。イメチェン? 目が悪くなるわよ」

「「えっ」」

エスパーかこの二人。

沈黙の中、最初に口を開いたのは雪村さんだった。

「えっと、二人とも。この子は山本さんって言って、マヤちゃんとは別人——」

「うん、だからマヤちゃんでしょ？ 山本マヤちゃん」

「いつもと呼び方が違いますけど、何かあったんですか？」

「ええっ!？」

当然のように言い返すかえでさん、ここなちゃん。

続いてひなたちちゃん、「あ」と何かに気づいたような声。

「そういえばあおい。山本さんの下の名前は知ってる？」

「当たり前でしょ。マヤ……あーっ!？」

人生は思うようにいかない。山行の計画をたてても天気は荒れし、ほしい山道具はセールになっても微妙に予算より高いままだし、何かやらかしてもタイムマシンや忍術はない。まったくなんて厳しい世の中なんだろう。

でも今回ばかりは譲らない。

勘違いから始まった二重生活、こんなにおいしいネタを面白くオチさせずにいられるものか。

そしてそのタイミングは今じゃない。どうにかこの場をしのいで最高のオチをつけるんだ！

四人の視線が集まる中、私はここなちゃんとかえでさんにペコリと頭を下げる。

「ど、どうも初めまして。山本といいます。よろしくお願いします」

「んー……この前のトマトソースのリゾット、おいしかった？」

「最高でしたけどちょっと食べすぎました」

「フレンチトーストは？」

「同じく最高です。改めてごちそうさまでした」

「はい、お粗末様。ね？ マヤちゃんでしょう？」

「ええーっ!？」

「みなさん何をそんなに驚いてるんですか？」

誘導尋問再び。前髪状態の私が飯能河原での昼ごはんメニューまで知る機会はなかった。あおいちゃんとひなたちゃんの反応からして、詰みだ。

ポケットから取り出したゴムで前髪をくくる。ついでに腹もくくる。あおいちゃんズにくるりと向き直る。

「山本マヤだよ。改めてよろしく」

なぜあんなことを？

別人扱いにムシヤクシヤしてやった。反省はしていない。

教えてくれてもよかったのでは？

一番おいしいタイミングでバラそうと思っていた。やりたいこともあった。

やりたいこととは。

双子のトリック。登山スタイルと前髪スタイルの私を双子ってことにして、完全犯罪してみたかった。

「相変わらず微妙にズレてるのよね、マヤちゃん」

夕食のお昼ご飯を食べながら、かえでさんは呆れ声でそう言った。

一時間ほど前のこと。望まない形でのネタばらしをした後、時間も押していたので飯盒炊さんによるカレー作りを始めた。かえでさんと私の女子力はちよつとアレなので、もっぱらご飯炊き担当。カレー本体はあおいちゃんとここなちゃんによる女子力組でおいしくできあがった。あれ、ひなたちゃんって何してたっけ。

いざ食事が始まると、カレーがおいしかったり、サラダにかけるマヨの量が話題になったり、私の件についてはもうスルーされるものと思っただけど、やっぱり追及はされた。

取調べ中の容疑者気分でみんなからの質問に答えていたら、急にか

えでさんが言ったんだ。微妙にズレてると。

「どういうこと？」

「マヤさん、そのトリックは一人だと思ってた人が実は二人いるからできるんですよ？ マヤさんの場合は逆です」

「……ところで、カレーおいしいね」

「ふふっ、そうですね」

恥ずかしすぎる勘違いで顔が熱い。ここなちゃんの優しい微笑みも、かえでさんのニヤニヤ笑いも、あおいちゃんとひなたちゃんの驚いた顔も、みんな見てて辛い。穴があつたら入りたい。

「でも山本さ……マヤちゃんにそんな一面があつたなんて。なんで学校でキャラ変えてるの？」

「学校に行くとき無意識にああなつちやうの……」

「ていうかあおいは気づきなよ！ 中学で三年いつしよだったんでしょっ…」

「それはまあ……ごめん、マヤちゃん」

「まあまあ、別に誰が悪いって話でもないでしょ」

かえでさんの言う通り、誰が悪いわけでもない——のかな？ といつても私はノリで友達を騙していたわけで……いやでもテンションの違うだけの私が新しく友達になっただけだから……

二重人格、ドツペルゲンガー、キャトルミューテイレーション……

「わわっ、マヤちゃんの頭から煙が！」

「もう仕方ない子ね。お水飲む？」

あかん、自分でややこしくしたのに状況がつかめなくなってきた。かえでさんから渡された水を飲んで知恵熱を鎮める。

「簡単に言えば、今日から改めてよろしくってこと。それでいいじゃない」

「なるほど！ よろしくね、あおいちゃん、ひなたちゃん！」

「よろしくお願いします！」

「よ、よろしく」

「ごちうこそ！ さすがかえでさん、扱いが手慣れてますね！」

何はともあれ、みんなが笑顔。改めてよろしくしたし、なんといいっ

てもカレーがおいしい。かえでさんの言う通り、悪いことは何もない。

夕暮れ時に始まった楽しい夕食会が終わったのは、日が沈んですっかり暗くなってからだった。

楽しい嬉しいといっても、人生楽あれば苦あり。辛い瞬間は唐突にやってくるものだ。

そのことを実感したのはみんなお風呂をいただいて、後はテントにこもって寝るだけというタイミングだった。

そろって広いリビングでくつろいでいると、ふらつと現れたひなたちゃんのお父さんと目があう。

「ああ、思い出した！ マヤちゃんか！」

「へ？」

なんだか久しい誰かを思い出したような口ぶりだ。私の方は覚えがない。

「大学時代は君のお父さんにお世話になった。僕も登山が好きでね。まだ小さいマヤちゃんを連れたあの人といっしょに山へ行つたこともある。ああ、やつと思ひ出せた」

「へー！ すっごく偶然だね！」

あおいちゃんをはじめ、みんなが目を丸くして私に注目した。私もびっくり。山に行くときは小さいときからちよんまげスタイルだから、前髪状態だと気づかなかつたんだろう。

私の方は覚えてないけど、ここは大人になつて――

「そのせつはおせわになりました」

「ははっ、無理しなくていいよ。まだ小さかったからね、覚えてないのは当然さ」

逆に気を遣われた。これが大人か。

「懐かしいな。卒業してからはお互い忙しくて、少しずつ疎遠になつてしまったんだ。どうだい、あの人――お父さんは元気かい？」

「……はい、まあ、けっこう元気でやってると思います」

私は空気を読むのが苦手だ。

学校での私はもちろん、登山スタイルの私でも何気ない言葉一つで場の空気を死なせることがある。大きなコンプレックスの一つだったけれど、高校生になつてからは少しずつ良くなつてきたと思う。

その成果がここに実つた。もう陽の者を名乗つていいのではなからうか。

「それは良かった。お父さんによろしくと伝えておいてくれ」

「はい、きつと」

「じゃ、おやすみ」

おやすみなさーい、とみんなで返事するとあおいちゃんのお父さんは二階へ姿を消した。

「マヤさん、大丈夫ですか……?」

「え、何が?」

「……っ」

ここなちゃん、頼むから今優しくしないで。辛そうな顔をしないで。何のために空気を讀んだんだか、何のために楽しい空気を守つたんだかわからなくなつちやう。

「ちよつとトイレ行つてくるね」

ひなたちゃんちの家は広く、トイレまでの道筋も長い。フラフラと何度もつまずきそうになりながら、一人になれる空間にたどり着いた。

ひなたちゃんのお父さんは私のお父さんと仲が良かったらしい。そんな相手に嘘をついた罪悪感と、目を背けてきた現実がいつべんに押し寄せてきた。うーん、空気を読むのってしんどいことなんだなあ。日頃からこんな苦勞をしている陽キヤが魅力的なのも納得だ。鍛えられた心が外面に出てるんだらう。

とはいえ、陰の者たる私でもさっきの嘘は悪くないと分かる。

まさか正直に、

「お父さんは事故でぽっくり逝きました。お母さんは蒸発しました」

なんて言えるわけもない。間違いなくお通夜みたいな雰囲気にな

る。

……。

考えていたら落ち着いた。

早く戻らないと事情を知っているここなちゃんに心配をかけてしまふ。呼吸ヨシ、目元ヨシ、メンタルヨシ。人生山あり谷あり、でもこのくらいの上ヨックは山でも谷でもない。辛い現実があるなら目を背ければいいだけさ。現実逃避は得意なんだ。

一度深呼吸して、扉を開ける。

「マヤさん」

「……」

そのとたん、全身が柔らかい感触に包まれた。甘いシャンプーの香り。ここなちゃんに抱きつかれている。

「大丈夫、みんな気づいてません。だから——無理しなくていいんです」

何一つ思い通りにいかない。要領が悪くてうまくことを運べない。目を背けたくなる現実はそこら中に転がっていて、私はしょっちゅう目をそらす。

けれど私には登山がある。陽キャ願望もある。友達だっている。私のために声を震わせて、必死でハグしてくれる子がいる。

だから思えるんだ。

もう少し頑張ってみようって。

第6話

校舎裏は学校公認の無法地帯だ。

ヤンキーが気に入らない生徒を連れ込んで根性焼きしたり、カツアゲしたり、仲良しになりすぎた教師と生徒が禁断の愛的なものを楽しんだり。例を挙げればきりが無いけど、とにかく公にはできない後ろ暗い何かをするために設けられた治外法権エリアとして機能している。私のような小心者は近づいたことさえない。

「ひええ……命だけは勘弁してください」

「なんで!？」

そんな暗黒無法地帯たる校舎裏で、私は介錯されかかっていた。

結構仲良くなれたと思っていたのに、まさかひなたちゃんに殺されることになるうとは。命乞いしても「なんで（生かしておく必要があるだろうか、いやない）」と容赦がない。

どうしてこんなことになったのか。

校舎裏に連れ込まれるまでのいきさつが、走馬灯のごとく回想される――。

——

このの始まりは十数分前、午後の授業を終えて帰り支度をしているころだった。

いつものようにひなたちゃんと私があおいちゃんの席に集まると、「あ、そうだ」と出し抜けにあおいちゃん。

「マヤちゃん、今度行く山のことひなたに聞いた？」

「山。ううん、聞いてない。どこいくの？」

「それがね、場所は内緒ってひなたが」

「へー」

ひなたちゃんの方を見ると、ややバツが悪そうに苦笑いしている。「ごめん、マヤとは今日直接口裏を――じゃなくて、知らせようと思っただけだよ。いつでも言えるって思って後回しにしちゃった」

そういえば昨日ひなたちゃんの家が集まって何か話し合いがあったらしい。私はバイトがあつたから不参加だけど、この件の話し合いをしていたのかも。ハブられたんじゃないかってよかった。

「もう、ひなたはがさつなんだから。忘れないうちにここで言っちゃえば?。」

「おっと、私の口を割ろうつたってそうは行かないよ。マヤには後で教えるね」

「は、はい」

後でと言われても気になる。高尾山用の装備で出向いたら北岳に着きました、なんてことは避けたい。うーむ、登山経験の浅いあおいちゃんでも登れて、楽しめる山と言えば――

「それにしてもあおい、今日はなんか機嫌いいね。どしたの?」

「えっ!? そ、そんなことないよ」

考えていると、あおいちゃんがチラチラ私の方を見てきた。たしかにいつもより声が弾んでいて嬉しそうな印象。

実は私も嬉しかったりする。今まであおいちゃんと登山の話をするには、学校の外か使い捨てフリーメールを使うしかなかった。こうして学校でおおっぴらに同じ趣味の話ができるのはうれしい。

あおいちゃんも同じ気持ちだったらもっとうれしいな、なんて。

「……」

「……」

「むー、何二人でいい雰囲気になってんのよ!?!」

ひなたちゃんが怒り出した。いけない、こうしてすぐに調子に乗っちゃうのが私の悪いところだ。気を取り直して私は「北岳!」と声をあげる。

「マヤちゃん?。」

「し、知ってる山の名前言えば、当たるかなって」

「ふふん、山ってすつごくたくさんあるんだよ。あてずっぽうじゃ分かんないよ」

そりゃそうだ。飯能からアクセスしやすい範囲だけでも山は無数にあるし、そのうち私の知っているのはほんの一握り。当たったらひ

なたちちゃんの思惑が台無しだから当たらなくていいけど、言うだけなら損はない。気分はお祭りのくじ引き屋台。

「毛無山」

「ぶぶーっ」

「御正体山」

「ちがいまーす」

「三つとう——」

「あぁーっ！」

くわっと目を見開いたひなたちちゃん、私の腕をつかむ。ついでに私は口も塞がれて声も出ない。

「マヤに大事な用があるの忘れてた！ ごめんあおい、先帰ってて！」

「ええ!? ちよっ、ひなた!?」

「ほんつとごめん！ また明日ー！」

こうして私は校舎裏に連行され、その道中で悟った。

次に登る山、当てちゃった。

さて校舎裏という世紀末エリアにおいて、ヤンキーでもスケバンでもないひなたちちゃんが私にすることは何か？

この問いの答えが「暗殺」ないし「介錯」であることは自明。

だから私は命乞いします。

「命だけは勘弁してつかあさい……」

「だからなんで!?!」

なんで生かしておく必要があるのか、とひなたちちゃんの考えは変わらないようだ。お父さん、私もすぐにそっちへ——あれ？

「マヤはたまにトンチンカンなこと言うよね」

うつむけていた顔を覗き込まれる。ひなたちは呆れ顔だった。無慈悲な処刑者の顔じゃない。

「あ、あおいちゃんと仲良くしすぎた容疑と山を言い当てた容疑で死刑、かと」

「へー、私がそんなに残酷なやつに見えるんだ。——ほんとに処しちやおつかなあ」

「ひえっ」

「ぷっ、あはは、冗談だつて!」

心臓に悪い冗談だなあ!

「あおいって人と話すの苦手だからさ。中学でも仲良い子がいたのはむしろうれしいよ」

「はあ」

「それと三つ峠山のこととはまあ……たぶんまだバレてないと思う」

「うん……なんでいちいち内緒にしてるの?」

気になっていたことを尋ねてみると、どうやらあおいちゃんにサプライズを仕掛けるつもりらしい。この前のテント泊であおいちゃんが富士山に興味を示したから、「一見何の変哲もない山を登ると見せかけて、どどーんと頂上から富士山を見せてあげる!」というサプライズ登山をしたい、と。

相変わらずあおいちゃんのこと大好きだな、ひなたちゃん。

「と、いうわけ。どうかな?」

「……キツそう」

どう、と聞かれれば普通にキツそうだ。

なにしろ富士山は大きい。場所によっては飯能からでも見えるし、乗り換えが多くて路線は忘れたけど、三つ峠山に向かう電車の中からも、駅から登山口までの道中からでも見えたはず。山頂まで富士山を見せないのは難しい。

「そっかー。でもそれだけ知ってるママがいつしよなら心強いね!

三つ峠登ったことあるの?」

「へ? あ、あるけど、その」

「じゃあ富士山が見えそうなとこ教えてよ! ごまかし方考えとくから」

「教えるけど、だからね」

「もー何よさつきから!」

くっ、陽キャ特有の圧力で言い出しにくい。でもこれだけは言っ

おかないと。

「私、今回不参加」

「……!?」

当然のように頭数に入れられてるようだったけど、三つ峠には行けない。

というのもお金がないんだ。あおいちゃんたちと遊びに行ったり一人で低山に登っておやつを食べたりしているうちに貯金が尽きた。いいかげんバイトをがんばらなきゃ冗談抜きに飢えちゃう。

そこまでお金を使い込む私が悪いわけじゃない。友達と遊ぶのが楽しすぎるのが悪いんだ。私は悪くない。

ということをおブラウトに包んで伝えると、ひなたちゃんは「そっかー」とがつくり肩を落とした。

「分かったよ。バイトがんばってね」

「うん、ありがと」

「そうそう、それと」

何かを思い出したようにひなたちゃん、私の目をじっと見つめる。私の方からは前髪フィルターでぼんやりとしか見えない——ああ、これは目じゃなくて前髪を見られてるな。いかにも前髪をめくりたそうに手をウズウズさせている。

前髪は心のバリア、陰キヤの私が学校で前髪をめくられると路上のミミズみたいに干からびてしまう。

でも焦る必要はない。ひなたちゃんは距離感を弁えた子だ。いたずら心で私の嫌なことをする悪い子じゃない——

「えいつ」

「?!?」

視界が開けた。ひなたちゃんの顔がクリアに見える。

前髪がめくられたと気づくのに遅れて気づくと、声にならない悲鳴が喉からもれる。

反射的にバックステップするけど、すぐ後ろが壁だった。ひなたとの距離は変わらない。

「ちよ、おま、ひなた貴様！ 自重しろ莫迦！ 前髪だぞ！」

「うんうん、やっぱマヤはそっちの方がいいね」

したり顔でうなづくひなた。少しは悪びれるよこの女。

「前髪下ろしていると声がボソボソしてるし卑屈だし、話しくいんだもん。そっちのキャラのほうがいいよー」

「かわつ……!? やかましい！ これがどれだけ恥ずかしいか分かる!? 人前でパンツ丸出しにするくらい恥ずかしいんだよ!」

「へー。じゃ私のスカートめくっておあいこにする?」

「是非とも!」

「マジで!」

どうして学校で登山スタイルの私になるのが恥ずかしいのか、理屈じゃ分からない。でもひなたに受けた辱めと恨みだけははつきりしている。じゃあお言葉に甘えて報復するしかない。

ひなたに飛びかかると両手を四つに組み合い、お互いぐぬぬと力比べに。体格差のせいかな私は徐々に押しやられ、壁に両手を押さえつけられた。

ひなたの顔が近い。さらさらの髪の毛、長いまつげ、もちつとした白肌に健康的な唇がよく見える。陽キャな上に美少女とかずるくないだろうか。

気恥ずかしさと悔しきで目を背けようとしたそのとき、ひなたが困ったように笑う。

「私はこっちのマヤの方がいいと思う。でもほんとに嫌だったなら謝るよ。ごめんね」

「べつ、別に……嫌じゃ……」

あれ?

確かに前髪をめくられたのはすごく恥ずかしかった。なのになぜか嫌な気持ちはしない。むしろ楽しいときさえ思う。

前までの私なら、「陽キャにコンプレックスをいじられたアアアアアアア!」と（心の中で）絶叫して逃げ出し、ふて寝するくらいはしたはず。実際中学のときはそうだった。

そんなことをする気さえ起きないということは——分かった。

たぶんこれが友達とのじゃれ合いなんだろう。

「嫌じゃない。ひなたなら、いいよ……」

「そう？ よかった！」

ひなたマイフレンド。

第一印象は我が同胞たるあおいちゃんを奪う忌々しい陽キャだった。そんな彼女を友達と思える日が来るなんて思いもしなかった。今日はいいい日だ。

「ひ、ひなた、マヤちゃん……!?!」
いい日だ。

たとえ校舎の角から顔真っ赤のあおいちゃんがこちらを覗いていても。ひなたが私を壁に抑えつけて正面から見つめ合っている状況が、どんな風に見えるとしても。

「あおい!?! あ、えっと、これはそういうのじゃなくて」

「だ、だ大丈夫! 私は何も見てない、見てないからあー!」

「待って、あおいー!」

すぐくややこしい誤解をしたあおいちゃんを、ひなたが追いかけていったとしても、今日がいい日なことは変わらない。

バイト、頑張ろ。

バイトつまんない。働きたくない。

どれだけつまらないかというところ、もし私の一人称で進む小説があれば、全編カット間違いなしくらいつまらなかった。

「将来の夢はニートです……」

日曜の夜七時、六畳の畳みの上に倒れ込みつつ夢を語る。誰か私を養ってほしい。親くないし、親権持つてる親戚の援助も二十歳でなくなるから働くしかないんだけども。

働きたくないなあ。コミュニケーションが苦手で要領が悪い私には、単純労働くらいしかできないことがない。でもそういう仕事って給料が低くてつまらないことが多い。辛い。

でもいいことが一つだけあった。

職場を仕切ってる社員さんの一人がすごくいい人だったんだ。

名前は青羽さん。私がおかやらかしてもすぐにフォローしてくれて、怒鳴らずに分かりやすく諭してくれる。話すのが苦手な私によく話しかけてくれたおかげで、他の人とも話す機会ができた。

あんまり優しいから不思議に思っていると、「マヤちゃんと同じくらしいの娘がいてね。なんかほっとけないの」とのこと。こんなにいいお母さんの娘さんなんて、きつと天使みたいにいい子なんだろう。夜遅くまで娘さんのために残業するその姿は母親の鑑。世のダメ母は見習ってほしい。

おい聞ってるか母上。お父さんの通夜当日に口座のお金まるっと引き出してドロンした我が母上。青羽さんを見習ってくれ本当に。

……いや、無茶な話か。こんなに暗くてめんどさくい子を女手一人でわざわざ育てようなんて、やりたくないのがきつと普通。お母さんは普通の人だったってことだ。

「……むむ」

いろいろと疲れて動く気もせず、畳の上をゴロゴロしていると、スマホの通知が鳴る。

あおいちゃんから写真が二枚送られて来ていた。

タイトルは『登頂!』。三つ峠山から望むきれいな富士山と、富士山をバックにあおいちゃん、ひなた、ここなちゃん、かえでさんが笑顔を見せる集合写真の二枚。無事に登れたみたいでよかったよかった。写真の後にはメッセージが添えられていた。

『今度はいっしょに登ろうね!』

「……生きよう!」

平日の新聞配達と土日のフルタイムでお金は貯まった。この予算があればいくらでも遊べる、なんなら富士山だって登れちゃう。

全力で遊び、生きる!

第7話

三つ峠登山の終わった次の週、私は帰り道の公園でクレープを買い食いしていた。背後には謎の象さんオブジェ、左隣にはひなた、あおいちゃん、ここなちゃんが並んで座っている。

「それでね、行きは怖かったんだけど帰りは全然怖くなくて。ああいうことってよくあることなのかな？」

「あ、あるある。一回乗り越えて自信がつくんだと思う」

「そうなんだ」

話題はもちろん昨日の三つ峠登山。あおいちゃんは結局道中でサプライズに気づいたものの、なんだかんだ楽しく登山できたらしい。行きは怖かった危険箇所が帰りだと怖くなかったとか、下山後にみんなが入った温泉が最高だったとか——ん？

「どうかした？」

「何でもない」

あおいちゃんも変わったなあ。

たしかあおいちゃんは誰かとお風呂に入るのが苦手だった。中学時代の修学旅行では就寝時間が過ぎた後にこっそりお風呂にやってきて、同じくこっそり一人でお風呂に入ってた私と遭遇。びっくりしてお互い腰が抜けかけたことがあった。

そんなあおいちゃんがみんなでお風呂とは——登山パワーってすごい。

同胞の変化に一人でしみじみしていると、ここなちゃんが口を開いた。

「マヤさんはバイトどうでした？」

「私、将来はニートになるんだ……」

「うわっ、一気に目が死んだわね。大丈夫？」

「聞かないほうがいいみたいだねー」

怒鳴る先輩、かける迷惑、学習できない私と終わらないラスト一時間——嫌なことを思い出しちゃった。登山でもして山キメたいけど、考えなしに登山してるとすぐにバイト代が吹っ飛ぶ。登山は計画的

に。

ちなみにクレープの買い食いには何の計画も考えもないけど、このくらいいいでしょ。金はあるんや。

「ひなた、ほっぺたにクリームついてるよ」

「ホント？ ……とれた？」

「とれてない」

ふと横を見ると、ひなたのほっぺたにクリームがついていた。あおいちゃんの指摘を受けるも微妙に狙いを外している。ぷにとした白い頬の上についたクリームは、なんだかクリーム大福みたいでおいしそう。

「んー？ マヤ、とって」

「よしきた」

舌でぺろつとなめとりたいのをこらえて普通に指でとって口に運ぶ。うまい。

「ありがとう」

「ごちそうさーごちそうさま」

「まあ、お二人とも仲がいいんですね」

「……仲いいっていうか、近くない？」

不意にあおいちゃんの目線が痛くなる。じとつとした目つきからは懐かしい陰の者のオーラ。あれ、何か間違えたかな。

「マヤちゃん、私にはちゃんづけなのひなたは呼び捨てだし……ひなたもマヤちゃんをマヤって呼ぶし」

「そういえばそうだね。いつからだっけ、マヤ？」

「さあ……」

明確にいつからかは覚えてないけど、ひなたはちゃんを付けるほど可愛い生物じゃない。なんたって学校で私の恥部たる前髪に手を出す輩だ。その点、あおいちゃんは安心してちゃん付けできる。

だから決してやましい意図はないのだけれど——視線ビームが痛い。

（ちよつとひなた、誤解はちゃんと解いたんだよね？）

（解いたよ！ あの後私一人で説明するの大変だったんだから！）

アイコンタクトでひなたと交信していると視線が更に強くなる。ひなたはどこ吹く風で首をかしげているけど、同胞からの攻撃で私のメンタルに穴が空きそうだ。

しかしここで救いの女神降臨。

「ま、まあまあ、あおいさん。あつ、ところでアレは完成しましたか?」

「あれ?」

「必殺技?」

女神とはもちろんここなちゃんだ。あおいちゃんは「ああ、アレ?」とここなちゃんに向き直る。

アレというと、必殺技でも練習しているのかな。

「あとちよつとで完成だよ。手伝ってくれてありがとね、ここなちゃん」

「それは良かったです! 喜んでもらえるといいですね!」

「ねえ何の話?」

「必殺技練習してるの?」

「二人には関係ないでしょ。マヤちゃんはもう意味分かんないし」

中学以来の同胞に意味分かんないって言われた……それはさておきクレープがおいしい。

結局「アレ」についてはその後も分からなかったけれど、ここなちゃんの機転のおかげでそれ以上睨まれることはなく、いつもの解散場所である分岐路までやってきた。

いつものように、ここなちゃんと私、あおいちゃんとひなたの二組に分かれてまた明日――

「うわっ!」

「ひなたさん!」

とはならなかった。

なにかにつまずいたひなたが、あおいちゃんのスカートの手をかける。そのまま下ろしてあおいちゃんパンツ丸出し、通りがかりの園児からは「水玉だねー」とシンプルな評が炸裂した。

「ひーなーたー!」

「ごめーん……まあいいじゃん、減るもんじゃないし」

「そういう問題じゃない！ もう！」

「あ、あおい！ しょうがないな……ちよつと謝ってくるよ」

怒り心頭で行ってしまふあおいちゃんだけど、ひなたは普通に落ちていた様子で追いかけていった。凶太い。

「悪びれないなアイツ……」

「二人は仲良しさんですからね。お互い慣れてるんじゃないですか？」

「そ、そうかな？ ……そうかも」

そういえばひなたは昔から何かをやらかしてあおいちゃんを巻き込んでいたらしい。溝に落ちる、あおいちゃんのスカートをずり下ろす、好きな人をみんなの前で暴露する——いややらかすすぎでしょ。

とはいえ、それだけやらかして今みたいに仲良しなら、今回の件もこじれたりしないはず。大丈夫、大丈夫。

「行く、ここなちゃん」

「はい。マヤさんは北岳は登ったことありますか？ そこに雷鳥さんがいるらしいんですけど——」

ああ、学校で友達とおしゃべりして、帰り道は買い食いしつつ楽しいおしゃべり——学校ってこんなに楽しい場所だったんだ。軽く不登校してた去年の自分に教えてやりたい気分だ。

学校生活、最高。

学校生活、最悪。

「ねえあおいってば——！」

「ふん。行く、マヤちゃん」

「あ、あおいちゃん……アワ、アワワ」

スカートずり下ろし事件の翌日の昼休み、私はむすつとしたあおいちゃんに手をひかれ、教室を出る。後ろからはひなたが呼びかけるけど、あおいちゃんは無視している。

しばらく追いかけてっこしていると、ひなたは拗ねたように手を頭の

後ろで組んで踵を返した。あおいちゃんは階段をあがって、閉鎖された屋上前の踊り場でようやく足を止める。

帰りたい。

仲良くしている二人を見るのに比べ、仲違いしている二人を見るのがこんなにキツイなんて。しかもその原因がパンツ丸出しなんだから笑えばいいのか泣けばいいのか。

「あ、あおいちゃん」

「何」

「水玉パンツは、人に恥じるようなものじゃなくて、むしろ胸を張るべき柄だと思う……」

「……！ バカー！ 違うわよー！」

原因はパンツ丸出しじゃなかった。

丸出し事件の後、ひなたがあおいちゃんの家まで謝りに行く。二人は仲直りして家で遊ぶことになったけど、あおいちゃんが少し目を離れたすきに、ひなたが作りかけの手芸ニツトを壊した。そのことを怒っているらしい。

うーん、何かがおかしい。

「……？ あなの」

「何!?!」

「な、なんでもないですごめんなさい!」

怒ったあおいちゃんの迫力はすさまじかった。とても違和感について聞ける雰囲気じゃない。

教室に戻ってひなたと顔を合わせるのも気まずいので、そのままここで弁当を食べることになった。

教室よりもほこりっぽくて、あまりおいしくなかった。

放課後になってもあおいちゃんの機嫌が良くなることはなく、むしろ悪化していた。

ホームルームが終わった直後、のっしのっしと私の席まで歩いてき

て、「帰ろ」と一言。

「ねーあおいってば、いいかげん許してよ」

「……」

そこへひなたがやってきて私は仲違い中の二人に挟まれる精神的拷問にさらされる。いつそ殺して。

いやいや死にたがってる場合じゃない。能天気なひなたが比較的申し訳なきような態度をとってる好機を少しでも活かさないと。

「そ、そうだよあおいちゃん。怒るのはもつともだけど、まず話し合ってみて——」

「マヤちゃんはどっちの味方なの」

「え、えつと……」

「ふんだ。もういいもん」

そう言つて一人、教室を出ていくあおいちゃん。

あんなに冷たい目で見られたのは初めてだ。ガレ場で浮石を踏んだような絶望感。クラスメイトたちの「ケンカかな?」「珍しいね」という囁きがやけに大きく聞こえる。

「あおいのやつ、あんなに怒らなくていいのに。ね、マヤ」

「ひなた……どんだけ凶太いの」

「そんなこと言つても、いつもはこんな感じで謝つて許してくれるんだよ?」

「うーん、いろいろ言いたいことはあるけどそこ。そこが気になる」

「どっ?」

「あおいちゃんが怒りすぎなところ」

あおいちゃんはひなたのやらかしに慣れている。じゃないとパンツ丸出し事件を一時程度で許すなんてできない。私なら切腹を考えるレベルの屈辱だもの。

そんなあおいちゃんが作りかけの手芸を壊されたことに怒りこそすれ、あれほど根に持つのは不自然だと思う。

「そうだけど……あおいがああ調子じゃ何も分かんないじゃん」

「う……」

「はーあ。もういいや。謝つても許してくれないんじゃないじゃ何もできない

よ。許してくれるまで待とう。マヤも気を遣わせてごめんね。私のことはいいからさ、あおいについてあげてよ」

「は？　ちよ、待って——」

「じゃ、またね」

ひなたまでそそくさで行っちゃった。去り際の表情は明らかに寂しげで、今にも泣き出しそうに見えた。

私だって泣きたい気分だ。どうしてあおいちゃんとひなたみたいな仲良し二人組がしっくりこない事情で仲違いしなきゃいけないんだ。正面からぶつかるのはいい。でもこんな冷戦状態は絶対ダメだ。といつても不機嫌状態のあおいちゃんにしつこく聞くのは怖いし、ひなたは柄にもなくしよげ返ってて何もできそうにないし——

「あれ？　山本さん？」

「急に寝ちやったね。どうしたんだろう」

「二人とケンカになって落ち込んでるんですよ。そつとしいてあげよう」

思考停止。

熱暴走を起こした私は、机に突っ伏した。中学時代、あおいちゃんと話せないときはいつもこうして寝たふりしていたものだ。陰の者にのみ許された伝統のポーズ。

一回休憩して落ち着こう。

落ち着いて考えた結果、私の考えはまとまった。
知ーらない。

だって私が何かやらかしたわけじゃないし、悪くないし。そもそも私みたいなヘタレ陰キヤが下手に動いたって余計こじれるだけ。じゃあ何もせず時間が解決してくれるのを待てばいい。

「ひなた……」

ほら、言ってるそばからあおいちゃんがひなたに声をかけ——ようとしたとたん、ひなたが駆け足で教室を出ていった。一人で帰るらし

い。

あおいちゃんはちら、と私の方を見ると寂しげに唇をかんでとぼとぼと教室を出ていった。

これが一日目の放課後の様子。

二日目、休み時間のたびにあおいちゃんがひなたの方を見るけど、ひなたは机に突っ伏して寝ていて声がかげづらい。それは陰キャだけができる伝統の、というわけじゃなく、体が呼吸で動くのを見る限り本当に寝ているようだった。昼休みはそれぞれ一人で食べていた。進展なし。

三日目、上に同じ。

四日目、同じ。

五日目——私、キレる。

「あの子誰？ 転入生？」

「でも当たり前のように席に座ってるし……あの席って誰がいたっけ」

「ほらあの地味な子。山なんとかさん」

「ああ、あの。もしかして山本さんが前髪あげてるんじゃない？」

「ええー？ 絶対違うよー」

朝、教室で席につく私の耳にクラスメイトの声が届く。前髪をあげた登山スタイルの私の話題で盛り上がっているのが聞こえる。

シラフの私なら学校で本当の自分を晒していることに耐えられないだろう。でも今の私は違う。なんとって山をキメてるんだ。

ここを学校ではなく山小屋だと思いこむことによって、登山スタイルで気が強い状態の私を召喚する禁断の秘術。これぞ山本流秘伝、山降ろし。

発動にはとてつもない代償が必要だけれど、今回ばかりは仕方ない。

「おはよう、あおいちゃん！」

「ふえ!? お、おはよう……」

教室に入ってきたあおいちゃんに詰めより、腕をつかむ。

「早速だけど話がしたいの！ 場所変えよつか！」

「ちよ」

待つてと言わせるスキは与えない。

強引に校舎裏まで連れていって有無を言わさず壁ドン。

「あおいちゃんがそこまで怒るのはなんで!？」

「そ、それは……」

「ニット帽がすごく大事な物だったから!？」

「……っ」

あ、凶星だ。仲直りの鍵はきつとここだ。

「うん……三つ峠のサプライズ登山のお礼に、ひなたに作ってた……」

「なる。よし分かった、じゃあ、えっと、その……」

詰んだ。

やばいやばい、怒ってるあおいちゃんが怖いから山をキメてゴリ押ししたけど、どうすればいいの。あおいちゃんが「こういう訳で怒ってた」ってひなたに伝えてもいいのかな。

事情さえ分かれば勢いでどうにかなると思ってたのに、人間関係が難しすぎる。どうすればいい感じに二人がよりを戻す？ どうすれば仲のいい二人がまた見られる？ どうすれば――

「ありがとう」

「えっ」

頭にふわつとした感触。あおいちゃんが私の頭に手を伸ばしている。

くすりと笑みをこぼすあおいちゃん表情は、とても穏やかだ。

「私たちのために頑張ってくれたんだね。嫌な思いさせてごめんね」

「う、ううん、そんなこと……」

「そんなことあるんだよ」

あるんだろうか。

一度は心に決めたことを覆して、勢いだけでどうにかしようとして突っ走っただけなのに、頑張ったなんて言えるんだろうか。もし言えるならうれしいけれど。

「私ももう怒ってなんかないんだ。だけどひなたがあんな調子で声かけづらかったの」

ふわりと微笑むあおいちゃん。

「でも勇気が出たよ。今日ひなたと話をしてみるね」

思ったとおりにはいかなったけれど、何もしないよりはいい結果になったかもしれない。

微笑むあおいちゃんの顔つきは、難所に挑む登山家たちのそれとどこか似ていた。

かえでさんやほのかたち登山仲間によく言われることの一つに、私の運が悪いということがある。たとえば降水確率二〇パーセントで雨に降られて山行中止になったり、緊急時のビバークが多かったり、クマさんとの遭遇率がやや高かったりなど。どんなイベントがあっても悪いのは私の運じゃなくて山のご機嫌だと思いきんできました。

だけど今回ばかりはもうダメだ。認めるしかない。

「あおい、これ……」

「な、何それ？ 編み物？」

放課後の教室で、あおいちゃんが席を立つ間もなく近づいてきたのはひなただった。

あおいちゃんに差し出しているのはなにかの編み物。

「ここなちゃんに聞いたんだ。あのニット帽のこと」

「……」

「悪いことしちゃったと思ってさ。お詫びの印、っていうのもなんだけど、これ。帽子は無理だけど、コースターにはなるかなって」

「……なんか、途中からすごい雑なんですけど」

「ここなちゃんが手伝ってくれたんだ。きれいな部分がここなちゃん」

「ぶっ、ほとんどここなちゃんが作ってるじゃない！」

ほんとにひなたは不器用なんだからー、ほんとにごめんねーと笑い合う二人。それを自分の席から眺めるおバカ一人。

私だ。

「そういえば今朝のあの子誰だったんだろうねー」

「別のクラスの子が間違えて入ってきたんじゃない？」

「雪村さんが知ってるかな。あ、でも今声かけちゃ悪いか」

まずい、山本流山なんかの代償が今になって始まった。耳が熱い。顔も熱い。ものすごく恥ずかしい。学校で前髪をあげるのは人前でパンツを見せつけるくらい恥ずかしいんだ。

後一日がまんすればこの恥ずかしさを味わうこともなかったと思うと——運が悪いというか、タイミングが悪いというか。一人で勝手に騒いだけじゃない。

……おっけー、いったん落ち着こう。

落ち着いてタイムマシンがどこに落ちてるか考えるんだ。

「マヤちゃん!？」

「マヤ!？」

少なくとも教室にはないよね。

じゃあ全力ダッシュで教室を飛び出すのも自然なことだよ。あ、あおいちゃんとはひなたは未永く幸せに暮らしてください。あさようなら。

あおい視点

『雪村さん、マイ同胞』

『ちよつと何言ってるか分かんないかな……』

私、雪村あおいと山本マヤちゃんの出会いは、そんなやり取りから始まった。

小さい頃は山に憧れを抱いていた私だけど、調子に乗ってジャングリズムから落ちて骨折。それ以来一人でできるインドア趣味にはまって、人付き合いが苦手になっちゃった。

だから中学一年のとき、体育の授業で「二人一組」って指示されたのには血の気が引いた。同じくらい顔を青くしてるマヤちゃんを見つけたときは安心したなあ。でも急に「同胞」なんて言われても反応に困るよ。

お互い友達が少なかったから、ペアワークや班活動だといつもいっしょになった。

『へー、雪村さん器用だねー』

『本に書いてあるとおりにやれば誰でもできるよ。山本さんもやらないう？』

『て、手が針山になるからやめとく』

『ふふ、何それ』

趣味の手芸に誘って断られたときは少しショックだった。けれど、家庭科の授業で本当に何度も手を針で傷つけているのを見ると、むしろよく断ってくれたと安心した。家庭科だと私が介護役みたいなポジションになった。

マヤちゃんは手先が不器用なだけじゃなくて、お弁当忘れとか何もないところで転ぶとか、いろんなことで失敗してた。その世話を焼くのが楽しくて、お姉ちゃん気分になったこともある。

もちろん私はお姉ちゃんにはなれない。そのことを思い知らされたのは三年生になったころだった。

『山本さん、ちよつといい？』

『へ？』

クラスの明るい子が急にマヤちゃんの前髪をめくりあげた。長い目隠しみたいな髪がかきあげられてあらわになった目元は、ぱっちりしてとてもかわいかった。

私が状況をつかめないでいると、マヤちゃんは見る間に顔を赤くしてすごいスピードで教室を出ていき、そのまま早退しちゃった。

明るい子はなにかの罰ゲームでちよっかいを出しに来たらしくて、不満げな顔でその子のグループに戻っていった。謝りもしなかったことに私は文句も言えなかった。友達が嫌なことをされたのに。私は悔しくて、申し訳なかった。

その気持ちを引きずったまま修学旅行に出発。マヤちゃんとは同じ班だったけどお互い口数は少ないままだった。

転機はお風呂の時間。誰かといっしょにお風呂に入りたくない私は、夜中にこっそり起き出して一人で宿泊先の露天風呂に向かった。

『何奴!?!』

『ひゃあ!?!』

浴場にいたのは変なテンションのマヤちゃんだった。腰が抜けるかと思った。

『ゆ、雪村さん……ふふ、やはり同胞。陽キャと風呂に入るなんてできないよね』

『や、そういうわけじゃないけど』

『じゃあ裸見られるのが恥ずかしいとか? どこに出しても恥ずかしくない、いい体してますぜ』

『どこから目線よ! もう、山本さんは』

旅行先ではしゃいでるらしいマヤちゃんの体には、無数の擦り傷や切り傷があった。あめるときは何の傷か分からなかったけど、今なら分かる。山でこけたり転んだりしてこさえた傷だったんだ。

そうしていっしょにお風呂に入って以来、たまにテンションがおかしくなったりドジなところがあったり、いつもと変わらない調子のマヤちゃんと接していると気が楽になってきた。

高校がいつしよなら、もつと仲良くなれたらいい。実際に高校もクラスも同じだったときは嬉しかったし、実は登山が趣味だったことを

知ったときはもっと嬉しかった。登山のことでたくさんお話しできるから。

そんなマヤちゃんが今――

「し、死んでる……」

プールの水面をぶかぶかと漂っていました。そう、まるで死んでいくかのように――ってちよつと。

「こらひなた！ 勝手にマヤちゃん殺さないでよ！」

「冗談だって！ ほらマヤ、いつまで凹んでんの」

「ぶくぶく」

まったくひなたは縁起でもない。

スクール水着姿のひなたが漂流するマヤちゃんを立たせようとするけど、マヤちゃんは空気を吐いて水没しちゃった。

水泳の授業の貴重な自由時間。水遊びを楽しんでるクラスのみんなどは裏腹に、マヤちゃんはやっぱり沈んだ様子だった。プールだけじゃなくて、教室でも机に突っ伏してたぬき寝入りしてばかり。こくなつたきつかけは数日前、私とひなたがケンカしたことだった。マヤちゃんは私たちを仲直りさせるために頑張ってくれたんだけど、その拍子に前髪をあげた登山スタイルをクラスのみんなに見せちゃったんだ。

それだけでも早退するくらい恥ずかしい思いをしたのに、結果的には必要なかったことが分かってマヤちゃんはすっかり拗ねた。一生懸命なのに空回りが多いのよね。けど、たとえ空回りでも私とひなたのために頑張ってくれたのはすつごく嬉しかったな。

不意に、ひなたがマヤちゃんを引っ張り上げる。

「マヤ号サルベージ完了！」

「ほつといて……私には水底が似合いだよ……」

「何言ってるのよ、生粋の山ガールの癖して！ ねっ、あおい！」
「う、うん」

マヤちゃんは前髪を水泳キャップの中に入れてる。学校の外で見る登山スタイルのマヤちゃんだ。

そう、マヤちゃんを水没させた決定打は水泳の授業。長い髪は

キャップにしまいなさいと普通に注意されて、ただでさえメンタルが弱ってたマヤちゃんは轟沈しちゃった。

そういえば中学のころの水泳はずっと見学して補習だけ受けてたっけ。きつと今回は拗ねるのに忙しくてサボる口実が思いつかなかったんだらうなあ。

「髪型のことともういいじゃん！　ちよつと遅い高校デビューだよ！」

「そうそう。クラスのみんなの受けもよかったし、ね？」

「……ほんと？」

ほんとほんと、とひなたと口をそろえる。受けが良かったのはほんとかだ。

水着に着替えてプールに入ったら私とひなた以外の全員から「誰!?!」とツッコまれて、点呼のとき先生にまで「誰この子!?!」と二度見された。……少なくとも悪くはないんじゃないかな。

と言っても、自分の違う一面を見せるのって恥ずかしいよね。私なら、お母さんに甘えるときの自分を見られる感じ？　うん、恥ずかしいわね。

「マヤはもつと自信持ちなよ。私は今のマヤが好きだよ」

「ひなたあ……ミートウー、心の友よ」

「ジャイアンかつ！　あはは」

ちよつとずつ調子を取り戻してひなたに縋りつくマヤちゃん。なんだか面白くない。私とはもう三年の付き合いなのに、なんでひなたにばっかり。この二人普段から距離近いし。

「ひ、ひなた？　あおいちゃんが昼ドラの犯人みたいな目つきになってるけど……」

「どんな例えよ！　あおい、どしたの？　お腹壊した？」

「ふんっ、何でもない」

「……」

何よ、二人して仲良く首傾げて。

確かにマヤちゃんと仲良くなったのは最近のことだし、登山趣味のことも知らなかったし、下の名前も忘れかけてたけど私の方が――あ

れ？

もしかして私たち、そんなに仲良くない？

『あれー？ 三年もいっしょだったのに何にも知らないんだ。やーい友だちゼロ人、ひやつひやつひゃ』

「ぐぬぬ……」

幻影ひなたの煽りがうるさい。

いいもん、知らないなら今から知っていけばいいんだから。

改めて決意していると、おもむろにひなたがマヤちゃんの脇の下に手を入れた。

「ひやつ!？」

「さつき引つ張ったとき思ったけどさ、マヤって軽いよね。ちゃんと食べなきやダメだよ」

「……に、肉がつきにくいタイプだから」

「何だどー？ 乙女の敵みたいな体ですなー」

「ちよ、あはは、やめ、やめい！」

ひなたはマヤちゃんの後ろに回って脇をくすぐりはじめる。体が小さいマヤちゃんは抜け出せない。

助けを求めるようにこっちを見てきたけど、知らない。

「血迷うたか我が同胞!？」

「っーん」

「ほらほらー!？」

「やめっ、やめてー!？」

じゃれあう二人をクラスみんなが遠巻きに見ている。こうやってふざけてるところを見せつけければ、マヤちゃんも馴染みやすいだろう。

イチヤイチャしてるのに腹が立って見捨てたわけじゃない。けっして。

第9話

女の子はマウントをとるのが好きだ。

馬乗りになってボコボコにする方のマウントじゃなくて、比喩的な意味でのマウント。自分にはあるけど相手にはない長所をアピールして優越感に浸ることを指す。

たとえば貧乳に悩む子に対し「最近ブラのサイズがまたきつくなつてさ」などと話をふつたり、容姿に自信のない子に「こないだ駅前でスカウトされた」などと言ったり。

マウントされた子は額に青筋を浮かべつつ反論を呑み込んでお世辞を言うのが、女の子のたしなみだ。

もちろん私も女の子なのでマウントをとりたい。中学のころとは違って話し相手はいるし。たぬき寝入りしながらクラスメイトたちのマウントの取り合いを盗み聞きしてたあのころとは違う。

じゃあ私が誰かに対してマウントをとれる長所とは何か。登山？ありえない。山小屋で登山するため生まれてきたような超人おじさんと何人も遭遇した。あの人たちと比べれば私なんてまだまだ初心者だ。

容姿、性格？ どっちも完成された美少女を四人は知ってる。みんなに比べたら私なんて、いっぺん生まれ変われ。

……軽く鬱になりそう。

手っ取り早く結論を言おうと、

「どやあ。学年一位様を崇めよ」

「がんばったね、えらいえらい」

「嘘お!？」

勉強だ。

期末テストを終えた次の週の昼休み。

午前の授業で返ってきた満点の答案用紙を見せつけながら、胸を張る。あおいちゃんの頭ナデナデが気持ちいい。

で、目を見開いて口をパクパクさせているひなたはどういう見か。

「分かった！ 違う子の答案用紙でしょ！」

「ほう、よくぞ見破った……って面白い！ 名前書いてるでしょーが！」

「……マヤ、ついにやったんだね。いっしょに謝りに行くこう？」

「カンニング違う！ いい加減怒るよ!?!」

ひなたのやつ、マウントとられてるのにボケ倒してくれちゃって。

ごめんごめん、とひなたは悪びれた様子もない。

「赤点ギリギリのマヤをからかってやろうと思ったんだけどなー」

「ふふーん、こう見えてマヤちゃんはすごいよ。中一のとときからずっと一位か二位なんだから」

「瓢箪から駒だね！」

「……泣きそう」

褒めてるのか貶してるのか分からない評価に泣きそうだ。そうかそうか、つまり二人は私をアホの子だと思ってたわけだな。

むすつとしてたらあおいちゃんが「えらいえらい」ともう一度なでてくれた。ひなたは「よーしよしよし」と首元を。くすぐりたい、手を払った。マウントをとってるはずなのに優越感があまりない。

満点といっても惰性だ。友達のいない陰キヤの中学時代、私がマウントをとれるのは勉強くらいしかなかった。教科書さえ暗記すればどんな問題も「簡単すぎてあくびが出るぜFoooo!」と無双できるから、なんとなくいい点をとる癖がついたんだ。

中学じゃあおいちゃんが一言「すごいね」と言ってくれるだけだったけど、今はひなたもいるし、あおいちゃんともずっと仲良くなれた。ドヤ顔するには絶好のチャンス。

「どつやア……」

「……えい」

「ふえつ！ なへに!?!」

ほっぺたをつねられた。息のあった同時攻撃だ。

どうやらネタを引っ張りすぎたようなので、すごすごとテスト用紙を片付ける。

「でもよかったー！ 補習もないし、これで安心して富士山行けるね

！」

「ん、あー……」

「どう、マヤちゃん？ 考えてくれた？」

地味に私が補習を受ける前提で考えていたらしいひなたは置いて、富士登山の件だ。

時期は期末テスト終了後、夏休み前。富士山の頂で朝日を見る御来光登山が計画されてて、私も誘われた。

ぶっちゃけ自分でも忘れかけてたけど私は登山を辞めると決意した身だ。テスト前だったこともあつて答えは保留してた。

でも――

「うう……」

じーつと期待に満ちた目で二人に見つめられると、断れない。

「分かった。私も行く！」

「ほんと!？」

「よーしよく言った！ これでもいいのメンバー全員参加だね！」

我ながら意志の弱い。

でもインドア趣味だったあおいちゃんがたつた数ヶ月で日本の最高峰に登りたくなつたことは、登山好きとしてうれしい。その変化を間近で見られるのは素敵だと思う。

それに――

「山小屋の予約とか、日程調整とかは私に任せて！ 言い出しっぺだもん！」

「ほんとに大丈夫ー？ 山小屋の予約は電話だよ？ 知らない人と話せるの？」

「でっ、できるわよそのくらい！ 私だって少しは成長してるんだから！ ねっ、マヤちゃん！ ……マヤちゃん？」

みんなといっしょなら、取り戻せるかもしれない。

私があの日失くしたものを。失くしたことに気づかなかつたものを。

山の頂にあるものを。

「おーい、マヤちゃん？」

「返事しないと次の水泳で酷いよ？」

「はい！ 何でしょう！」

しみりしてる暇もない。

水泳の時間は前髪バリアが使えないため、私は基本死にかけのクラゲみたいになっている。それに乗じてひなたは私をくすぐったり知らない陽キャグループの中に連れ込んだりしてからかかってくるんだ。

まあひなたになら何されても許せるけど、酷いって何する気よ。ぼんやりしすぎて怖い。

「あおいが成長したって話、聞いてた？」

「聞いてた聞いてた。あおいちゃんがそこまで登山好きになるのは意外。カバが泳げないくらい意外」

「マヤちゃんっていつも例えが独特よね……」

「意外なのはマヤだってそうじゃん！」

中学時代、やる事がなくて恐ろしく長く感じた昼休みの時間は、物足りないほど短く、速く過ぎ去っていった。

あおいちゃんはかわいい。

ぱつちりした目にさらさらの髪、耳に心地良いキュートボイス。気弱な性格だけど少し意地っ張りなところもあって、むきになったときのむっとした表情がこれまたかわいい。

そんな美少女に「水着選びに付き合って！」と言われたら二つ返事でおいけーするしかない。

「任せてあおいちゃん！ 今日最高のセクシー水着を選んだげー！」

「な、なんか不安になってきた……お手柔らかにね？」

場所は駅前のショッピングモールの一角、目的はセクシー水着の入手。相談されたからには最強に性的な水着を選んじゃおう。

事の発端は先日のこと、あおいちゃんとひなたプラス私の三人は、学校の帰りに入間川を上り、吾妻峡という川遊びスポットに立ち寄った。すると仲の良いメンバーを誘って川遊びをすることになったん

だけど、なぜかセクシー水着を持って集合とひなたが言い出す。

私はあおいちゃんに「セクシーって何!？」と聞かれ、「任せて!」と返したわけだ。

陰キャぼつちの私に水着なんてリア充道具の知識はないけど、あおいちゃんと二人きりのお出かけだ。テンションがあがる。調子にも乗る。

手始めに露出の多そうな水着を一つ手に取る。これ知ってる、マイクロビキニだ。

「まずはこれ行ってみよう!」

「これでどこ隠すの!？」

「おっぱ」

「言わんでいい!」

真っ赤になったあおいちゃんに口をふさがれた。そのままそくさと水着をハンガーに戻そうとするあおいちゃんを慌てて止める。

「あおいちゃん、まずは試着!」

「試着う!? できるわけないでしょこんなの!」

「決めつけるのはよくない。無理だと思ってたこともやってみれば意外とできることがある」

「それは、そうだけど……」

「この水着だつて着てみれば似合うかも!」

「そ、そうかな?」

もうひと押し!

「ひなただつてびつくりする、たぶん!」

「ひなた……」

あ、ほんとにいけない。

あおいちゃんは澄んだ目つきでマイクロビキニを手に取り、試着室へ。その背中は戦場に向かう兵士のように勇ましい。

「マヤちゃん、ありがとう。私、一足先に大人になってくるよ」

「うん。大人になってもあおいちゃんとは友達だから……!」

そうしてあおいちゃんが試着室にこもり、数分後。

羞恥心がそのまま声に出てきたような、小さな悲鳴が聞こえた。

ほどなく出てきたあおいちゃんは耳まで真っ赤になって、無言で水着をハンガーに戻す。

続けて手に取ったのは、大事なところに引っ掛けるヒモみたいな水着。ああ、次はそれ着るの。チャレンジャーだなあ――

「さ、これ行ってみようか、マヤちゃん」

「えっ」

「まさか私にだけ恥ずかしい思いさせようなんて、考えてないわよね？」

「めめめ滅相もない」

「じゃあ次はマヤちゃんの番。きつとこれが似合うと思うの。着て。それで見せて」

つべこべ言わず、着ろ。

あおいちゃんの目はそう語っていた。逆らえば殺られる。

結局私はヒモみたいな布を着せられた挙げ句、その姿をあおいちゃんにバツチリ見られた。

因果応報。

一時の衝動に身を任せてはいけない。

入間川上流の吾妻峡は、木立の間に清らかな水が流れる静かな名所だ。木漏れ日のきらめきと、葉のさざめきに清流の澄んだ音が心地良い。ややアクセスが悪いけど、飯能河原に勝るとも劣らない水遊びスポットだと思う。

そう思ってたんだけど――

「晴れたねー！ 台風一過！」

「でも川の水が……」

吾妻峡の河原にあおいちゃん、ひなた、かえでさんとここなちゃん、私の五人が並ぶ。

目前には激しい濁流。昨日の台風で増水したみたい。一歩でも足を踏み入れれば水難事故は必至だ。

まさか約束の前日に台風が直撃するなんて、

「運が悪かったわねー」

「……かえでさん、何でこっち見るんですか」

「別に？」

目をそらしてもニヤニヤ笑いは隠せてないです。いや、さては隠す気ないな。

確かに私は普通の人よりちよつと運が悪いこともない。練りに練った登山計画が急な大雨や事故で中止になったことは数え切れない。

でも今回の台風は無実だ。一回だけなら偶然だ。

「これじゃ泳げないし、今回は撤収ね」

「そうですね、へくしゅっ！」

というわけで、撤収。

後日、再び吾妻峡。

ひなたが風邪をひいたので、集まったのはおよそ一週間ぶりだ。

曇ってるけど気温は高く、水遊びにはちようどいい。そう言つて病み上がりのひなたが一番に水に足を入れ、

「つ、冷たい、超冷たい！」

と飛び上がった。

あ、そつか。曇ってるし、流れがあるし、上流だから冷たい湧き水もある。そりゃ冷たいよね。

「マヤちゃん……」

「なんですかその目は!? こればかりは私の不運関係ないでしょ！」

「あはは、冗談よ。それで、この後どうする？ プールでも行く？」

「そうですね、今日を逃すと夏休みまでみんな集まれないし」

「ええ!？」

「それはちよつと……」

「ヤダ」

あおいちゃん、ここなちゃん、私の順で反対する。公共の場でセクシー（当社比）水着なんて着られるか。

その後私たちはひなたの家に移動し、めっちゃ大きなビニールプールで水遊びを楽しんだ。

あおいちゃんと私は店員さんおすすめの無難なセクシー水着、かえでさんはオレンジ基調のワンピース、ここなちゃんはフリルマシマシのセパレート。かわいい。

ひなたはスクール水着だった。おい言い出しつぺ。「私が着ればなんでもセクシー」だと？ ああそうですね美少女め。

みんなといっしょに遊ぶのは楽しかったし、いかにもリア充っぽいイベントで満足、だったんだけど。

ひなたのお父さんに嘘ついていることを思い出して、楽しいより申し訳ない気持ちの方が大きかった。いつかひなたのお父さんには謝らなきゃ。

何はともあれ、次は富士登山だ。

軽々と登頂してみんなに「すごい！」と言わせてやるぜ。脱ポンコツ！

第10話

最近、生きるのが楽しい。

中学時代からの同胞であるあおいちゃん陽キャと仲良くなれただけでなく、怨敵陽キャのひなたと友だちになれた。しかも二人は登山好きだから話も合う。若干ひなたからのいじりに遠慮がなくなってきたのには参るけど、二人のおかげで学校が楽しい。

学校外も充実してる。あおいちゃん、ひなたに加えてここなちゃんとかえでさんもいっしょにお出かけしたり、お泊り会したり。怨み、妬むしかなかったリア充生活の渦中に私はいるんだ。

今週末にはみんなで富士山に登る。登山経験者としてあおいちゃんにかっこいいところ見せるのがとても楽しみだ。

人生がこんなにも楽しくなるなんて、考えもしなかった。

嗚呼、リア充人生。

「誰か私を殺して……殺して……」

人生とか要らない。私はなんで生まれてきたの？ こんなに苦しいくらいなら生まれたくなかった……は、言い過ぎた。生んでくれてありがとう、お母さん！

「……はあ」

ため息を一つ。ネガティブをこじらせてても状況は好転しない。一旦落ち着こう。

私は今、パジャマに使ってるジャージ姿で象さんオブジェの前に座り込んでる。

通りかかる人たちからの視線が痛い。なんたつて今は月曜の朝九時、よい子は学校に行ってる時間だ。サボりを疑われるのは仕方ない。

いや、疑いどころかまごうことなきサボりなんだけど。どうしようもない事情がある。

簡単に言うと、私の家が侵略者に占拠された。

占拠されたことに気づいたのは今日の朝のこと。起きて、顔洗って歯磨いて、後は制服に着替えご飯食べて出るだけというときだった。どこからともなく現れた暗黒の侵略者。その姿を見た瞬間、私は敗北を悟って着の身着のまま逃げ出し、今に至る。

「どうしよう」

状況を確認しても意味はなかった。

高校生になってからは親戚に用意してもらったアパートに一人暮らしだから、一人である侵略者と戦わなければならない。

無理だ。戦うどころか制服や財布を取りに行くのも怖くてできなかった。だからサボってる。携帯もないから友だちに助けも求められないし、そもそも今はみんな学校だ。

となると残された手段はただ一つ。

「まあいいお天気、絶好の散歩日和ね！」

山本流禁術、現実逃避。

自分のキャパを越えた問題にはこれが一番だ。ああ空が青いなあ

！

飯能市でおよそ名所と呼ばれる場所の内、財布なしでも楽しめるところをぐるっと回ってきた。飯能河原、吾妻峡、阿須運動公園、あけぼのこどもの森公園。中でも最後のこどもの森公園、通称ムーミン谷はまるでおとぎ話の世界に入り込んだようで、ここなちゃんから以前聞いた以上に素敵な場所だった。距離的にも十分歩いていける距離だし、今度から暇なときはこのコースで散歩しよう。

ただし、水と食料と帽子をきちんと用意して、だ。

「暑い……」

象さんオブジェの公園にて、オブジェの前に腰掛けた私はぐでーつとだらける。

朝すずしいと思ったけどやはり七月、正午にもなるとすごく暑い。

オブリエの影にいるのに汗が止まらない。どこが絶好の散歩日和だ、熱射病になるわ。

朝も昼も食べてないからハンガーノック寸前。体感でいうところからアパートまで歩いたところでガス欠になりそう。散歩中に道行く人たちからの視線も痛かったし、これ以上歩き回るのはやめよう。

「こんにちはっ！」

「……あ、はい。こんにちは」

突如目の前に現れた美人さんの顔。うつむいていた私をのぞきこんであいさつしてる、と気づくのに数秒かかった。

私の知識じゃ表現すらできない、いかにもオシャレな私服。見てるこつちも明るくなれるようなニコニコ笑顔を浮かべて私の正面に立っている。

「私知ってる、こういうの声掛け事案っていうんだ」

「えっ？ いや違う違う！ もう、花の女子大生に向かって事案だなんて失礼しちゃう」

女子大生は冗談めかして怒りながら、「隣いい？」と聞いてきた。どうぞどうぞ。

「私、小野塚ひかり。大学二年。ひかりって呼んでね！」

「山本マヤです……ええと、何の御用でしょう？」

山小屋じゃあるまいし、下界で知らない人に話しかけられることは少ない。何か、宗教の勧誘とかかもしれない。怖い。

するとひかりさん、眉を八の字にして気まずそうに笑う。

「びつくりさせてごめんね。でもあなた、駅前からここまでふらふらして歩いてきたでしょ。倒れるんじゃないかって心配だったの」

「はあ……」

たしかにいつからかは忘れたけど、頭がぼーつとして足元がおぼつかない。ははあ、周囲の視線が見てたのは非行少女じゃなくて体調不良少女だったんだ。駅前からここまでついてきたひかりさんは、声をかけるかどうか迷っていたんだろう。

優しい人だ。でも私は一人前の乙女、知らない他人からの情けは受

けない。ここはかつこよく」「ご心配ありがとう、けれど私は平気です」とつつばねてみせて――

「お水飲む?」

「飲む!」

「クッキー食べる?」

「食べる! うまつ!」

やっぱやめた。もらえるものはもらっちゃおう。ペットボトルの水をがぶ飲みしてクッキーを貪る。これだけ補給すれば山一つは登れそうだ。

「ごちそうさまでした! クッキーめっちゃうまなんです、どこのやつですか?」

「商店街のすすきって洋菓子屋さんのだよー。私そこでバイトしてるから、ときどき余ったのをもらえるの」

「すすき。今度絶対行こう」

「うん、きてきて。ところで、マヤちゃん?」

ここで初めてひかりさんの笑顔が曇った。心配げに眉を寄せて首をかしげる。

「学校は楽しい?」

「……? 死ぬほど楽しいですけど」

小学校中学校は授業時間も休み時間も拷問と大差なかったけど、高校に入ってからには本当に充実してる。あおいちゃんとひなたはいい友だちだし、ここなちゃんやかえでさんとも仲が深まった。ほのかは、直接会う機会は減ったけどスマホでポチポチおしゃべりを楽しんでいる。文句なしのリア充生活だ。

そう答えると、ひかりさんはなぜかきよんととして、目をぱちぱちさせている。

「そうなんだー。えっと、じゃあなんでサボってるの?」

「暗黒の侵略者が我が家に出現しまして、朝から家を追い出されたのです」

「?? ああー、そういうこと。そういうの私は詳しくないけど、程々にしたほうがいいよ? 後で思い出して悶えることになるから」

「中二病じゃないやい！」

「うんうん、分かってるからね」

微笑みながらよしよしと頭をなでしてくれるひかりさん。あおいちゃんといい、最近よくナデナデされる気がする。

分かってるといいうひかりさんだけど、絶対伝わってない。といつても侵略者の名前をそのまま発声したらおぞましいイメージが蘇って私が発狂してしまうので、ここは中二病ってことで流しちゃうか。

「でもさ、マヤちゃんの年で学校サボるのはもったいないよ？」

「サボりたくてサボってるわけじゃ……」

「そうだよ、侵略者さんがいるんだもんね。けど小学校の時間はすつごく貴重だよ？ 給食、林間学校、失敗しても留年しないテストとか——」

「誰が小学生だ！」

「え、違った？」

「私十六！ 高一！」

ひかりさんが目を丸くしている。私だつて驚きだ。背は低いけどせめて中学生くらいには見えるだろう。

「ごめん、てつきりもつと下かと思つてた！ あはは——」

「あははてあんた……もう」

お気楽に笑うひかりさん。

体調の悪そうな子供を心配して水と食料を恵んでくれたうえ、サボりを優しく諭してくれたんだ。文句よりもありがたい気持ちのほうに先に来る。

ひかりさんにつられて私も苦笑い。しばらく笑い合っていると、ひかりさんの携帯が鳴った。

「ちよつとごめんね。はいもしもし、店長？ お疲れ様です、どうしたんで……あ——」

まるで「あ」に濁点がついたような声が出た。冷や汗をたらしながら携帯を耳から話し、画面を確認するひかりさん。視線は画面右上に小さく表示された時間に向いている。

「ごめんなさい、今すぐ向かいます！ マヤちゃん、悪いけど私行くね

！」

「あ、はい。遅刻？」

「の、五分前！」

時間は一時の五分前だから、始業が一時なんだろう。商店街に走って五分で着けるか。ひかりさんの根性が試される。

私を心配してわざわざここまで来てくれたのに、なんだか申し訳ないや。謝ろうとして口を開く直前、ふわりと柔らかい感触が頭に載った。

手にとつて見るとかわいいデザインのタオルだった。

「それ貸したげる！ 頭の上に乗つけて帽子にしてね！」

「え、ちよつと」

「またねー！」

ひかりさんは全力疾走で走り去った。

ありがたいものを借りてしまった。これがあれば日差しを防げる。それに、もう一度ひかりさんと会う口実にもなる。今度お金のあるとき「すすき」に行つて、お礼を言おう。

さて、ここで休憩したら家に帰るつもりだったけど、帰っても侵略者が待っているだけだ。お腹もいっぱいになったことだし、妙案がひらめくまでもう少し町をぶらつこう。日暮れまで粘ればきつと私のひらめき力が開花していいアイデアが浮かぶはず。たぶん。

『顔も名前も知らん他人の子供を世話しろだ?! ふぎけるな!』

『それはこつちのセリフだ！ 一番あの子と血縁が近いのはあんたのところだ。ダダをこねるな!』

『施設に入れればいいだろう』

『そもそも母親はどこにいったんだ?!』

ああ、やだやだ。侵略者のせいでネガティブ思考になっているのか、嫌な夢を見ている。

お父さんとお母さんがいなくなった後、私の身寄りについて親戚が

大喧嘩しているころの夢だ。あれだけ揉めるなら施設でもよかったのに、そうならなかったのは大人の事情があつたのかしら。

親戚の怒声は少しずつ小さくなって、意識が浮上していく。暑い、まぶしい。

そうだ、あの後ぶらついた後天覧山に登って、山をキメた頭で侵略者への対策を考えてたけどいい案が浮かばなくて。結局、象さんオブジェの公園に戻ってきたら眠くなってきた。で、オブジェを囲ってる木の社みたいなのにもたれかかって、寝入っちゃったんだ。

まぶしいってことはまだ夜じゃない。

どうせまだいいアイデアはないし、もう一眠り――

「マヤちゃん！ マヤちゃん!」

一眠り――

「ま……むう」

「かえで、これ寝てるだけじゃない?」

うるさいなあ――いたたた!?

「いひゃい!? なに!」

「おはよう。ねほすけさん」

誰だ人のほっぺたつねるのは!?

突然の刺激にびっくりして飛び起きると、目の前に二人立っているのが目に入る。

一人はかえでさん。むすつと不機嫌そうに私をにらんでる。

もう一人は初めて見る女の人。かえでさんと同じ制服を着てるから、先輩さんだ。

「ふああ……おはようございます。今何時ですか?」

「四時半。ねえ、何か言うことあるわよね?」

「え? ええと……はじめまして、山本マヤです」

「あつ、どうも、ゆうかよ。よろしく」

かえでさんの友だちっぽい人にあいさつ。言うことがあるとすればこれだ。今は山の気分だからつつがなく自己紹介できた。どやあ。

「そうじゃなくて! 学校サボって連絡もつかない、家にもいない、どこにもいない。かと思えば公園で寝てるなんて、一体何してたの!」

「あ……もしかして心配、かけました?」

私の質問に、かえでさんはむすつとした怒り顔、ゆうかさんは苦笑いで答えた。

「ご、ごめんなさい。実は朝から家を締め出されて、制服も携帯も部屋に置きっぱなしですわ……」

「締め出された? 家族の人とケンカでもしたの?」

「いえ、家族じゃなくて暗黒の侵略者が——」

顔を見合わせるかえでさんとゆうかさん。

かえでさんは頭が痛そうに、額を手で抑える。

「つまりその侵略者? が怖くて学校をサボり、一日中ここで寝たってこと?」

「一日中散歩してました」

「……」

「か、かえで、落ち着いて」

まずい、かえでさんからにじみ出る怒気がすごいことになってる。がんばって抑えてください、ゆうかさん。

私には音信不通になった前科があるから、その分心配だったのかも。うーん、いけないことなんだけど、誰かに心配されるのって嬉しいな。

しばらくするとかえでさんは大きいため息をついて、「ゆうかの気持ちがよくわかったわ」と困ったように笑った。

「まあ無事だったならもういいわ。でも侵略者ってなんのこと?」

「名前を言っただけじゃないあの虫です……口にすることも恐ろしいアイツが、押し入れの中から……!」

「もしかしてゴキ——」

「言わないで!」

耳をふさいだ。

二人はしばしきよとした後、心底呆れたようにがっくり肩を落とす。

「アレ怖さに家にも帰れないって……山歩いてたら虫くらい平気になるでしょ?」

「や、もう無理。毛虫もクモも余裕だけどアレだけはマジ無理。見ただけで発狂」

夏登山していると木の上から毛虫が落ちてくるとか、ザックに変な虫がくつついてるとか普通にあるけど、アレだけは別だ。もう、ほんと、無理。

かえでさんと違って、ゆうかさんは分かってくれたみたい。苦笑いしながら「分かる」と言ってくれた。

「私も自分じゃ触れなくてお母さんに処理してもらってるよ。かえではどうしてるの?」

「普通に自分で退治してるわよ。マヤちゃんもお母さんに頼めばいいじゃない」

「うち、お母さんもお父さんもないので……はっ!?」
しまった。

暗黒の侵略者が怖すぎて空気読めない悪癖が再発しちゃった。どう考えてもぼろつと言つていいことじゃなかったのに。

二人も私の家庭の事情を知つて態度を変えるかもしれない。小学校と中学校の先生はそれを知つたとたんよそよそしくなったし、参観日の日なんか最悪だった。雪村さん以外のみんなが悲しそうな目でチラチラ見てくるんだもの。

そして何より嫌なのが、家庭の事情と私の性格を関連付けされることだ。ワケアリな身の上だからあんな暗い性格に、とかなんとか。余計なお世話だい、こちとらお父さんが健在なころからずっとこうだ。生粋の陰キヤをなめないでいただきたい。

知らないクラスメイトにどう思われても平気だけど、かえでさんにそんな目で見られるのは嫌だな——そう思い、おそろおそろかえでさんを見上げると。

「……ああ、そうなんだ。じゃあ私が退治しに行こうか?」

「マジですか!」

「うん」

あっけらかんとしていた。ちよつと返答に間があったけど、普段通りの口調で、とてもありがたいことを言ってくれる。

「あ、でもアレって一匹見かけたら三十匹はいるって言うわよね」

「さーて野宿に最適なスポットはと……」

「ここらこら」

野宿スポットにあるき出そうとすると、二人にがちり肩をつかまれた。ええい離せ！ アレが三十匹もいるようなところに戻れるか！

じたばたしてると、ゆうかさんが「こうしましょう」と指をたてて提案する。

なんでも煙をたいてアレを一網打尽にする殺虫剤があるので、それを私のアパートでたいて、アレが全滅するまで私はかえでさんのうちに泊まればいいじゃない、と。

「あなたたちが神様ですか」

「うむ、苦しゆうない」

「あはは……」

ありがたすぎる提案に私は「ははー」と平伏するしかない。かえでさんに迷惑をかけたくない気持ちはあるけど、アレと付き合うくらいなら死んだ方がマシ。

そうだ、それともう一つ言っておかなきゃ。

「あのう、お二人とも」

「ん？」

「今回の件、みんなにはないしよでお願いします。特にひなたには」

「分かった、いいわよ」

アレが怖くて家に帰れず学校もサボったなんて知られたら、ひなたにいじられるのは目に見えてる。あおいちゃんやここなちゃんにも笑われるかもしれない。できれば避けたい。

二人ともうなずいてくれたので、これで安心――

「もう手遅れだけどね」

「えっ？」

「マァヤー？」

後ろからするつと、首に腕を回される。顔から血の気がひくのを感じた。

聞き覚えのある声、柔らかい体の感触、匂い——後ろにいるのが誰か、振り返らなくても分かる。

「ひ、ひなた?」

「学校サボって何してるかと思えば、ゴキブリから逃げ回ってたなんてねえ。ぷーくすくす」

「あーっ!? そそそその名を口にするなあ!」

この女、私が心中でさえ一回も言わなかった名をやすやすと口にしようがった! しかも腹立つ煽りのおまけつき。こんちくしょう。

アクシオンスターよろしく組み付いたひなたを背負投げしようと思われていると、あおいちゃんも言えない気まずげな笑みを浮かべている。目に入った。なんとも言えない気まずげな笑みを浮かべている。

登山経験のある頼もしいお姉さんとしてのイメージが、ゴキから逃げ回るよわよわマンのイメージになってしまった。

だが私は諦めない。

すべては今週末の富士山登山にかかっている。経験者としてかっこよく先輩風を吹かせ、変なイメージを払拭するんだ。

目指せ強い私。

あおいちゃんズ、いつから話聞いてたんだろ。

まさか私の家庭の事情まで聞いてないよね? さすがに聞いてた

らもつと気まずくなるはずだし。

うん、きつと聞かれてないさ。

ひなた視点

私、倉上ひなたにとって、山本マヤはいけ好かないヤツだった。

だって同じクラスにあおいの姿を見つけて、八年か九年ぶりにお話できると思ったら、横から割り込んで仲良さそうにしているんだもん。あおいは私と山に登るんだから、って気合を入れ直してあおいに声かけたんだ。

その後は大変だった。私とあおいが話してるところそり忍び足でどこかに行こうとするんだ。たしかに用があるのはあおいなんだけど、邪魔ってわけじゃないんだから。呼び止めて無理やり話の中に引きずり込んだら、声が小さくて話しにくいときはあつたけど、ちよつとずつ打ち解けてきた。こつちが前髪モードの話。

そう、マヤの何がめんどくさいって学校と校外で性格が変わるところ。もう二重人格ってレベルで変わる。実際三年の付き合いがあるあおいも外のマヤと学校のマヤが同一人物だって気づかなかつた。

学校のマヤは声が小さくて遠慮がちすぎる子だけど、学外のマヤはひょうきんでサバサバした明るい子に変わる。ちなみに私は明るいマヤの方が好き。話しやすいからね。

別人のように変わるとはいつても共通してる部分はあつて、たとえばごく一生懸命なところ。私とあおいのケンカを仲裁しようと懸命にがんばってくれたときは、空回りでも嬉しかった。

最近学校でも私たちと話すときだけ学外のノリになるから、人見知りの激しいおもしろ人間みたいに認識されてる。プールで死体になつてたり、体力テストのシャトルランや期末テストでダントツの成績をとつたり、そのくせ自信なさげに陰に潜もうとしたり、たしかにおもしろ人間だと思う。次に何をやらかすのか想像できない感じ。

「山本ー、おーい聞こえないぞ。もつと声張れ。山本ー、影の薄い山本」

「せんせー、山本さんは今日おやすみでーす」

で、今日は何をやらかしたんだろう。

朝の教室、出欠確認で先生がマヤをいじるけど、教室にマヤの姿は

ない。いつも行きはいつしよになるけど今日はならなかった。寝坊でもしたかな？

「休みか。連絡はなし、と。雪村、倉上、何か聞いてないか？」
「聞いてないです」

先生は「ずる休みする子じゃなさそうだが」って釈然としない様子だった。私とおおいも多分同じ気持ち。基本的に真面目なマヤがサボるのはイメージしにくい。となると風邪か何かで弱って連絡もできないとか……いや、お母さんに連絡してもらえばいいじゃん。家族みんなダウンしたわけでもないだろうし。

なんだか心配になってきたので、机の下にこっそり携帯を出して『大丈夫？ 生きてる？』とメールを送っておく。ちらっと見てみると、おおいも同じことをしてるみたい。

たとえ寝坊や病気でも昼休みまでには返信があるかも。もしかすると「寝坊しました！」ってすぐにでも教室に入ってくるかも。そんな風に思った。

だけど結局マヤは放課後になっても姿を見せず、返信もなかった。

「まったくあいつは心配かけて。今度会ったらおしおきだね」
「ふふ、程々にしといてあげてよ」

学校が終わった帰り道をあおいといっしよに歩く。向かう先は私たちの家じゃなくて、マヤの家だ。かえでさんやここなちゃんにも連絡をとってないみたいで、普段のポンコツぶりもあって心配になったのと、ついでにプリントを届けに行く。

プリントの配送料は体で払ってもらうよ。マヤはスキンシップに弱くてちよつと近づいただけでも面白い反応してくれるんだ。嫌がってるふりして実は満更でもなさそうなの知ってるんだから。

「あれ、ここなちゃん？」

いつも私とおおいが解散する別れ道のところに、ここなちゃんが立ってる。制服姿だから学校帰りかな。不安げな顔で駆け寄ってきて

たよ。

「あの、マヤさんとは連絡つきましたか？」

「全然。今からプリント届けるついでに直接会いに行くよ」

「ここなちゃんも来る？」

「ばあつと顔を明るくして「はい！」と言うここなちゃん。ちよつと
ずる休みしたくらいでこんな心配されて、マヤは幸せものだよ。」

そこから三人並んで進んでいく。先生に教えられた住所を携帯に
打ち込んでデジタルの地図を見ながら進んでただけど、地図を覗き
込んだここなちゃんが「あれ？」って首をかしげてた。すぐになん
でもないですとは言ったけど、何か変なものでも映ってたかな。

そうしてたどり着いたマヤの家は、住宅地の中にひっそりと佇む一
軒家だった。

なーんだ、私んちのこと「どこの三ツ星ホテルですかここは!？」な
んて言ってたくせに、マヤんちだって結構大きいじゃない。

表札にも山本ってあるし、ここで間違いないね。

「ひなたさん、ちよつと待って——」

「へ?」

ここなちゃんが慌てて声をあげるのと同時、私がインターホンを押
してしまふ。表札も住所も間違いはないはずだけど、どうしたんだ
ろ。あおいと顔を見合わせる。

どうしていいのか分からないのか、変にアタフタしだしたここな
ちゃんを眺めているうちに、玄関の扉が開いた。

「……」

こ、この人がマヤのお父さん? 全然似てないや。髪がボサボサで
目は胡乱げ、猫背の痩せ型。ちよつと怖い。

あおいもここなちゃんも同感なのか、私の後ろに隠れるみたいにし
てる。ええい、私がすっかりしなきや。

「こんにちは! マヤちゃんいますか? 私たち学校の友だちで、プ
リント届けに来たんですけど」

——いない。

「え?」

——学校には、まだこの住所で通ってるのか。とにかく、アレはここには住んでない。

——そもそも俺はアレの家族でもなんでもない。どこにいようが知ったことか。

意味が分からない。

一つだけ分かるのは、マヤを「アレ」と吐き捨てるように言われたことがすごく腹立たしいってこと。今すぐにもこの男の人に怒鳴ってやりたいけど、ギリギリのところまで飲み込んで、「じゃあ、あの子は今どこに住んでるんですか？」と聞くことができた。それだけ聞き出して、早くこの人の前から立ち去りたい。

男の人は何か前置きをするでもなく、一つの住所を口にする。私たちは慌ててそれを携帯に打ち込んで、逃げるようにその場を後にした。

教えられた住所に建っていたのは小さなアパートだった。苔やツタに覆われてるだけじゃなくてそこら中に大小のヒビがあって、この前の台風で吹っ飛ばなかったのが不思議なくらい頼りない。

一階の端の部屋の表札にかすれた字で山本と書かれてる。私たちはその前に立ち尽くしていた。

「……マヤさんはあんまり話したがりないですけど」

道中、無言だったここなちゃんが重たい口を開く。

マヤの両親がいないこと。親戚に引き取られたけど、揉め事があった一人で暮らしていること——ちよつと待った。

「でも私んちでお父さんと話したときは——」

「空気読めた、がんばった、つてとても喜んでました」

何よそれ。

たしかにあの日の楽しい雰囲気壊したくなかった気持ちは分かるけど。トイレから帰ってきた後に目元が赤くなっていたのは気づいたけど。ずっと無理して笑ってたっていうの？ 私たちに気をつ

かつて、ずっと。

こんなこと突然知らされたって、どうすればいいのか分かんないよ。

「マヤー！」

「マヤちゃん！」

あおいも同じだったみたい。衝動的にドアノブに手をかけて、二人で中に入った。鍵はかかってない。

玄関には学校用のローファーと、同じサイズの登山靴が二足。六畳一間の部屋には雨具やストック、登山雑誌なんかが整然と置かれている。

ただ、部屋には誰もいない。慌てて飛び出したみたいに乱れた布団が放置されてるだけ。

空いていた鍵、乱れた布団、音信不通、女の子の一人暮らし。ぼんやりした小さな不安が連想ゲームでつながって、大きな心配になっていく。

「どうしよー!?!」

「どうしましよー!?!」

「け、けーさつー! 一七七番ー!」

「天気聞いてどうすんのよ!?!」

あれ、警察つて一一九? そもそもそんな大事にしているのかな?

あおいは顔が真っ青、ここなちゃんも涙目でアタフタしてる。私がしっかりしなきゃ。まずは「警察 電話番号」で検索して——新着メール?

「ああーっ!」

思わず声が出る。

メールの送り主はかえでさん、タイトルはマヤちゃん発見。本文には象のいる公園とだけ書かれてあった。

マヤにどうやって接すればいいのか分からなかった。私にとって

お父さんとお母さんがいることは当たり前で、家に帰れば笑っておかえりと言ってくれる。学校でも家でも寂しい思いはしない。だからマヤに同情すればいいのかな？

お父さんの件で無理をさせたときのことも難しい。あのとき気を遣わせてごめんと謝ればいいのか、私の前で無理しなくてよかったのにと怒ればいいのか。

結局公園に着いたときになっても考えはまとまってなくて、マヤの姿を見つけても心は晴れなくて――

「や、もう無理。毛虫もクモも余裕だけどあれだけはマジ無理、見ただけで発狂」

思わずずっこけた。三人揃って。

かえでさんと先輩さん、マヤが話しているのをオブジェの裏手で聞いてみると、もうずっこけるしかなかった。

ゴキブリが怖くて逃げ出した？ 携帯を取りに戻ることもできなかった？ 今までのんびり散歩してた？ あのねえ……。シリアスになってた私たちは何だったのよ。

私たち三人は顔を見合わせて苦笑い。

「あのですね、この件はみんなにはないしよでお願いします。特にひなたには」

へえー、これだけ心配かけといて私にはないしよかあ。カチンときた。

オブジェをぐるっと回り込んでマヤの背後へ。もうどこへも逃さないように、首に腕を回した。

「マァー？ 学校サボって何してるかと思えば、ゴキブリから逃げ回ってたなんてねえ。ぷーくすくす」

「んあああつ！ その名を口にするなア！」

ばたばたと暴れまわるマヤだけど、もう離さない。またふらつとどこかに行かれたらたままないし――今は安心してすぎて涙腺が緩んでるからね。こんな顔、こいつには見せられないや。

「助けてあおいちゃん、ここのなちゃん！」

「はいはい」

「はーい」

「なぜそうなる!?! 暑苦しい、離れてー!」

あおいとここのなちゃんも参戦しマヤは三方向からもみくちやにされる。私たち三人の考えは、きつと同じだ。

マヤはいつでも平常運転。じゃあ私たちも難しいことは考えず、いつもどおりにしてればいい。

今週末は初めて五人で富士山に登る。調子にのりやすいマヤは経験者だからと張り切ってまた空回りするのか、それとも頼もしいところを見せてくれるのか。

楽しみにしてるよ、マヤ。

第12話

「私は登山経験でみんなにマウントをとるのです。山^{マウント}だけに！」
「は？」

富士山五合目にて、みんなが私を見る目は冷ややかだった。ここな
ちゃんだけ「マウントを取るって？」と首を傾げているのが救い。

かえでさんは一度軽く咳払いすると、

「富士山は五合目でもう二三〇〇メートルもあるのよ」

「もう半分以上あるんですね！」

「だからこんなに涼しいんだ」

「で、でも着いたときより寒くなった気がするよ」

あおいちゃんがジト目でこつちを見た。私は逆に顔から火が出る
みたいに暑いです。バスの中で思いついて言わずにはいられなく
なった渾身のギャグは、盛大な滑落事故に至った。

あおいちゃん、ひなた、ここなちゃん、かえでさんの四人プラス私
の山ガール組は、もう富士山五合目に着いていた。といってもここま
で登ってきたわけじゃなく、新宿からバスで二時間かけて登っただ
け。自分たちの足で登るのはこれからだ。

前日の睡眠時間はたっぷり十時間とつたし、富士山は初めてだけど
下調べは万全。山道具のメンテ・点検もよし。高山での呼吸法や歩き
方は体に染み付いている。コンディションは絶好調だ。この調子で先
輩風を吹かせてやるのだ。

と、意気込む私をおいて、ここなちゃんとかえでさんが話してる。
「富士山の標高は三七七六メートルで、五合目が二三〇〇メートルで
すから、五合目って半分じゃないんですね」

「そう。何合目っていうのは高さとは関係ないの。一説には——」
ああつ、やめてかえでさん！ 山知識披露して先輩アピールできる
チャンスをしれつととらないで！

失った機会を取り戻すすべもなくしよんぼりしていると、ひなたが
私の肩に手を置いた。慰めてくれるんだね、心の友よ——

「ねえ、さっきのギャグ風の音で聞こえなかったからさ、もっかい言っ

て？」

「あんた鬼か!？」

あおいちゃんと声をはもった。ていうかギャグって分かってるなら実は聞こえてただろ、おい。

私たちは下界と同じようなノリでワイワイやりつつ、高所に体を慣らすのも兼ねて五合目を見て回る。郵便局や山小屋、土産物店にレストランなどの充実した施設の間に、登山客たちが雑踏を作っている。まるで小さな繁華街のようだけど、下界と違って青空と雲を見るのに上を向く必要がない。目の前に空と雲が流れてるんだ。この開放感も登山のいいところ。

いい時間になったからレストランに入る。食券販売機に書かれたお値段は下界と比べるとやっぱ高い。バイト代の使いどころだ。

ここなちゃんとおいちゃんは雲海ラーメンの雲海に惹かれ、私も便乗してその券を買う。はたして雲海とはとろろ芋か卵か、ワンちゃんここなちゃん発想のソフトクリームか――

「雲海要素どこ……?」

「普通のラーメンですね」

「あはは……」

結局普通のラーメンだったけどおいしかった。

お腹もいっぱいになったから、後はストレッチをすればついに登山開始だ。

富士山は日本の最高峰、私が去年の夏から今年の春にかけて気晴らしに登ってきた低山とは一味違う。この山に登れば、きつと取り戻せるだろう、思い出せるだろう。山の頂にあるものを。

五合目から六合目の登山道を一列になって歩く。ここの道はきれいに整備されていて傾斜も緩いから、平地を歩いているのと大差ない。

広々とした風景を楽しみながら歩いていると、ひなたが急に「はい

！」と挙手する。

「かえでさん、マヤは列の真ん中にした方がいいと思いまーす」

「たしかに、一番後ろだといつの間にかはぐれて迷子になってそう」

「おいこら」

どれだけ頼りないイメージなのよ私は。あおいちゃんまで同調しないですよ。最後尾を歩いているのにはきちんとした理由があるんだから、ねえかえでさん？

振り返ったかえでさんと目を合わせるけど、かえでさんは目を丸くして「言っちゃつていいの？」とアイコンタクト。むしろなんでも言ったらダメなんですか。

そんな意志が通じたのか、かえでさんが一本指をたてて説明する。

「いい？ グループ登山には並び順があるのよ」

「並び順？」

「そう。山に慣れた人が先頭で、二番目からは体力のない人から順番に。最後尾が一番体力のある人が歩くの」

「え、でもさつきから私たち順番変わりますよ？」

ひなたの指摘通り、二番目から四番目の順番は何度も変わってる。でもこれについては事情があつて、

「あははー、ぶっちゃけ私もマヤちゃんもグループ登山慣れてないし、そこはテキトーつてことで」

「ぶっちゃけますね!？」

一応、並び順を厳しく決めても窮屈なのと、かえでさんが体力の低いメンバーに合わせてペースを調整するのは苦手だから、臨機応変に行きましょう、と話し合った結果なんだけど、はしより過ぎでしょ。ひなたたちが微妙な表情になつてる。

ちなみに私が先頭を歩くのは不可能だ。迷うから。初めての山で道を間違える確率はいまのどこ五割。後ろからみんなのペースと体力消費を俯瞰したほうがいい。

「たしかにマヤは体力『だけ』はあるもんね」

「……おいひなた隊員、意見があるなら聞こうじゃないか」

「べつにー」

くつ、腹の立つニヤニヤ笑いだ。山行中でなければつかみかかってやるのに。私は体力、知力、精神力の三拍子そろったパーフェクト山ガールだぞ。登山知識だってたぶんかえでさんにも負けない——あつ。

さつきの並び順の話、知識をひけらかすチャンスだったじゃん！

またかえでさんにとられ——「言っちゃっていいの？」って視線で聞いてきたのはそういうことだったのか。どうして私は山マウントにいるときでさえマウントをとれないの……

「マヤさん、大丈夫ですか？　なんだか一人百面相してるみたいですけど……」

「平気……うう、私に優しくしてくれるのはここなちゃんだけだよお」
「??　疲れたらいつでも言ってくさいね」

ここなちゃんの優しさが身にしみる。この先クレバスに落ちても（富士山にクレバスはあるのかしら）ここなちゃんだけは死んでも助けるからね。ひなた？　知らない。

六合目から七合目。傾斜は少しずつつく、足場は悪くなってきたけれど、その分良くなった見晴らしのおかげでみんな気力は十分。適度に休憩をとりながら笑顔で歩を進めている。山小屋で杖に焼印を押してもらったり、かえでさんのストックの先端が影分身したり、楽しいイベントの連続だった。

それでも心配は尽きない。

「あおいちゃん大丈夫？　休憩する？」

「ええっ？　全然平気だよ。むしろ元気一杯」

「ならいいけど……」

心配なのはあおいちゃん。本人は平気そうにしてるけど、明らかにペースが落ちてるし、険しくなってきた足場に慣れてない。しかも小さなあくびを連発してる。睡眠時間はいくらとったんだろう。

もし寝不足だとすると、寝不足、慣れない高所、消耗の激しい足場

のトリプルパンチで高山病になる恐れがある。それだけは避けなきゃ。

問題は本人が体力の消耗を実感してないこと。実感したらもう手遅れなのが高山病の怖いところなんだ。

でもあおいちゃんは自分から休憩しようとは言わないんだろうな。みんな頑張ってるのに自分だけ休みたいなんて言えない、と考えちゃうタイプだ。疲れを感じないならなおさら手遅れになるまで休まないだろう。

「かえでさ——」

「はい？」

「何でもないですー！」

危なかった。もう少しで「休憩の頻度高めませんか？」って言い出すところだった。

あおいちゃんに声かけた直後にそんなこと言ったら、あおいちゃんに気を遣ってますと言ってるようなものじゃない。その手の気遣いは陰の者にクリティカルでダメージを与え、ますます集団行動を嫌いにさせるんだ。同胞だから分かる。

となると、あおいちゃんにそれと分からせず、休憩の回数を増やす手段は——あった。

唸れ私の女優魂！

「ぐはあっ！ 足がああ！」

「マヤちゃん!？」

軽く吐血（するフリ）をしながら倒れ込む。みんな慌てて周囲によつてきて、当然山行は一時止まる。

「すみません、足つたみたいです。伸ばせば大丈夫」

「本当に大丈夫？ 無理しないでいいのよ」

「だーいじょうぶ。そうですね、五分か十分あればいけます」

「そう……とりあえず休憩しましょうか。マヤちゃん、さつきから何にらんでるの?」

「い、いえ別に」

かえでさんへの「これは演技、休憩をいい感じに増やして」という

全力アイコンタクトは通じなかった。

「マヤ大丈夫？」

「一人で伸ばせますか？」

「痛いよね、よしよし」

「ぐ、ぐぬぬ……」

しかもみんなからの気遣いで罪悪感がすごい。ひなたまでなんでもこんなに優しいのよ、「経験者って言ってもこんなもん？ 大したことないわね、あーっひゃっひゃー！」くらい言つてよ。

ともあれ、一度始めたからには貫かないと恥のかき損。痛くもない足を伸ばしながら、あおいちゃんに深呼吸の仕方や、歩き方のコツなんかを一方的に語っておく。

歩き方はともかく呼吸の仕方はすぐ実践できるから、「そうなんだ」と言つて早速やりはじめた。ここなちゃんとひなたもいっしょにしめしめ、これで酸素が脳みそにたくさん回るぞ。酸素さえあれば高山病なんて怖くない。

十分後、回復したフリをして立ち上がる。

「もう大丈夫そうね。でも無理は禁物。少しペースを落としましょうか」

そうして再開した山行は、あおいちゃんに最適なペースになっていた。

あおいちゃんは息を切らしながらも最後尾の私を振り返つて「大丈夫？ 少し休む？」と声をかけてくれる。汗だけで肩で息をしているのに私を心配してくれるのは嬉しいけど、罪悪感がすごい。もちろん声をかけられるたびに休憩をとって、深呼吸とストレッチを繰り返した。酸素と水はとりすぎるといふことはない。

コースタイムを大幅に超過したので七合目の半ばあたりから焦燥感が湧いてきたけど、焦りは登山の敵。地道に粘り強く同じペースであるき続ける。

「疲れたねー」

八合目の山小屋。屋外のベンチにみんなそろって座っていると、あおいちゃんが天を仰いでそう言った。

「すぐそこに見えてるのになかなか着かないんだもん。もうダメかと思っっちゃった」

「ほんとだねー、最後の岩場が長いのなんのつて。あ、羊羹食べる？」
「食べる」

ひなたの羊羹をかじるあおいちゃん。疲労困憊だけど話す元気があればまだまだいける。ひなたも元氣。ここなちゃんは言うまでもなく、余裕の微笑みを浮かべている。

これなら本八合目までいけるかな——と思っていると、トントンと肩をたたかれる。振り返ると、かえでさんだった。

「ありがとね。あおいちゃんに気を遣ったんでしょ」

「な、なんのことやら」

「ふふ、バレバレよ。ていうか休憩のたび『ぐはっ』だの『がはっ』だの言うから私……」

「かえでさん？」

「どうしたんですか？」

「わーっ、なんでもない、お構いなく！」

めっちゃ思い出し笑いしてやがる。大女優の迫真の演技が心に刺さったらしい。でもせっかく小声で話してたのにあおいちゃんたちに怪しまれるから、やめて。笑うのやめて！くそう、足つったフリしてからずつと真顔で歩いてたのはこういうことか。

その後、ここなちゃんとあおいちゃんの杖に焼印を押してもらって、出発。

ラストスパートともなるとコースタイム度外視のゆっくりペースでもしんどいみたいで、あおいちゃんはずつと苦しそうだ。こうなればもう一本の足もつってしまおうか——そう考えだしたころ、ここなちゃんが言う。

「マヤさんの言う通り深呼吸もいいですけど、口笛も疲れに効くんですよ。ピー」

「そうなの？。ピー」

「ピー」

「はあ、はあ……ピー」

「すこー」

「……」

おっと誰だ、みんなが口笛で岳人の歌吹いてるときに空気の抜ける音させてるヤツは。なんか変な空気で沈黙しちゃったぞ。誰だ、誰だ

「マヤさん……」

「マヤちゃん……」

「マヤ……」

「ふっ……」

私だよ。

一拍遅れて大爆笑。なるほど、悔しさと恥ずかしさで疲れなんて吹き飛んじやうね。あおいちゃんも笑って元気が出たでしょう。何もかも計画通りだ。足がつつたフリしたのと同じで、口笛くらい実は余裕で吹けるもんね。吹けると思ってたけど実際やったらできなかつた、なんてことあり得ないもんね。ね。

そうして笑いながらスパートをかけ、日が暮れてから数時間たったころ。

私たちは一日目の宿泊場所である、本八合目の山小屋にたどり着いた。

一晩ぐっすり眠った後、暗いうちに小屋を発つ。

ヘッドライトの光の列と、空に広がる天の川。雲の海を泳いでいるみたいで、まるで天国のようだった。

山頂標の前で記念写真。暗くてうまく撮れないね、明るくなったら撮り直そう。そう言って、みんな同じ方を向く。

雲の海を割って出た太陽が、世界を赤色に染めていく。きれい、美しいと息を呑む。ここに至るまでの苦勞と疲れ、険しい道のりの思い出が、ますます世界を輝かせる。

夢のように美しい。

だけどそこには何も無い。
分かっていた、知っていた、もう受け入れたはずなのに。
山の頂には、何も無い。

第13話

辛いことや嫌なこと、目を背けたくなる事実から、いつだって目をそらしてきた。

でも現実是不変ならない。ちゃんと前見て歩き出さなきゃいつか遭難しちゃうのに、私は足踏みしかできない。

その事実さえ辛いから、また目をそらした。

「これでよし、と」

富士山から帰ってきた数日後、私は部屋の整理に一段落がついた。玄関の前には可燃ごみの袋にまとめられた山道具の山。お父さんのおさがりのレインウェアやストック、登山靴、お気に入りの山雑誌なんかも全部まとめた。

そう、私は富士山登頂を機に登山からすっぱり足を洗うんだ。

やっぱり登山はお金がかかる。一度山に登るだけでフルタイムのバイト一日分の給料がまるっと飛んでいく。

もともと辞めようとは思ってたけど、意志が弱くてつい近場の山に登ったりして、辞め時を見失ってた。日本一の山を制した今こそやめるときだ。意志薄弱な私でも、山道具を全部捨てて物理的に登れなくなったらすすがに登らないでしょ。

「はあ……」

すっきりした部屋の中央で布団に寝っ転がると、しぜんにため息が出た。

この布団、富士山から帰ってきた日からずっとしきっぱなし。残り少ない一学期もなんとなく出る気になれなくて、終業式の今日までごろごろしてた。

山を辞めようとは決めた。でも小学生のころから頭の九割は登山のために使ってきた。いざ辞めるとなると、心にぽっかり穴が空いたみたいで、動く気が失せる。学校に行くのもめんどくさい。もちろん

ん、心配をかけないように「風邪です」と連絡したから大丈夫。
「すー」

口笛を練習しつつ、スマホをいじる。

みんなで共有してる富士登山の写真を、何度も繰り返し見る。剣ヶ峰で外国人さんといっしょにバンザイするあおいちゃん、ひなた。それを優しく見守るかえでさん。五合目の馬と目を合わせて対話してるっぽいこなちゃん。帰りのバスで疲れて寝ちゃったあおいちゃん、ひなた。

自分から発案した登山計画をやりきったあおいちゃんは誰よりも嬉しそうだった。ひなたもその次くらいに喜んで、こなちゃんも笑ってた。ただ、かえでさんは少し物足りなかつたみたいで、帰りのバスで次の山行に私を誘ってくれた。返答は、保留してる。

ごろごろと布団の上を転がりながらスマホをいじっていると、あつという間に日が暮れる。動くのがめんどくさい。三度の飯よりぐうたらしたい。

気づけば、スマホの時計が午後一時を示してた。

「あー、やっちゃった」

可燃ごみの収集日、今日だったのに。次の日まで狭い玄関が埋まったままになっちゃう。いいか、どうでも。どうせ一人分しかスペース使わないんだし、多少せまくなつたつて変わらないや。

どっこいしょ、と重い体を起こす。

一日中蒸し風呂みたいな部屋で過ごしていたせいか、汗だくで喉もカラカラだ。シャワー、シャワーつと。

ぬるい水で汗を流し、ついでに水分も補給していると、少しは頭が働くようになってきた。頭を働かせたって何も変わらないことに気づいちゃうだけだった。

登山なんてやめてやる。疲れて、しんどくて、お金がかかるだけだもん。絶対にやめてやるんだから――

ぱたん、と音が聞こえる。窓が開く音だった。

「えっ」

次いで、二人分の足音がたたみに降りた音。えっ、ちよつと、ええ

?

女の子の一人暮らしなんて危ないです、とここなちゃんに言われたことを思いだす。大げさだよ、と笑い飛ばしてすみませんでしたこんな様。言葉の意味を今実感してます。

泥棒ならおつけー、盗むものなんて何もないから好きだけ物色してつて。でも強盗さんはまずい。携帯は外だから通報できないし、お風呂場には逃げ出せる窓もないし。うーん……。

もういいや。

どうせ登山のない人生なんてつまらない。じゃあ一発特攻をかけてヒーロー、もといヒロインになれるかどうか賭けてみよう。成功しても失敗しても新聞の社会面の隅っこには載れるんじゃないかな。どうでもいいけど。

私はシャワーを止め、お風呂場の入り口で大きく深呼吸。覚悟はできた。

「曲者お！　ここを女子高生の花園と知つての狼藉かあ!」

「……マヤちゃん?」

「マヤ……」

「ぎゃー!?　あおひな!」

「略すな!」

私の部屋に立っていたのは凶器を携えた強盗さんではなく、制服姿でかばんを持ったあおひな、もといあおいちゃんとひなただった。

強盗ではないけど、開いた窓を見るに二人が不法侵入したことは間違いない。二対一の不利をくつがえすにはまずハツタリだ。ファイティングポーズをとってキレのある(たぶん)シャドーを見せつける。「しゅっ、しゅっ、ここに忍びこんだのが運の尽きだったな。私は護身術としてボクシングを習おうと思ったことがあるんだ」

「実際習ってないんかい!」

「ていうかマヤちゃん、服!　服着て!」

「へ?　あっ」

全裸の自分を思い出すとともに、顔に血が集まるのが分かる。今の私はきつと真つ赤だ。お風呂場に慌てて逃げ込むけど、普通に見られ

ちやった。

ふっ、戦わずしてメンタル攻撃なんてやるじゃない、あおいちゃん。恥ずかしすぎて私はもう燃え尽きたよ……。

「ごめんなさい……」

「分かればよろしい」

「マヤちゃんは登山以外あつぱらばーなんだから、もつと自分を大事にしなよ?」

私のヒロインチャレンジのことを話したら、ものすごく怒られた。正座でたつぷり一時間は説教された気がする。怒ってくれるのはありがたいけどあおいちゃん、死体蹴りはひどいよ。誰があつぱらばーだ、誰が。

「ま、私たちも窓から入ったことは謝るよ。ごめんね」

珍しくひなたが神妙な顔してる。

「ほら、マヤつてば富士登山終わってからずっと休んでるじゃない。電話もメールも出ないし」

「風邪つていっても一人暮らしだいたいへんかな、つて。そしたら人の気配はするのに誰も出てこないから」

心配になって窓から入ってきた、と。

ひなたはともかく、常識人のあおいちゃんまで侵入してきたつてことは、それだけ心配をかけたつてこと。こんな要らない子のためにそこまで気をもませたなんて、こっちのほうで謝りたい。謝罪合戦になるからやらないけども。

——あれ? そう言えばなんで私が一人暮らしだつて知つてたんだろう。二人にはお父さんとお母さんのこと言つてないのに。

そのことを聞こうとしたとき、ひなたの目がすつと据わる。

普段、明るく笑つてばかりのひなたがこんな顔を見ると、怖い。

「それでマヤ。休んだこととかはともかく、アレ。アレはどういうこと?」

アレ、と指さしたのは玄関先の粗大ゴミだった。

どういうことも何も、私が登山をやめるだけの話。いらぬ山道具をまとめたっただけさ。

あおいちゃんが息を呑み、目を見開く。

ひなたは、

「嘘だよね？」

断定するように、そう言った。

「嘘なわけないじゃん。もともと辞めようとは思ってたんだ。だって疲れるし、お金かかるし、しんどいし——」

「マヤ……今、自分がどんな顔してるのか分かってる？」

どんな顔かなんて鏡がないと分からない。まさかひなたとあおいちゃんみたいなのに、悲しそうな顔はしてないでしょ。

「マヤがほんとに辞めたいなら何も言わないよ。でも、自分に嘘ついてまで無理に辞めようとしてるなら、止める」

「だ、だから嘘なんて——」

「マヤちゃん」

あおいちゃん、割って入ってくる。

「富士山登ってるとき、本当に楽しそうにしてたよね。私のためにペースを落としてくれたのは嬉しかったよ。ありがとう。でも——」

もう、二人して何なのさ。

「山頂に着いたときと、御来光を眺めるとき。すっごく悲しそうな顔してた。寂しそうだった。ねえ、あの時山頂で何があったの？ それが原因で辞めたくなくなったんでしょ？」

「ねえ、マヤってば——」

「何があったって、何もなかったんだよ」

二人して人が忘れようとしてることに踏み込んできてさ。

忘れたいのに、話したくないのに。

二人の必死な声と表情が、勝手に私の口を動かしていく。

私はいつだって嫌なことから目をそらしてきた。登山を始めたのも、ぼつちをこじらせてた自分を見ないふりするためだった。山つていう異世界が、現実を忘れさせてくれるんだ。お母さんに捨てられたとき、親戚に要らない子扱いされたときも、現実逃避でその場をしのいだ。

お父さんが死んだときは少しちがった。山好きだけど滑落事故とかじゃなくて、普通に交通事故で死んじゃってさ。お葬式で骨を拾っても、全然実感がわかなかつたんだ。現実逃避の必要がなかった。

あんまりにも実感がわかなくて、いつの間にかこう考えてた。本当は死んでなくて、どこかに隠れて私を待ってるんじゃないか。それこそ、約束の山——剣岳の山頂とかで。

だつていつしよに登ろうつて言ったもん。今は無理だけど大きくなつたら必ずつて。

だから私、いろんな山に登って体を鍛えた。知識もつけた。私はひとりぼつちなんかじゃない、山頂でお父さんに会えばきつと元通りになるつて信じてた。

でもお父さんはいなかった。どこの山の頂にも、剣岳にも。

お父さんだけじゃない。もしいらないにしたつて、山頂にはきれいな景色と、登りきつた達成感があるはずなのに。自分の足でここまで来た快感があるはずなのに。何もなかつたんだ。

山の頂にあるものは——一人ぼつちの現実だった。ずっとずっと見ないようにしてきたものだけ。

だから私は登山をやめようつて思ったんだ。お金がかかるなんて嘘だよ。バイト代でも食費でもなんでも使つて登りたいよ。登り続けたいよ。

でも、もう無理。

富士山を登るのは楽しかつたし、道中の苦労も吹っ飛ぶくらい、景色がきれいだった。

けどそこにお父さんはいない。お母さんもいない。一人ぼつちの私だけ——見たくもない現実があるだけなんだ。そのことを思い出しちやつた。

こんなにも悲しくて寂しい思いをするくらいなら、登山なんて辞めてやる。

もう二度と山になんて登るもんか。お父さんが登りそうもないマインナー低山巡りで誤魔化すのもきっぱり辞める。一人ぼっちの現実
は知らんぷり。

だから——登山なんてろくなもんじゃないんだ。

「そっか。じゃあ今から天覧山に登ろう！」

「話聞いてたあ!？」

ひなたのやつ、シリアスの余韻に浸る間すらなく即答しやがった。話聞いてないな？ 居眠りしてたな？ さすがにこのレベルの話を居眠りされたら泣くよ？

半泣きでにらみつけるけどひなたはどこ吹く風で私の手をとって、ぐいぐい外へ向かう。ストッパー役のあおいちゃんまで私の背中を押している。鬼か、あおひな。

ぶっちゃけこの話をすれば二人とも重い空気に耐えきれず逃げ出すんじゃないかと思ったのに、まったく効果がないのは予想外だった。

二人の意図が分からず目を白黒させているうちに天覧山の登山口にたどり着く。登山がしたいけど怖い気持ちを誤魔化すために、何度も登ったことのある見慣れた山だ。

前をひなた、後ろをあおいちゃんに固められ、登山道を進んでいく。

「富士山に比べると楽勝だねー」

「当たり前でしょ。向こうは日本一の山なんだから。ね、マヤちゃん？」

「へーへー」

無理やり山に連れてこられたのはちよつとシヤクだ。返事も適当になるといふもの。

ふてくされているうちにもう山頂の展望台が見えてくる。

何の苦勞もなく登りきったところで、ふとあおいちゃんの呼吸に気がついた。息が一切乱れてない。前にここで会ったときは息切れしてしんどそうだったのに、成長したんだ。前に進んだんだ。足踏みしてばかりの私と違って。

「ねえ、ここで会ったときのこと覚えてる？」

ネガティブな気持ちを切り払うように、ふとした調子で切り出すひなた。覚えてないわけがない。

「覚えてる。あおいちゃんに気づかれなかったのはショックだったなあ……」

「そ、それは忘れてよ」

あんな訳の分からない二重生活の始まりを忘れろなんて無理な話。一生根に持つもんね。

「あおいは薄情だねー」

「ほんとほんと、ねー」

「もう何よ二人して！」

きーつと怒り出したあおいちゃんから逃げるように、私とひなたは多峯主山の方へ駆けていく。三人とも余力があつたので、流れるように追加登山が始まった。

多峯主山は天覧山と比べて傾斜がきつく、鎖場まである。普段着で登るのは少し勇気がある山だけれど、成長したあおいちゃんとひなた、慣れてる私の三人は特に問題なく上へ、上へと進んでいく。

途中見返り坂と呼ばれる坂道でひなたが言い出した。

「ここ、見返り坂っていうんだよ。昔、どつかの偉い人がここで何回も振り返ったんだって」

「さっぱり説明になってない！」

「ふふん、説明しよう」

先輩アピールのチャンス、逃すわけにはいかない。

「偉い人は源の義経のお母さん！ 景色がきれいで見返りしたんだって。ほら、振り返ればとつてもきれいな景色が、けしき……」

あれ、そんなにきれいでもないな。杉木立のしげる普通の坂道って感じ。いや、でもよく見ればきれいかも？ うん、きれいだ。だから

首をかしげないでひなた。

「そんなにきれいかなあ？」

「みつ、見る人の心がきれいだときれいに見えます」

「へー、じゃあ私の心が汚いってこと？」

「……先を急ごう！」

「こら待て！」

なんだかんだ知識をひけらかせて私は満足。歩調を早めて先を急ぐ。

残念ながらアピールポイントはこれ以降なかったけど、友だちといっしょにおしゃべりしながら登る山道は、慣れているはずなのにとっても新鮮で、楽しかった。

無事に登頂した私たちは、展望台の木の椅子に腰掛けゆっくり休憩する。

少し視線を動かすと飯能のきれいな町並みが見渡せた。きれいな空気と青い空のおかげで開放感がたまらない。これがあるから登山はやめられな——はっ!?

「謀ったなキサマ!」

「ああ、バレた?」

「とうか、いまさら?」

ひなた、あおいちゃんがこともなげに言う。

辞めるって決意したのにまた登山したい気にさせられてる。途中からは普通に楽しんだ。こ、この策士ども……!

「マヤはさ、間違ってるよ」

「な、何が?」

「山にお父さんがいなくて、一人ぼっちの現実があるだけってこと」

不意に、手が温かいぬくもりに包まれる。隣に座ったひなたが、私と手を重ねていた。

「一人じゃないよ。私がいる」

「私もね」

後ろから、あおいちゃんに肩に手を置かれた。

「さつき私たちと登るの、楽しんだでしょ? 今はどう?」

「……楽しい」

「そうでしょ。山に登りたいけど怖いときは、私たちに言つてよ。また今日みたいにつき合うからさ」

「みんな登れば大丈夫。マヤちゃんは一人じゃないんだよ」
だからまた、登ろう。

二人はそう言った。

私は何も言えなかった。

ただ——夏場で暑苦しいはずなのに。

寄り添ってくれる二人の温かみが、とつても心地よかった。

第14話

北アルプス、穂高連峰。

国内屈指の縦走ルートの終端で、私たちはスパートをかける。南岳から大キレットを踏み越え、足の痛みを我慢して、いくつものピークを乗り越え次が最後の山頂だ。

たどり着いた頂に、お父さんの姿はない。お母さんに捨てられた現実も変わらない。目をそらしてきた事実が厳然と、私の心を締め付ける。

けれどももう怖くない。

「マヤちゃん?」

かえでさんの手を握る。今回の縦走に私なんかを誘ってくれた、年上の友だち。首をかしげてはいるけれど、「なんだか甘えんぼになったわね」と苦笑して、受け入れてくれた。

私は一人じゃない。いっしょに登ってくれる友だちがいる。失ったものは戻ってこないけど、一人残されたことは変わらないけど、友だちがいるから一人じゃない。だから山に登るのは、もう怖くない。かえでさんの手をぎゅっと握れば、握り返してくれる。体は疲れて重く、下山に使うエネルギーが惜しくて交わす言葉もないけれど、目の前の絶景と達成感に言葉はいらない。

縦走ルートの終端。私たちは山頂標の前に、ただ無言で佇むのだった。

私の登山やめるやめる詐欺から一週間。いろいろなイベントが発生した。

最たるものがかえでさんと北アルプス縦走だ。急峻な岩場、鎖場、殺意の高い大キレット、エスケープルートのない緊張感など、普通の登山じゃまず味わえないスリリングな山行だった。もちろんどここの山頂にもお父さんはいなかったけど、代わりに友だちと登山を楽

しんでる私が出た。一人じゃなかったらどんな山でも怖くないもんね。

その次はバイトだった。富士登山と北アルプス縦走で私のお財布はすっからかん、以前からやってた単純労働バイトにくわえて日雇いバイトで稼いだ。週七でがつり稼いだからしばらくは働かなくて大丈夫だ。

バイトといえば、ひかりさんだ。借りてたタオルのことを思い出して、ひかりさんが働いてる「すすき」というお店まで返しにいった。そのとき店先に貼ってあったバイト募集中のチラシはスルー。接客とか天地がひっくり返ってもやらない。お客さんがきたら「いらっしやいませ」じゃなくて「お帰りはあちらになります」って笑顔で言いそうなくらい、接客業は無理なもの。

ただ、ついでに買った百円のクッキーはおいしかった。気が向いたらまた行こう。

夏休み始まって二週間はかなり充実してたと言える。登山やめる、つていじけてたのが嘘みたい。立ち直らせてくれたあおいちゃんとおひなたには感謝だ。

あの二人とここなちゃん、かえでさんも普通に満喫してるらしい。あおひなたは霧ヶ峰に登ったり、四人で蛍見物の名所に行ったとか。写真付きでいくつもメールをもらった。

うんうん、適度な距離感がいい感じ。友だちって言っても毎日べったりじゃない。離れてそれぞれ好きに過ごすことも大事なのだ。友だちだからこそ距離をとることもあるのだ。別に、自分の弱みをつつり見られたことが恥ずかしくてつい距離をとっちゃってる、なんてことはないのだ。

『そんな感じなのだ』

『なのだなのさうるさいな』

飯能駅前にて。

暇を持て余した私は、待ち合わせ相手のほのかに、トークアプリで近況をつらつら語っていた。

ほのかとは夏休み前もほとんど毎日雑談していたんだけど、その雑

談の中で私が天覧山と多峯主山の写真を送信した。あおい、ひなたちゃんといっしょに登ったときのものだ。それを見たほのかがなぜか「夏休みになったら飯能に行く。案内して」と言い出し。日程を調整した結果が今日、というわけだ。

たぶん、私の天才的な撮影技術がほのかのカメラマン魂に火をつけたんだろう。ピンぼけと手ブレが酷かったけど、上級者から見れば味になってたのかも。きれいな景色があれば撮りたくなるのがほのかだから。

ほのかと約束した少し後、あおいちゃんたちから次の山行についての話し合いに誘われたけど、断るしかなかった。日時が丸かぶりだったから仕方ない。今度埋め合わせしよう。

ほのかからピコン、と新着通知。

『でも元気にやってるみたいでよかった』

『ありがと。ほのかはどう？ 楽しんでる？』

『そこそこ、かな』

『そこそこどころか、最高に楽しんでると言わせてやるのだ』

『うん、お願い』

少し間があく。

ふと、今回の小旅行で気になったことが頭に浮かぶ。

『ところで、ほんとにウチに泊まるの？ せまいよ？』

『平気。私はマヤの家がいい。……迷惑だった？』

『いやいや、面白みのない家だから、覚悟しとけてだけ』

『覚悟しとく』

ほのかも物好きだなあ。

群馬からわざわざ写真撮りに飯能まで来て、狭苦しい私の部屋に泊まっついていくっていうんだから。布団は一応予備がもう一セットあるし、黒き侵略者は聖なる煙で退治したからこっちの準備は万全だ。ほのかも平気って言うてるしもういっか。

その後、聞き上手なほのかに私が話し倒すかたちで時間を潰していると、『そろそろ着く』と通知。改札前に移動した。

改札を通過していく人の波。ぼうつと眺めていると、その間に懐か

しい姿が見えた。ボーイツシュなショートカット、落ち着いた色合いの服装、表情は薄いけど整った顔立ち。

直接顔を合わせるのは久しぶりだ。

私のほうから近づいて行って、おきまりのあいさつを決める。

「やあ、美少年っ！」

「引っぱたくよ？」

「ごめんなさい」

目がマジだった。

初対面のときほのかを本気で美少年と思い込んで接していたのをネタにしたあいさつなのだけど、前日もやったからね。天井は好きじゃないみたい。

ほのかは目を細めてため息を一つ。

「相変わらずだね、マヤは」

「そっちこそ、夏でも冬みたいにクールな顔だよ」

「それ、ほめてるの？」

「ほめてる、ほめてる。さ、まずは私の城に荷物置きにいこー！」

一泊分の荷物でも、ほのかの細腕には大きく見えた。できるベルガールのごとくそれを取って、あるき出す。

友だちと呼ぶのはまだ気恥ずかしいけれど、ほのかは一番付き合いの古い私の大切な人だ。そばにいると落ち着くし、話していれば楽しい。今日と明日はきつといい日にちがいない。しぜんと足取りが軽くなる。

ほのかも同じ気持ちだったらいいなと浮かれながら、我が家に向かった。

私とほのかは荷物を置いてから、飯能めぐりに出発した。

山で出くわすことが多かったので登山仲間と認識してるけど、ほのか本人にとって登山はツイでだ。本命はきれいな景色をカメラにおさめること。私が普段の生活を携帯で語っているうちに飯能に興味

がわき、夏休みを使ってやってきたこともその一端。

ルートは以前黒い侵略者に追い出されたときの散歩コース。おなじみ謎の象さんオブジェの公園、飯能河原、吾妻峡、ムーミン谷に天覧山、多峯主山。どのスポットもほのか好みの風景が撮れると考えていたら、本当にパシヤパシヤ撮りまくってた。しかも各所への道中にある市街地なんかも。普通の民家なんて撮って楽しいのかな？

天覧山の山頂では私の豊富な知識に基づいた素晴らしいガイドが炸裂した。

『知ってる？ 天覧山の標高は一九七メートル。でもこの通り、山頂の看板には一九五って書かれてるの。不思議でしょ！』

『ほんとだ、不思議だね。でもなんで？』

『は？』

『だから、なんで実際の標高と書かれてることが違うの？』

『……よし、このまま多峯主山も制覇しよう！ 天気がいいからスカイツリーも見えるよ！』

『だから——』

なんで、どうしてと聞いてくるほのかの背中を押して多峯主山に向かった。ほのかはまるで、私が知ったかぶりをしているような苦笑いを浮かべて口を閉じたけど、もちろん私は知ってるのだ。なにげないトリビアにツッコまれて困ったからごまかしたわけじゃないのだ。

多峯主山の山頂では撮影会をしつつ、お互いのお弁当を交換しあった。ほのか持参のお弁当はお兄さんが作ってくれたらしい。妹のことを考えとても丁寧に作られたのが分かるお弁当と、私の雑なおにぎりじゃ釣り合わない。といってもないものは増えないので、いわゆるあーんさせて食べさせるサービスを提供した。ダメ元だったけど当然のようにほのかに応じられ、「ほあっ！」と私のほうが変な声をあげちゃった。

午前中にぐるっと飯能を巡り、山を二つ登って降りてくるとすっかり日が傾いていた。

商店街を通って私の自宅に向かう。その最中もほのかは気ままにシャツターを切っている。初めて山で見かけたときも、ほのかはこう

して一人シャッターを切っていた。あの日からもう何年――

あ、思い出した。

「ほのか、ちよつとあの店に寄っていい?」

「ん、いいよ」

ちようど通り道にあるケーキ屋さん、「すすき」に入る。とたん、砂糖とバターの良い匂い。次いで正面のショーウィンドウに並べられた、いろとりどりのケーキが目に入る。

カウンターも兼ねたショーウィンドウの向こうには、ひかりさんの姿があった。

ひかりさんが「いらっしやいませー!」と声をあげると、ほのかはしぜんな動きで私の背後に位置どる。盾か、私は。

「マヤちゃんじゃん! 元気してる? 今学校の帰り?」

「こんにちは。超元気です。学校は夏休みですなー」

「夏休みかー、いいわね。で、休み使って彼氏さんとデートしてるわけだ」

「そうなんですよ……ん?」

話しながら百円クッキーを手にとっていたので、反応が遅れた。デートはともかく彼氏とな。

「いやいや、ほのかは女の子なんで」

「どうも、ほのかです……」

「あつ、ごめん! てつきり絶世の美男子かと思っちゃった!」

ひかりさんは謝りつつも調子がいい。言われたほのかは借りてきた猫みたいに私を盾に使っている。

人見知りだとは知っていたけど、こんなにおとなしいほのかは久しぶりだ。今なら少しからかってもツツコまれないのでは。

「言われてみればデートみたい。ね、ほのか!」

後ろからほつぺたをつねられる。痛い。

「照れてるな? 今、顔真っ赤になってるな? 見なくても分か――いひゃい!」

強めにつねられる。割と痛い。

赤くなつたのは私のほつぺただろうな。つねられたところをさす

りながらクツキーの会計をお願いすると、ひかりさんは「仲いいのね」と微笑んだ。仲いいつもりだけど、この痛みのせいで一方通行の不安を覚えた帰り道だった。

バイト代をはたいて買ったお高い扇風機がごうごうと唸る。ほのかの綺麗なショートカットがパタパタ揺れている。夕飯の準備にはまだ早い時間なので、私たちは畳の上うつ伏せで寝そべて、のんびり疲れを癒やしていた。

「……暑いね」

「うん……」

ただし、暑くてあんまり疲れはとれない。

クーラーなんて未来兵器を買えば、設置費も込みで数カ月分の食費が飛んでいく。そう考えてお高い扇風機を買ったのだけど、生ぬるい風が逆に暑さを増しているみたい。

くそう、散々だ。今月から電気代がかさむことを親戚に相談したら「じゃあ電気代もバイト代で賄ってね」とか言われるし。ほのかもじわじわ汗かいてるし。扇風機の風、電気屋さんの展示品のはけっこう涼しかったんだけどな。

あ、そうか。電気屋さんは冷房かけまくってて風が冷たくなってるんだ。

そんなことにも気づかず「ほのかのための出費！」って覚悟を決めた私って一体……。

「マヤ？ マヤってば」

「は、はいっ」

「なにボーっとしてるの。大丈夫？」

「大丈夫です、はい……」

そっちこそこんなに暑くて不便なところで大丈夫か、と聞こうとするけど、その前にほのかがカメラを取り出した。

私にも見えるように距離を詰めて、液晶画面を操作する。今日撮っ

た飯能の風景が表示されている。

おお、カメラのレンズを通すだけでこんなに変わるものなんだ。普段見ている風景のはずなのに、切り取られた一瞬がとても新鮮に映る。

「名カメラマン」

思わず口に出た。

ほのかは無言だったけど、かすかに口元が笑っていた。

そのまま、今日撮ってきた写真を古いものから新しいものへ、順番に表示していく。途中から日付の表示も消して写真を全画面に。ほのかと目線と感性で切り抜かれた飯能は、どれもきれい。あつという間に最後の商店街の写真になる。機械的に写真を流していたほのかの指は止まらずまたボタンを押す。

「あれ？」

「あ」

すると、懐かしい光景が表れる。

忘れもしない谷川岳の山頂で、私とほのかが並び立つ。山をキメた私は緊張するほのかと腕を組み、笑いながらピース。ほのかもひかえめにピースサイン。

初めてほのかと出会った日、最後に撮った写真だ。

「む、昔が残ってるだけだから！　べ、別にいつでも見返したくてこれだけ残してるわけじゃないから！」

「そうなの？　じゃあ今まで撮ってきた写真全部これに入ってるんだ」

急にほのか慌てだした。

でも最近の機械はすごいや。写真好きのほのか撮ってきた枚数となると千枚じゃきかないだろうし、下手すると数万枚はあるかもしれない。それが全部小さなカメラに収まっているなんて。てっきり、ある程度データがたまったらパソコンとかメモリーカード？　とかに移すのかと思ってたけど、まさかほのか私との写真だけ特別にカメラに残してるなんてあるわけないし。

どうせならあの日の谷川岳の風景も見せてもらえないかな。

って考えたとき、さつき買ったクッキーのことを思い出した。散歩用の小さなザックからクッキーを取り出し、ほのかに手渡す。

「なに、これ?」

「さつき思い出した。今日は初めてほのかと会った日でしょ。せっかくこつちまで来てくれたし、記念日のプレゼントってことで」

「ふうん……」

中学の頃はクラスの陽キャ・リア充たちが何かと記念日だなんだと贈り物をしていたのが理解できなかったけど、陽のエネルギーが貯まりつつある今なら分かる。贈り物をする事で、好きな人たちとの関係をもっと大切にしたいんだ。たぶん。

ただし常時火の車な私の家計じゃ百円クッキーが限界。

ほのかはまたかすかな笑みを浮かべている。

「ありがとう」

どういたしまして。こつちこそ、来てくれてありがとう。

限界ギリギリでもほのかは笑ってくれた。

なるほど、これはうれしい。なんとしてでも記念日をこじつけて贈り物をしたい気分には駆られる。大切な人の笑顔は登頂の快感にまさることも劣らない。

などと感慨にひたっていると、ほのかが出し抜けに切り出した。

「ねえ、また谷川岳に登ろう? あの日みたいに二人つきりで——」

「登ろう! 日取りはいつにする?」

「……即決だね」

山に登ろうと言われて登らない山ガールがあるうか。いやない。好きな子との登山ならなおさら。それに今の私は一人で山に登るのが怖い状態だから、誘ってくれるのはありがたい。

谷川岳への旅費、その他雑費と生活費、バイト代などを脳内ソロバでパチパチやっている、スマホに着信があった。

画面には「ひなた」の文字。横から覗き込んできたほのかの「……誰?」と無表情で言うのが妙に怖い。友だちよ、友だち。そういえばトークアプリだと名前は出してなかったかも。

『もしもしマヤ? 次登る山決まったよ——!』

「そうなん、どこ？」

『谷川岳！ 私とおおいの思い出の山なんだ。マヤにも来てほしいな！』

「ああ、二人で朝日を見に行く約束をしたとかいう。よーし経験豊富なこの私が完つべきなガイドを——」

『先頭はかえでさんだからね？』

「なんでやねん！ って、ん？ 谷川岳？」

当然のように先頭役をリストラされたと思ったら、気になるワードがあることに気づく。

ひなたとおおいちゃんの約束の山とは、昔もう一度二人で朝日を見に行く約束をした山のこと。それが谷川岳だった。そして私とほのかに登りに行く山も、谷川岳だった。

「えーっと……」

『どしたの？』

「ごめん、ちよつと待って。ほのか、今度の谷川岳は六人で登らない？」

「えっ」

目を丸くするほのか。数ヶ月前の私もきつと同じ反応をすると思う。

「私の友だち四人も谷川岳登るって言うててき。みんなすつごくいい人だから、ほのかもいっしょだと絶対楽しいよ！」

でも、私は友だちと過ごす楽しさを知った。面白さを知った。どうせ同じところに行くなら、その楽しさや面白さをほのかにも知ってほしい。

ほのかは若干人見知りだけど、コミユカおぼけのひなた、同胞のおいちゃん、天使のここなちゃん、頼れるおねえさんなかえでさんの四人がいれば、小中学校時代のクラス内での私みたいには絶対ならない。楽しい登山になることは確定だ。

ほのかはしばらくうつむいて考え込むと、小さく「分かった」と呟いた。

「やった！ 約束だよ！ ひなた、待たせてごめんね。谷川岳だけど、

私の友だち一人追加していい？　ちなみに登山経験あり、同い年」
『……その子がいいなら、別にいいけど。——みんなもいいって』
「やったぜ」

四人で集まるって言ってたけど、まだ解散してないらしい。小さく他の三人の声が聞こえた。

ひなたはその後妙に事務的な口調で、日取りがまだ未定なこと、追って連絡することなんかを伝えた。ふむふむ、了解。ほのかとの合流場所と日時はおいおい決めればいいや。

『ところでその、マヤの友だちって子。そこにいるの？』

「いるよ。今日はお泊りだ。代わろつか？」

『いい。ねえ知ってる？　ゴキブリって殺虫剤の進歩といっしょに進化してるんだって』

「はあ?」

なんか急に嫌すぎる豆知識語りでしたぞ。何のつもりだ!?

『マヤは別にどうでもいいけど、その子がゴキで嫌な思いするものなんだしね。私んちに逃げてきてもいいよ?』

「よ、余計なお世話!　ヤツらはこないだの煙で死滅——した、はず……」

尻すぼみになっていく私の言葉。

そういえば、かえでさんの家から帰ってきた後、きちんと死体を確認したか?　部屋の隅々まで見た?

見るわけがない。たとえ死体でもヤツには触れないし、もし生きていれば絶望だ。私は嫌な事実から目をそらすのが得意なんだ。

『ふーん。まあマヤがいいって言うならいいけど。じゃ、その子によろしくね』

「待っ……」

あの女、不安を煽るだけ煽って切りやがった。なんちゆう的確な嫌がらせだよ。私、何か悪いことした?

で、でも今の私にはほのかがいるもんね。もしヤツが何かの間違いで生き残ってても、土下座してほのかに対処してもらおうもんね。

そう開き直ってほのかの方を見ると、

「……」

「えっ、何。なんで拗ねてるの!?!」

「マヤなんて知らない」

「え、ええー……」

ほのかはほつぺたをふくらませ、そつぽを向いている。

おかしい。ほのかは嫌なことをきちんと嫌と言う子だ。ひなたたちとの登山が嫌なら拗ねる前に断るはず。じゃあどうしてほのかが不機嫌になっているのか。ひなたの唐突すぎる嫌がらせの原因とは。ヤツらの全滅は事実と言えるのか。

あつ、そうだ。まずヤツらへの対処を優先しなきゃ。じゃないと今夜眠れないぞ。

「ほのかあ、大変なんだよ。ヤツらを探して始末しなきゃ。ねえ聞いてる?」

聞いてなかった。つーんと擬音が聞こえるくらい拗ねに拗ねまくっている。

あーもー、ほのかといいひなたといい、山の天気かあんたらは!

ここな視点

「あいつ、最近付き合い悪くない？」

ひなたさんがぶつきらぼうにそう言うと、私——ここなかえでさんは顔を見合わせました。

時間は朝の十時、場所は飯能駅前。私、かえでさん、あおいさんとひなたさんの四人は、次に登る山の話し合いをするために待ち合わせをしています。

後はあおいさんが来れば全員集合なんですけど、ひなたさんが「あいつ」と呼んだのはマヤさん。山を登るのが文字通り三度のご飯よりも大好きなお友だちです。

「霧ヶ峰もホタルの池もバイト、今日は友だちと先約があるからってさ」

「まあまあ、あの子にも都合があるのよ」

「そりやそうですけど……」

かえでさんがなぐさめると、ひなたさんはますますふくれてしまいます。ひなたさんはマヤさんと大の仲良しですから、夏休みが始まってからマヤさんがかえでさんと二人きりで北アルプスの縦走に行ったこと、不満なんだと思います。

かえでさんもそのことを察したみたいで、苦笑いして何も言わなくなりました。

ここは私が助け舟を出さなきゃですね。

「遊べないのは寂しいですけど、バイトをたくさんするのは良いことだと思います」

「ここなちゃん？」

「だってマヤさんってば、食費を全部登山に回してまで山に登るんですよ？ いつか倒れるんじゃないかって心配で」

「そうなの!？」

そろって驚くひなたさんとかえでさん。

そうなんです。高校生になってからは特にひどくて、「燃費の良さは私の取り柄！」なんて言いながら三食もやしと水だけで過ごそうと

しますし、今のご両親はマヤさんが何をしても口出ししませんし。もうちよつと自分の身をいたわってほしいです。バイト代で少しでも多く食べてくれるといいんですけど。

「あいつやけにやせてると思ったら……今度お説教だね」

「ぜひお願いします。私が言っても勢いでごまかされちゃって」

「北アルプス縦走できるなら相当な健康体だと思うけど、たしかにそれは心配ね。私からも言っておくわ」

「みんなー、待たせてごめん」

そこにあおいさんがやってきました。

これで全員集合なので、ここから一番近いかえでさんの家に移動して、ゆつくりお話することに。かえでさんもマヤさんと同じくらい登山が好き人ですから、きつとおうちも山みたいに大きかったり――

「あれ、マヤちゃんじゃない?」

移動しはじめる直前、あおいさんが指さしました。その方向を見ると、マヤさんが駅の中にとことこ入っていきます。

それだけなら大したことはありません。きつとこれから電車でお出かけでもするのかもしれないし。

でも、マヤさんの表情には見たことないほど嬉しそうな笑みが浮かんでいました。足取りも弾むようです。

私たちは気になって、つい追いかけていました。

改札口の前で立ち止まったマヤさんが携帯電話をいじっていると、電車の中からたくさんの人が出てきて、改札を通っていきます。その中の一人、高校生くらいの女の子がマヤさんに近づいていって、お話を初めました。

「あの子が友だちみたいね」

「そうですね。でも私たち以外にもちゃんと友だちがいたなんて……暑さにやられたわけじゃなかったんだね」

あおいさん……感動したみたいに言ってますけど、たまにすごいこと言いますよね。マヤさんが聞いたら怒りますよ?」

「むー……」

残るひなたさんは、口を尖らせてとっても不満げでした。

私も少し分かります。マヤさんがあんなに気を抜いて笑ってる姿、私も見たことないですから。少しヤキモチです。

「行く、みんな。あいつが誰と会ってたって、あいつの勝手でしょ」

「あ、待ってよひなた!」

踵を返して大股で歩いていくひなたさんと、追いかけるあおいさん。

私はもう一度マヤさんとお友だちを振り返ると、かえでさんといっしょにその場を後にしました。

かえでさんの家は昭和新山やエベレストにはなかったですけど、大きくて素敵なところでした。かえでさんのお部屋も広くて大きなベッドもあって、居心地がいいです。

みなさんが腰を落ち着けると、かえでさんはこの前の縦走のときの写真を見せてくれました。

すごい、断崖絶壁です。これがキレット。かえでさんとマヤさんはこんなところを乗り越えてきたんですね。

「キレットって何?」

「山が深く切れ込んで谷になっているところですよ。キレットは日本語で、漢字だと切れっ処と書くんですよ」

へー、とあおいさんとひなたさんが感心してくれました。ふふ、マヤさんがいたら「私が解説したかったのに!」って悔しがるかもしれません。

「これ、落ちたら死んじゃうんじゃない?」

「死ぬね、確実に」

「じゃあさつき見たマヤちゃんは一体!」

「幽霊!」

「ここら、落ちた前提にしないの」

かえでさんが二人をたしなめています。普段のマヤさんはちよつとだけ、その、ふわつとした人ですから、こんなところに行ったなん

て聞いてもピンとこないのは分かりますけど、登山に関してはすごいんですよ。決めつけるのはひどいです。

ひとしきり写真を見た後、あおいさんは弱々しく話し出しました。登りたい山にロープウエーがあるんですか。あおいさんは高いところが苦手ですから、別の山に——ひなたさんと昔約束した山？ 素敵です！

じゃあがんばって登りましょう。かえでさんの言う通り、怖いものでも挑戦してみれば、案外平気だったりします。まずはみんなで行きましょう。

こうして私たちが次に登る山は、谷川岳に決まりました。あおいさんがまだ怖がつてるみたいでしたけど、きつと大丈夫。三つ峠でも富士山でも、あおいさんは必死にがんばって登りきったんですから。またみんなでがんばればいいんです。

「よし、じゃあ次に登るのは谷川岳で決定！ さっそくマヤにも言っとくね！」

早速携帯電話で連絡するひなたさん。待ち合わせのときの不機嫌な様子はすっかり直っていました。

でも次の瞬間にはまた「なにより！」とむくれてしまいます。

マヤさんが電話に出なかったみたいです。

みなさん特に予定もなかったので、お話の後はかえでさんの家で涼しくなるまで過ごすことになりました。お昼をごちそうになって、かえでさんの部屋で色々な山のお話を聞いたりして。

日も傾いてそろそろ解散する雰囲気になったとき、ひなたさんが「あ、そうだ」と思い出したように言います。

「忘れてた。あいつにもつかい電話かけとこ」

「電話じゃなくてメールでよくない？」

「気づかないかしんないじゃん！」

ひなたさんがあんまりすぐに反論するので、私とかえでさんは思わ

ずにごにご笑っちゃいます。

「うんうん、分かるわよ」

「え、な、何がですか」

「ひなたさんはマヤさんとお話したいんですよ？」

「声が聞きたい、とも言うわね」

「なっ、そそそんなわけ……」

「なんだそうなのひなたー？」

顔を真っ赤にしたひなたさんを、あおいさんが肘で突っつきます。

みなさん仲が良いですね。

あおいさんを振り切ったひなたさんは、部屋の隅に逃げ込んで携帯を耳に当てました。

今度はずながつたみたいです。

「もしもしマヤ？ 次登る山決まったよー！ ——谷川岳！ 私たちの——」

ひなたさんはもともと元気な人ですけど、久しぶりに話せてうれし
いんでしょうか。いつもより声が大きく聞こえました。

でも急に言葉が途切れます。

無表情でしばらく黙り込んだかと思うと——なぜかゴキブリさん
の豆知識を披露しはじめました。ひなたさん!?

啞然とする私たちに、ひなたさんは無表情で言います。

「駅前で見たあの子と、今日お泊り会だって。あの子もいっしょに谷
川岳行っていいかって」

あの方も山が好きだなんですね。マヤさんと仲の良い人なら、
きっと私たちともお友だちになれます。

だからそれは良いことだと思うのですが、携帯を睨みつけながら
ほっぺたをふくらませるひなたさんを見ると、素直に喜んでいい
のかわかりません。

どうしましょう。こんなとき、マヤさんなら何かヘンなことを言っ
て和ませてくれるんですけど。今回はそのマヤさんが火種なんです
よね。

かえでさん、あおいさんと困った顔を見合わせていると、あおいさ

んが力強い表情でうなずきました。任せて、と言ってるみたいです。
あおいさんなら、ひなたさんとこんな仲のいいあおいさんなら、
きつとなんとかしてくれる。私たちの期待を背負ったあおいさんが、
ついに口を開きます——

「ヤキモチ?」

えっ、言っちゃうんですか!? それ凶星——

「そっ、そんなわけないでしょおー!」

ひなたさん!? すごいスピードで部屋を飛び出して行っちゃいました。
玄関の方から「お邪魔しましたー!」って聞こえます。

「ぶぶ、ひなたのヤツ結構かわいいところあるじゃない」

そう言って笑うあおいさんは、結構容赦がありませんでした。

今朝のマヤさんもそうでしたけど、誰か決まった人にだけ見せる特別な一面って、誰にでもあるのかもしれませんが。

第16話

ほのかを見送った翌日。

私はひなた——もとい、怨敵の邸宅を訪れていた。目的は怨敵を決闘の場で打倒することだ。

第一印象からは考えられないほど仲良くなれたと思っていただけ、やはり陽キャのひなたはどこまでいっても敵だったらしい。私はおとといの夜、ヤツに取り返しのつかない仕打ちをされたのだ。なんと少しでも報復せねばならない。

すでに果たし状は送っているので、玄関のドアを叩いて「たのもー！」と声を、張り上げようと思ったけど非常識な子みたいでみつともないからやめた。普通にインターフォンを押します。

『はい』

「こんにちは、山本です。ひなたさんいますか？」

『ああ、マヤちゃんか。部屋にいるよ。入っておいで』

「お、お邪魔します」

インターフォンから聞こえたのはひなたのお父さんの声だった。鍵のかかってない扉を開けて中へ。

はて、何か引つかかる。ひなたのお父さんに何か言うべきことがあるような、ないような。喉まで出かかっているんだけど。

思い出せないなら仕方ないか。人の家にお邪魔したんだからまずはお家の人にあいさつしなきゃ。そう考えた私は、長い廊下を通って人の気配のするリビングへ向かう。

大きめの山小屋まるごと一つ分はありそうな広いリビングでは、お父さんが一人ソファに腰掛けて新聞を呼んでいた。

お父さん——あ、お父さんか。そうだった、私この人にお父さんがまだ生きてるって？ ついてるんだ。そのことをいつか正直に謝ろうと思ってたけど、後回しにしてるうちにもう夏になった。どうしよ、今言っちゃおうかな。

「いらっしやいマヤちゃん。目の下にクマができてるね。大丈夫かい？」

「メイクなんて大丈夫です」

「はは、夜ふかししてメイクをしてたって？ 程々にしておきなよ」

「は、はい」

焦りすぎて変なこと言っちゃった。妄言にもさつと言い返してくれるあたり、さすが大人。こんなに優しい人なら？ のこと話しても怒らないかも。

それか、もうひなたの口から私の？ のことは伝わってて怒りを溜め込んでいる状態だったり。

ひなたの部屋に逃げ込むかこの場に留まるか、迷いに迷って変なダンスをしていると、お父さんが不思議なものを見るように視線を送ってくる。すると何か思い出したように「そうそう」と口を開いた。

「マヤちゃんのお父さんんだけど、昔の連絡先が全部使えないんだ。差し支えなかったらでいいんだけど、今の連絡先を教えてくださいえないかな。色々と話したいことがあってね」

「ごめんなさい嘘つきましたっ！」

条件反射で謝った。

使えるはずの連絡先が使えなくなってるのって寂しい。私も毎日のようにお父さんの携帯にかけてたけど、剣岳でその空しさに気づいたんだ。

そんなに空しいことさせてたなんて。やっぱり嘘はダメだ。

「お、お父さんはもう事故で亡くなってて……だから連絡先とかもなくてですね。ええと、つまり、？ つきましたごめんなさい！」

懐かしい。空しさのあまり八つ当たりで自分の携帯ぶつ壊したんだっけ。そのせいでかえでさんと連絡とれなくなるわ、余計空しくなるわで散々……。

こんなときでも現実逃避をする情けない自分に嫌気がさす。お母さんに捨てられたのも当然かな。

「顔を上げなさい」

聞こえたのはさつきまでの優しいおじさんの声じゃなくて、緊張してかしくまった男の人の声だった。この迫力からして、ビンタ一発くらいは覚悟すべきか。

覚悟ができなくても、上げなさいと言われたら聞かないわけにはいかない。下げていた頭をゆっくり上げて――

「ふあ?」

めっちゃ間抜けな声が出た。

待って、なんでひなたのお父さんに抱きしめられてるの。頭まで撫でられてる。手付きが優しくてやみつきになりそうなんだけど。

「あの時気を遣ってくれたんだろう。なら謝る必要なんてない。辛かったね。僕の方こそ気を遣わせてしまって、本当に悪かった。すまない」

「いえ、そんな……」

「今はお母さんと暮らしてるのかい?」

「えと、お母さんはその、なんだかんだでいなくなったので。親戚の人に引き取られました……」

「そうか。大変だろうに、がんばってるんだね。偉いぞ」

「はあ。あの、そろそろ……」

お父さんは「すまないね」とバツが悪そうに言っつて、離してくれた。危なかった。大人の人にここまで優しくされたのは久しぶりだったから、危うく骨抜きになるところだった。最悪、ひなたのお父さんに私のお父さんを重ねて大泣きした挙げ句甘えまくっていたかもしれない。

でも大丈夫だ。涙腺は締まっつて、お父さんは死んで、お母さんは消えてる。?ついたのも許してもらえた。絶対調じゃないか。

ひなたのお父さんは何か言いたげに口を開いては閉じを繰り返し、最後にお墓の場所を聞いてきた。私はその場所を伝えてから一礼して、今度こそひなたの部屋に向かった。

「ひなたコラあ! よくもやってくれたなあ!」

「ひゃっ、何よいきなり!」

部屋にカチコミをかけると、ベッドの上に寝そべっていたひなたが

飛び起きた。

何よとは白々しい、もうネタは割れてるんだ。私はワナワナと震えながら、名探偵よろしくびしっと指をつきつける。

「この前の電話の後、ヤツの死体が出たんだ！ 絶対ひなたの呪いでしょー！」

「はあ!? なんでそうなの!?!」

「幽霊はその手の話してるところに寄ってくるものよ!」

「幽霊じゃなくてゴキじゃん!」

「ひえっ、その名前口にしないで!」

そう、先日ひなたが電話口でゴキ語りした直後、押し入れの中にヤツの死体を発見したのだ。機嫌を直したほのかに捨ててもらったけど、前日まで押入れの中はきれいなままだった。つまり、ひなたがゴキ語りで呪いをかけて死体を召喚したとしか思えない。召喚士たるひなたを倒せばヤツらも消滅するだろう。

現実逃避、逆恨み、新たな侵略者の襲来から目をそらしているだけ? 知ってる、ほのかから散々言われた。

でも呪いのせいにでもしなきゃやってらんない。不死身の生理的嫌悪とかどうすればいいのさ。

「知らないわよ! もう、人を勝手に魔法使いみたいにして!」

「魔法みたいなもんじゃん! ひなたが変なこと言うから出てきたんだよ!」

「た、たしかにあのときはちよつと悪かったけど……」

あれ、ただの言いがかりなのにひなたが怯んでる。視線を伏せてもじもじする様子は、まるで怒られる前の子どもみたい。

お互い押し合っていたのに急に引かれたから逆に私も勢いを失っちゃう。

その間にひなたが態勢を立て直した。

「ていうかそんなことのためにこのメール送ってきたの!?!」

ひなたが突き出した携帯の画面には、先程送った私の果たし状メールがある。『大事な話があるから会いに行きます』と。その通りですけど何か。

「紛らわしいなあ、緊張して損したよ、もう……」
「ひなた？」

携帯を閉じてベッドに身を投げ出すひなた。その表情は緩みきっている。

なんだからしくなくない様子だったので、いったん矛をおさめてベッドの隣に座る。どうかした？ と聞くと、言いくそうに口を開いた。「マヤ、最近付き合い悪いじゃん。終業式の日、私ちよつと強引だったから。それに怒って距離とってるのかなって。大事な話っていうのも、そのことで文句言われると思って——」

「ないない」

実際、強引だったとは思う。でも私のためにやってくれたことだ。他でもないひなたとあおいちゃんが。結果的にはいい方に事が運んだけれど、たとえ悪い方向に転んだって、怒るところか距離をとる理由にはならない。

と、伝えてもひなたは「ほんと？」と不安そう。普段の元気とは大きくちがう、しおしおひなた。

「ほんとだよ。それに私、好きだから」

「ふえっ!？」

「登山。ひなたとあおいちゃんがいたから、好きなまままでいられたの」
「……ああ、そう。そうだよね、うん」

ひなたの頬がほんのり赤くなってる。分かるよ、弱気なところ見られるの恥ずかしいよね。私もあるとき恥ずかしくて、そのせいで——

「ま、まあ距離をとってたのはホントだけど」

「やっぱり!？」

「ほら、あんまり人に話すことじゃないから。気恥ずかしいというか……と、とにかくー!」

恥ずかしい気持ちがよくみえる前に話を切る。

「あるとき私を引っ張ってくれて、ありがとう!」

「ど、どういたしまして」

ひなたは赤くなつたまま、どこか釈然としない顔だった。全部本音で話したけど、まだ腑に落ちないところがあるのかな。

じーつと目を見つめてみる。

「な、何？」

「……別に」

「何よー!？」

我が心眼がひなたの気持ち捉えた。

やはり弱気なところを見られて気まづくなっているらしい。私も本音を晒して割と気まづいからおあいこ。気にしない方向でいこう。

まったくひなたは、ガサツで豪快に見えて案外小さいことを気にするんだから。

話もまとまったので、そろそろ帰ることにする。帰って夕飯のもやしサラダを準備しなきゃ。じゃ、またねと手を振って部屋を出ようとする——

「ゴキブリの件、ぜんっぜん話進んでないけどいいの？」

「その名前を呼ぶなああああ！」

うまいこと忘れてたタブーをまた持ち出して来やがった。耳と頭をかかえこんでうずくまってももう遅い。ヤツの黒い体に対する嫌悪と恐怖が私のメンタルをズタズタにしていく。

結局、満身創痍になった私はその日一日ひなたの家に泊まっていた。

第17話

あおいちゃんとひなたは仲が良い。

あおいちゃんと一度別れてからも九年間ずっと思い続けてきたひなたは、常にあおいちゃんのことを思いやってる。富士山に登るときも息を切らしてるあおいちゃんを一番多く振り返ってたのはひなただし、今度の谷川岳の件でも、あおいちゃんの高所恐怖症をどうにかできないかと一生懸命頭を悩ませている。ノリと勢い任せに見えるけど実はどこまでもあおいちゃんファーストな一途の子、それがひなただ。

一方、ひなたがボケとするとあおいちゃんはツツコミ役。ひなたの行動に遠慮なくつつこみ、文句を言って時に煽る。その無遠慮さはたまにうらやましくなるくらいだ。私もひなたとは仲が良いけど、あおいちゃんほどキレのあるツツコミはできないし、踏み込むこともできない。遠慮なくどっつける信頼感は見えていて妬ましく、尊い。

そう、尊いのだけど――

「それでね、ひなたのやつヤキモチ焼いて出て行っちゃったのよ。あ見えてかわいいところあるわよねー」

「う、うん、そだね」

出てくる話題の九割以上ひなた関連はさすがに疲れる。しかも話題がノロケなんだか煽りなんだか分かんないし。

谷川岳のロープウエーが怖い、と相談を受けたのが今朝のこと。お昼ちよつと過ぎにあおいちゃんの部屋にお邪魔して、そのことについて相談に乗ろうとした。

まずは軽い話から、と雑談に付き合っていれば出るわ出るわひなたの話題。昔ひなたが引越したときはひなただけ大泣きしてたとか、ガサツな癖に達筆なところがむかつくとか。

今は私がほのかとお泊り会した日のことを話している。ひなたは私とほのかが仲良くしてるのにヤキモチを焼いてゴキ語りをしたとかなんとか。

「照れ隠しにゴキブリの話出すってどーなん……?」

「ま、それだけ焦ってたんでしょ。ひなたは私と違ってマヤちゃんと付き合い短いもんね。私と違って」

なぜか二回言う上に得意顔なおおいちちゃん。確かに付き合いはおおいちちゃんの長いけど、前髪降ろした私と山の私に気づかなかったよね？ という反論は言わずにおいた。

でもひなたがヤキモチか。私もひなたと初めて会ったときは、おおいちちゃんがとられちゃうと思って寂しかった。それと同じ気持ちを私に向けてくれたとすると――

「うえへへ」

変な笑いが出ちゃう。

陽キヤは暗い嫉妬を抱かないと思ってたけど、違ったみたい。ひなたも私と同じなんだ。この前カチコミしたときのしおらしい様子といい、知らなかったひなたの一面を知られてうれしい。

それと同時におおいちちゃんがヤバイ。普通に雑談のノリで話してくれたけど、私に伝わったことひなたが知ったら、憤死するレベルの話だ。しれつと無慈悲になれるのがおおいちちゃんなんだよね。

そう考えたらおおいちちゃんと部屋に二人きりな今の状況が怖くなってきた。

確か遅れてひなたも来るって話だったけど、早く来ないかな――

「マヤちゃん？」

「ひえっ」

気づくと、おおいちちゃんの満面の笑みが迫っていた。目と鼻の先、息の触れ合うような近距離。

とつさに座ったまま後ずさる。すぐにベッドとかち合って下がれなくなる。左右への退路は、迫ってきたおおいちちゃんが両腕を突っ張って塞いだ。

「人の話聞いている？」

「も、もちろん」

「今何のこと考えてた？」

「ひなたのこと、だけど」

「ふーん、私がここにいるのに、ひなたのこと考えてたんだ」

いや、ひなたの話始めたのそっちじゃん！ 終始その話題だったじゃん！

理不尽なあおいちゃんだけど、気持ちは分かる。だって同胞だもん。あおいちゃんがひなたと再会したとき、私だって嫉妬して、裏切られた気持ちだった。

だからきつとあおいちゃんも同じ。私と同じなんだ。

そう考えればあおいちゃんの理不尽過ぎる物言いも、威圧的な笑顔も怖くない……怖く、ない——

「あわ、あわわ」

怖いわ！ 穂高連峰の核心部渡ったとき並みに怖いわ！

「そういえばこの間、ほのかちゃんだっけ。あの子と何してたの？」

「飯能を散歩したり、天覧山行ったり、ですかね……」

「楽しかった？」

「は、はい」

「ふうーん。よかったねえー」

あつ、デジャヴ。あおいちゃんの笑顔見てたら懐かしい感覚。

これで分かったけど、あおいちゃんと私の抱いた感情は違うと思う。理屈じゃなくて本能的に。そうじゃなければ、山中でクマさん見かけたときのこの感覚がデジャヴるわけないもの。

今のあおいちゃんはたぶん獣。話題を変えて、獣を追い払わなきゃいけない。

「とつ、ところで次、谷川岳行くでしょ。ロープウエーあるから、相談ってそのことだよな？」

「……そうなの。みんなは大丈夫って言うてくれたけど、やっぱり不安で……」

ころつと態度を変えたあおいちゃんが距離をとった。威圧感も消える。よかった、あれ以上近づいてたらチューでもしてたかもしれない。そういうのは好きな人とやらないとね。

さて、ロープウエーか。

あおいちゃんが高いところ苦手なのは知ってたど、たぶんどうにかなと思うな。

ずっと今度は私からあおいちゃんに顔を近づける。

「大丈夫！ 最近あおいちゃんが登った山は？」

「え？ 霧ヶ峰、かな」

「あつ間違えた。ええと、登った中で一番高い山は？」

「富士山だね」

「その通り！」

くそう、かつこよく励ますシーンだったのに間違えた。

でもその通り、あおいちゃんは富士山に登ってる。

「日本一の山を制覇して、日本一高い場所に立ったことがある。だからあおいちゃんは日本一の女なんだ。今更ロープウエーなんて楽勝だよ！」

「……そっか。日本一の女か。ありがと、マヤちゃん。そう言われたらなんだか行ける気がしてきたよ」

「うん、いけるいける」

不安で揺れていた瞳に、強い光が宿る。その光はたぶん、日本一を制した自信だ。

この自信を本番でも思い出せるかどうかは分からない。でもそのときは私だけじゃなくてひなた、かえでさん、ここなちゃん、それにほのかだっている。きつとうまくいくはずだ。とりあえず、今の私にできるのはこのくらい。

後はひなたの案だけど、あいつまだ来ないのかな。

「おおー、元気になったね」

「ひなた!？」

来てた。テーブルに肘ついてせんべいかじってる。いつの間に。

「二人とも真面目な話で夢中になってたからさ。勝手に入ってきちゃった」

「もう、空き巣か！」

「うんうん、元気になったね。うちのあおいがお世話になりました、マヤさん」

「いえいえ、こちらこそ」

「誰なのよ！」

あおいちゃんの反駁をさらりと受け流し、ひなたはお茶でせんべいを流し込む。

「あおいの悩みも解決したことだし、たまには山以外のところに遊びにいこーよー！」

そうしてひなたの提案にのった私たちは、いつものメンバーでお出かけすることになった。

東飯能駅から電車と徒歩で一時間半ほどかけ、いつもの四人プラス私が着いたのは、武蔵森林丘陵公園。東京ドーム六十五個分もある広い国営公園で、いろいろなアスレチックが楽しめる。滑り台や吊橋など高度感のあるスポットもあるから、ここならあおいちゃんが楽しみながら高所に慣れることができる、というのがひなたの思惑。

私の励ましだけじゃ足りないのは分かっている。今回はあおいちゃんを上手いことフォローしつつ高いところに慣れてもらう。

「じゃじゃーん！ 武蔵丘陵森林公園にようこそー！」

「楽しんでいってね！」

「二人とも朝から元気ねー」

午前十時、西口から入園したところでひなたが言ったので、私も便乗。かえでさんが微笑まじげな視線を送ってきて、ここなちゃんは「楽しんでいきますー！」と笑顔。あおいちゃんは物珍しそうに公園を見回している。

道なりに進んでいくと広場が見えてきた。そこに帆船の遊具が設置されているのを見るや、ひなたが乗り込み「ヨーホーヨーホー！」とはしゃぎだす。パンフレットを見ると、わんぱく広場のげんきもりもり号と言うらしい。

「わんぱくでげんきもりもりで、ひなたそのものじゃん」

「ふふっ、たしかに」

「ひなたさん、お似合いです」

海賊ごっこを始めるひなたに、しぶしぶ付き合うあおいちゃん。そ

れを見ながらかえでさんとここなちゃんはクスクス笑った。

しばらく船で遊んでから次の遊具へ。

かえでさんとひなたはブランコに飛びついた。大はしゃぎでブランコを漕ぐ二人が靴飛ばしをするというので、さっと射線から逃れる。いつまでも同じような不運で痛い目見る私じゃないのだ。

二人がどいたのを見て、私もブランコに座る。ブランコなんて何年ぶりだろう。確か最後にやったのは――

あれ？ やり方が分かんない。ブランコってどう動かすの？

ま、まあ私には向いてないだろう。たぶん。すごすご下りるよ。次にみんなが向かったのはピラミッドロープ。ピラミッド状に編まれたロープの上を飛び跳ねたり、頂点の部分までよじ登ったりして。楽しそう。

お、ひなたとあおいちゃんが降りてきて新しい遊具にとりついた。ぶらさがりシーソー。二人同時にぶら下がって、重たい方が負けと。これなら遊び方も分かりやすいし、私の体重なら無敵だ。当然、勝負を挑みに行く。

「その勝負、私も混ぜてもらおうか」

ふふん、やはり最強。

ひなた、あおいちゃん、かえでさんはもちろんのこと、ここなちゃんにまで勝った。女の子の体重は軽ければ軽いほど偉いらしいから、私はみんなよりも偉いことになる。

「不健康に軽くても偉くない！ きちんと三食食べてる!？」

「た、たべてますよ」

「私の目を見て!」

偉い、はずなのに。なぜかかえでさんが食生活のお説教を始めた。たしかに山道具やアウトドア雑誌を衝動買いしてその日の夕飯が抜きになることもたまにあるけど、基本的には三食食べてる。だから私は悪くない。

かえでさんの剣幕に圧され、脱兎のごとく駆け出す。遊具の間をすり抜けて鬼ごっこしていると、

「捕まえました!」

前から急に出てきたここなちゃんに捕まえられた。後ろからはかえでさんの手が両肩を掴む。鬼がこつそり一人増えるのはずるいと思う。

後ろを振り返るのが怖くてここなちゃんと見つめ合う。すると、ここなちゃんは困ったように眉を八の字に。

「マヤさん、大丈夫ですか？」

「体重のこと？ 発育の早さは人それぞれだよ」

「そうじゃなくて、いえそれもありますけど。今日はいつもより元気がないので」

「たしかに、あんまり遊具に触ってないわよね」
バレてた。

体調不良とかではないけど、先程衝撃の事実が判明したせいで、遊具に触りたくない。事実の内容は言いたくない。なので、黙秘権を行使します。

「マヤさん……」

「マヤちゃん？」

ダメだった。純真な瞳でまっすぐ心配してくれるここなちゃんと、後ろから「吐きなさい」とプレッシャーをかけてくるかえでさんの挟み撃ち。晒すしかない、我が恥。

「じ、実はですね、公園で遊ぶのって初めてでして」
「え？」

「滑り台とかブランコとか、遊び方がよく……知らないの、バカにされるかなって……」

晒してしまった、我が恥。

さっきのブランコで気づいた。公園で遊ぶのは今日が人生で初めてだ。幼稚園は通ってないし、お父さんは仕事か山。お母さんはまったく構ってくれなかったから。

遊び方は見てたら分かる。でもブランコは難しくて動かなかったし、すべり台はお尻をやけどしそうで怖い。私よりずっと年下の子どもたちが遊んでるものが出来ないなんて、言いたくなかった。

ほら、私の無知っぷりにここなちゃんもかえでさんも絶句――

「そうだったんですね。じゃあいつしよに遊びましょう！」

「誰でも最初は初めてなのよ。分からなかったら聞いていいの」
してなかった。

それどころか、にっこり笑って私の手を引き、背中を押してくれる。

「まずはブランコにしましょう！」

「え、大丈夫？ 落っこちたりしない？」

「大丈夫、だと、思います、たぶん！」

「マヤちゃんならもしかして……」

「めっちゃ不安なんですけど！ ちよ、最初はもっと簡単なのから――」

かつてないほど歯切れの悪いここなちゃんとかえでさんのつぶやきでまた怖くなったけども。

私の公園デビューは、高一の夏にようやく果たされた。

広場で遊び回っているとあつという間にお昼の時間。屋根付きの木のテーブルについた私たちは、持ち寄った手作り弁当を取り出すためかばんに手をかける。フリーズドライ禁止で各々お弁当を持ってくることになってたんだ。

まず披露したのはあおいちゃん。ごはんとおかずで構成されたオーソドックススタイル。ケチャップで描かれた山っぽいキャラがかわいい。

次にここなちゃん。フルーツサンドにうさぎさんりんご、手作りクッキー。妖精さんのお弁当がテーマらしい。かわいい。

かえでさん、おにぎり五個。シンプルかつ腹持ちを重視した構成。かえでさんらしい。

次、ひなた。

「次、マヤちゃん！」

あ、私だった。

この時を待っていた。もう体力と登山以外取り柄のないポンコツ

とは言わせない（誰も言っていないけど）。生まれ変わった私の女子力を見るがいい。

「おおー！」

驚いてる、驚いてる。日の丸ごはん、きんぴらごぼう、ハンバーグ、唐揚げ、ほうれん草にたくあん。見た目は普通だけど、栄養まできちんと考えて作った自信作だ。

「で、誰に作ってもらったの？」

「私だよ！ 料理は師匠に教わったんだ！」

「あのマヤちゃんですえこのレベル……私って一体……」

「かえでさんのおにぎりもとっても素敵ですよ！」

かえでさんが地味に私まで傷つく落ち込み方をしていたり、替え玉を疑われたり、百パーセント思った通りの反応ではなかったけど高評価には違いない。

料理はかえでさんのお母さんとひなたのお父さんに教わった。お泊り代として家事手伝いを申し出たらついでに教えてくれたんだ。包丁が怖くて料理は敬遠してたけど、やってみたら結構面白い。ほのかも嬉しそうに食べてくれたしね。

「でもこの傾き方、マヤさんらしいですね！」

「ここなちゃんそれは言わないで！」

「うんうん、この残念感こそマヤだよね」

「ひなたはお黙り！」

かばんへの入れ方が悪かったのか、傾いたご飯がおかずを圧縮しているのを除けば完璧な出来だ。女子力アップールができたので満足。

で、大トリのひなたの番になる。はたして私の女子力満載スペシャル弁当に勝るものは出てくるのか。答えは否。ひなたの女子力は高く見積もってもかえでさんより少し高い程度。私の完全勝利は決まったも同然――

「バカな、重箱だど!？」

ひなたがドヤ顔で取り出したのは三段の重箱。中には色とりどりのおかずがぎっしり詰め込まれている。そのお弁当が発する女子力値はもはや計測不能だ。まさかひなたがこれほどの使い手だとは。

私が戦慄していると「絶対ひなたが作ったんじゃないでしょ！」とあおいちゃん。

「お父さんが朝三時に起きて作ってくれたよ！　すつごく張り切った！」

「ずるうー！」

「朝三時って夜中ですよね……」

そういえば師匠、ひなたにデレデレなんだった。ずるい。我が女子力のインパクト薄れちゃったよ。

釈然としないうちにみんながハシを伸ばす。

私はしばらくむくれていたけど、隣のここなちゃんがひたすらおかずを食べさせようとしてくるので、我に返って食事を楽しんだ。スキあらば私に何かを食べさせようとするのはここなちゃんの困った癖だ。

女子力弁当のおかずは、みんなに「おいしい」と言ってもらえた。

あおいちゃんが高所に慣れるお手伝いをするという目的を途中からすっかり忘れていたけど、そこはひなたがうまくやってくれたみたい。吊り橋のたもとで足の止まったあおいちゃんの手を引いて、いっしょに前へ進んでいた。手を取り合って歩む二人の間に割り込む隙間はなかった。あおいちゃんの話は、やっぱりひなたに任せるのが一番だ。

というわけで私は開き直って公園のアスレチックを楽しむことにした。

今は吊り橋の先にあったぽんぽこマウンテンでぽんぽん跳ねている。トランポリンみたいに弾むけど、この山何で出来てるんだろう、面白い。

けど油断はできない。下手に高いところで跳びはねてバランスを崩せば滑落するからね。低いところで地味にぽんぽんしておこう。

「マヤさーん！　こっちの方がよく跳ねますよー！」

「事故るからやめとくー!」

「えー!」

山頂の方で跳ね回ることなちゃんに断りを入れておく。

私だっていつまでも同じレベルのドジは繰り返さない。せつかくアピールした女子力を変な失敗で帳消しにしたくないんだ。私はこのまま料理のできるお姉さんとして飯能に帰るんだ。

「ぐはあっー」

帰るんだ、って言ったのに。

横から強い衝撃。ぐるぐる回る視界の中、山頂の方から滑落してきたあおひなコンビに轢かれたことが分かった。

ふもとまで三人で転げ落ちたかと思うと、二人はなぜか私を尻にしていたまま良い雰囲気ですりだす。

「いてて、調子に乗りすぎた」

「ごめんひなた……」

「それよりあおい、高いところ平気だったじゃん」

そうだね。吊り橋も、ぽんぽこ山の山頂も平気だった。楽しんでたからか、夢中になってたからかは分からないけど、あおいちゃんは高いところで楽しく遊んでいた。それはきつと谷川岳での自信につながるはず。あおいちゃんを慣れさせるひなたの思惑は、うまくいったと思う。

「ひなた、ありがとう」

「ん、何が?」

「……ううん、いいの。そうだ、さつきマヤちゃんの声しなかった?」

「そういえば、富士山で足つったときみたいな声が……」

「二人ともー! 下、下!」

「うわっ、マヤ!」

「大丈夫!」

「あおひなに、はね飛ばされて、下敷きに……お尻の下で、我果てるなり……」

「辞世の句詠んでないで、しっかりしてよ!」

「マヤちゃん、傷は浅いわよ!」

谷川岳でほのかと会う約束は果たせそうにない。あおいちゃんとひなたが二人の約束を果たすのも見届けたかったけど、私はもうここまで。なーに、友だちもできて女子力も習得して、私の人生は最高だったさ。

みんな、私のことは忘れて、強く生きてね。

第18話

「はっぴばーすでー、とうーみー……」

自室アパートの薄い壁に、私の声が空しく吸い込まれていった。食パンもやしケーキに刺したろうソクの火を、ふっと吹き消す。

毎年恒例、一人だけのバースデーだ。

いつものことなので、寂しくなんかない。あおいちゃんやひなたが窓から入ってきてきておめでとー！ とサプライズしてくれるとも思っていない。だって誕生日伝えてないし。

いっそのこと誕生日忘れたい。履歴書に生年月日の欄がなかったら忘れられるのに。

いいもんね。祝われない分、誰かを祝うのに本気出すし。今度のこなちゃんの誕生日にうってつけのプレゼントを、バイト先のツテで手に入れたんだ。こなちゃんの喜ぶ顔が私へのプレゼント――

不意に、着信。

「はいもしもしー！」

『マヤちゃん、今時間いい？』

「……よろしくてよ」

『お呼びじゃないって感じねー』

かえでさんだった。私の誕生日知らない人。

どうせ知ってる人なんていないし、知らせるつもりないけど。私は構ってちゃんじゃないのだ。

かえでさんの言葉に淡々と返して、通話を切った。

私の人生のほとんどは敗北で成り立っている。

学校では陰キヤの代表格として敬遠され、たまに体力テストやマラソン大会で目立っても「ああ、あの冴えない子か」と冷めた目で見られ。高校生になってからはみんな精神的に大きくなったのか、そこまです露骨な陰陽差別はなくなったけど、今度は先生が地味なのをいじつ

てくる。そのたびに集まる生暖かい視線に縮こまる私の姿は、まさに敗北ウーマンだ。

登山でもそう。一週間かけて考えた念入りな山行計画が、突然の悪天候で台無しになったことは数しれない。悪天候を押しして強行したらケガと体調不良のダブルパンチで敗走なんてザラだった。

プライベートでは敗北どころか昇天しかけたことさえある。ぽんぽこマウンテン滑落事故であいちゃんどひなたに潰され、辞世の句を詠んだのは記憶に新しい。テンパった二人が「AED! いやさ人工呼吸!」って騒ぎ出したから慌てて飛び起きた。

そんな風に、敗けてばかりの私だけ――

「えっへん」

「ぐぬぬ……マヤちゃんがこんな……!」

今回ばかりは私の勝ちだ。

かえでさんちのリビング。ダイニングテーブルの上には私が作ったお昼ご飯のオムライスがあつて、対面にかえでさんが座っている。ぐぬぬと悔しげにしているのはかえでさんと、偉そうにしているのが私だ。

「どーですか。我が女子力の味は」

「悔しいけど美味しいわ。あーあ、見栄張ってると思ったのになー」

「そんなにバレバレの? つきませんよ」

「つくわよ。だってマヤちゃんよ?」

「私をなんだと思ってるんですか!」

かえでさんが新たな一口を頬張ったので、答えは聞けなかった。

暇だったら遊びに来ない、と誘われたのが昨晩。かえでさんのお母さんが所用で不在だから、お昼ご飯作ってくれない、と意地悪な笑顔で言われたのが二十分前のこと。

どうやら私が料理できるようになったのが信じられなかったみたいで、見栄を張ってるなら暴いてやろうと考えたらしい。その思惑が私の世界一女子力のあるオムライスで打ち砕かれ、今に至る。

かえでさんには登山でお世話になりっぱなし、一生勝てない人だと思ってた。そんな人によく勝てたんだ。

「おいしいですか？　ねえそれ、おいしいですか？」

「うん、すつごくおいしいわよ。よくできたわね」

「うえへへ、そうでしょう」

嬉しすぎる。椅子の上でふんぞり返っていると、やりすぎて後ろにひっくり返りそうになった。

手をばたつかせてどうにか態勢を立て直す。満面の笑みだったかえでさんの表情は、呆れた苦笑いになっていた。

かえでさん、あなたは何も見なかった。という意図をこめて咳払いを一つ。

「ま、まあ師匠たちの教えが分かりやすかったんで」

「うちのお母さんとひなたちゃんのお父さんよね。何か話してたのは知ってたけど——はあ、女子力ゼロ同盟はどうしちゃったのよ」

「何その嫌な同盟」

三十路寸前の未婚OLさんが集まる女子会みたいな悲しさを感じる。バイトの先輩たちがよく参加者募ってるのを見たことあるけど、あの物悲しさは一種のホラーだと思う。いつか私やかえでさんもあんな風になるのかなあ。

「同盟は破棄です。かえでさんも料理、しまししょう？」

「ええー、私が？」

「あれできますよ、まあこのお弁当美味しそう誰が作ったの、私やドヤあ……って流れ」

「そうねえ、気が向いたらね」

ニカッと笑うかえでさん。私知ってる、かえでさんがこの笑顔するときには適当に聞き流してるときだ。たぶん一生気が向かない。

昔から山でお世話になってるかえでさんにお返ししたかったけど、本人が気乗りしないならもういいや。料理は楽しくてもやつぱり面倒だからね。

話してばかりで私の分のオムライスを手つかずだ。冷めないうちに一口。我ながらおいしい。この前の自然公園以来のまともなご飯が食費ゼロで食べられるので、その意味でもおいしい。

思わず夢中がつついていて、かえでさんが眉をひそめる。

「ねえマヤちゃん。変なこと聞くけど」

「もぐもぐ?」

「今朝は何食べた?」

私の優れた頭脳がかえでさんの意図を読み取る。

これは脳年齢テストだ。脳年齢が高いと直前の食事メニューを思い出せないとかなんとか。私がいみんなからほんのちよつとポンコツという評価を得ているから、テストしたくなっただらう。

でも私にそのテストは効かない。

「もやしと水です! そのくらい覚えてますよ」

「……昨日の晩は?」

「同じくもやしと水です! ていうか夏休み入ってからずっとメニュー同じなんで、いくらテストしても効きません!」

「……」

なんなら数ヶ月前の献立まで答えられる。もやし、水、値引きパンの三パターン。つまり私の脳年齢はとも若く、優秀ってことだ。

ドヤ顔していると、かえでさんのメガネが不意にキラリと光る。

「あのね……どこにドヤ顔できるところがあるの!?!」

「ひえっ!?!」

「不摂生していると大きくなれないし、体壊すわよ! 料理できるんだから自炊しなさい!」

「ね、燃費の良さは私の取り柄! 知ってるでしょ!」

「限度があります!」

かえでさんはお説教モードになっていた。見るのは初めて会ったとき以来だ。

「自炊ってめんどくさいんですよ! 誰かに作るならともかく、自分だけなら節制します。で、浮いた分で山に行くのです! これぞ私の登山ライフ!」

「そんな不健康な登山ライフはダメ!」

「いいんです! 私の登山でしょ!」

「ダメったらダメ! これからはきちんと毎日食べなさい。さもないと——あのこと、バラすわよ!」

「なっ!？」

かえでさんと登山に行った回数が多い。当然、私の失敗談や恥ずかしい経験を一番知っているのはかえでさんになる。かえでさんの知ってそうなあのこと、すなわち私の恥ずかしいこととは——ありすぎて特定できない。

岩場で浮石を踏んだときの「ひよえっ」という奇声を、すれ違った登山者さんに笑われたこと？

登山道の中腹になぜか立ってる「頂上」の標識を鵜呑みにして、そこが山頂だと思い込んだこと？

それとも——

「や、やめてください! クマさんと遭遇したとき実はちよっぴりお漏らししたことだけは——!」

「えっ、そんなことあったの?」

「はあ!？」

「ああ、そういえば合流したとき、なぜか腰が抜けて立てないことがあったわね。ふうーん、そういうことだったんだ」

かえでさんはニヤア、と笑った。

さーつと血の気が引くのを感じた。

しーあいえーも真っ青な誘導尋問だった。この恥を晒されては、私の社会的イメージが死ぬ。ほんの少しでも残っているはずの経験豊富なお姉さん像が死んでしまう。それだけは避けなければ。

「きちんと三食、食べますか?」

「御意!」

かえで様の言う通り、もやしと水だけなんて不健康だよ。育ち盛りなんだからちゃんとしたものを毎日食べなきゃね。たとえ食費が増えたとしても、そのせいで登山貯金が減ったとしても。私の体面——じゃなくて、健康を守るために。

私は「ははー」と平伏し、かえで様の教えを享受するのだった。

勝利の女神とはかくも気まぐれなものか。

「うーん、私一年のときこんな習ったかしら」

「へ?」

かえでさんの部屋にて。

夏休みの宿題の分からないところを習うため、あおいちゃんがやってきた。あおいちゃんのかえでさんに宿題を見せているが、かえでさんは分からないらしい。

ちらつと覗いてみれば、私には余裕で分かるそこだった。つまり、女子力に続いて学力でマウントを取りに行くチャンス。

「おかしいわねーこれも分かんない。教える範囲が変わったのかしらねー」

「かえでさん、つかぬことをお聞きしますが。ご自身の宿題は終わっているのでしょうか?」

「うふふっ」

あおいちゃんの質問に、笑顔で「全然終わってないんだー」と答えるかえでさん。

そういえばかえでさんっていつも赤点ギリギリだったっけ。メガネかけてるからすっかり忘れてた。

あおいちゃんもかえでさんのメガネに騙されたみたいで、目を丸くして冷や汗を流している。別に宿題くらいでそこまで焦らなくても。

「あおいちゃん、まだ八月の頭じゃない。少しずつやってけば余裕で終わるよ」

「そうだけど、谷川岳までに全部終わらせるってお母さんに言っちゃったの!」

「なんで!」

「口が滑ったのよ!」

谷川岳までつてことは来週までか。受験生よろしく気合を入れればできるだろうけど、少しずつやった方が内容が身に着くと思うな。

といっても女に二言はない。あおいちゃんが来週までに宿題を終えられるよう、お手伝いしよう。

「ついに、我が学力が火を吹く時がきた」

「マヤちゃん、頭でも打った？」

「面白い！」

「あはは……マヤちゃん、実は勉強できるんですよ。期末テストだと学年一位でした」

「うそおー!？」

驚きすぎだろかえでさん。

そしてあおいちゃんは水臭いぜ。最初から私を頼ってくれればよかったのに。

「いやー、知ってはいたけどマヤちゃんが勉強できるイメージなくて。論外だったのよ」

「ろ、論外!？」

ばんつ、とテーブルに手をつきかえでさんが吠える。

「そうよ！ 勉強ができるマヤちゃんなんておかしいわ！ 毎回赤点とって泣きながら補習受けるマヤちゃんはどこにいったの!？」

「人の過去捏造すんのやめて！」

くつ、二人とも勝手なイメージくらませちゃって。これは学力全開で目にも見せてやらねば。

さつきあおいちゃんが見せていた数学のドリルを開き、問題を解いていく。因数分解、図形問題、証明問題？ 全部教科書で見たから楽勝です。ふふん、これは複数の解法を組み合わせて解けるひっかけなので、こうしてこう。間違えさせようって意志が透けて見える。

……こんな風に、中学の頃は必死で問題相手にマウンツ取ってたなあ。勉強以外、陽キャに対抗できるものがなかったんだ。

でも今は違う。ドヤ顔を見せて、マウンツを取れる友だちがいる。とりあえず見開きの二ページ分終わらせると、あおいちゃんが巻末解答を見て答え合わせしてくれた。全部合ってた。

「すごいー！」

「私は夢を見てるんだわ」

かえでさんは遠い目をしていた。

あおいちゃんは興奮した様子で私の隣に座る。なんかすごく近い。「じゃあ早速、ここが分からないから教えてほしいな」

「因数分解はねー、まずXYZがあるでしょ？　これをこうして、こうして、こうしたら答えになるの」

「……もっかい言って？」

「だからこうして、こうして、こうするの。ね、簡単でしょ？」

あおいちゃんは笑顔のまま固まった。

「じゃ、じゃあこっちの図形は？」

「教科書にのつた公式でこうして、こうやったら答えになる」

「こっちの証明は……」

「教科書のテンプレ暗記して適当に改変しようね」

「……まじめにやってくれる？」

「ふえっ!？」

あおいちゃんは真顔になってた。怖い。

それから科目を変えて同じようなやりとりが繰り返された結果、私に教える才能はないことが分かった。だってどの問題も教科書を覚えて実践しろとしか言えないんだもの。問題を見て、答えを見て、解き方を読み解いて暗記するだけ。これぞ私の脳死丸暗記法。

でもあおいちゃんとかえでさんには不評みたいで、肩をぽんとされた後、「ありがとう、お昼寝してていいよ」と言われた。

「ぐすん……」

「それでふてくされてるのね……」

「違います。ほんとに眠たくなったのです」

かえでさんのベッドでごろごろする私の頭を撫でてくれたのは、新しく呼ばれてやってきたゆうかさんだ。このままでは宿題が1ページも進まないというわけで、かえでさんが呼んだ。

ゆうかさんは優しい。部屋に来てから真っ先に私の愚痴を聞いてくれて、慰めてくれた。

「かえで！　マヤちゃんに宿題丸投げして何を笑ってるの！」

「いやー、勉強も出来て教えるのも上手だと、私も先輩としての立場がね？　正直ほっとしてるというか……」

「あのねえ……」

ゆうかさんは大きくため息をつく。

「前から気になってたけど、かえでつてさ」

「何？」

「マヤちゃんのことポンコツ、天然とか言う割に、あなただつて山登る以外はポンコツじゃない」

「……!?」

空気が凍った。かえでさんが手にしたシャーペンを取り落とし、乾いた音が鳴る。

「大体、わからない人に教えるのつて大変なのよ？ マヤちゃんには出来なかつたけど、きちんと頑張つた。えらいわ」

「うえへへ」

ああ、頭をぼんぼんしてくれるのがとても気持ちいい。そうだ、私にはえらいのだ。私がポンコツならかえでさんだつてポンコツなのだ。もつと言つてやつてほしいのだ。

私の思いが通じたのか、ゆうかさんはこんこんとお説教（あおいちゃんにも飛び火してた）を続け、終わる頃にはかえでさんは机に突つ伏し瀕死の状態になっていた。

ゆうかさんは一度言葉を切り、締めにかかる。

「何が言いたいかというと、勉強はマヤちゃんでもできることなの。つまりあなたたちはマヤちゃんよりポンコツつてこと。少しは危機感が湧いたかしら？」

「さりげなく私のことディスつてませんか!？」

「すつごく湧いた!」

「湧きました!」

「そつちはそつちでやる気出すなや!」

かえでさんとあおいちゃんはくわつと目を見開き、教科書を取り出してきて必死に問題集と向き合い始めた。鬼気迫る勢いの二人を、ゆうかさんが華麗な指導で導いていく。

この日を境にゆうかさん主導の勉強会が毎日開かれるようになり、私の名前を出すと、特にかえでさんが途轍もないやる気を発揮するようになったとか。

かえでさんのためになつたならいいけど……これ、学力でマウント

を取ったと言えるのかな？

第19話

お盆休みっていつだろう。いつお墓参りに行くんだろう。

調べるのも面倒で、すぐにお父さんのお墓に行った。

お葬式のと看以来。数年ぶりの時間がお墓を荒らしてると思ってた。

でもそこには汚れの一つもないお墓があつて。花とお線香がお供えされてて。

ひなたのお父さんは最初からきれいだったと言つてるけど、氣を遣つてる風でもなくて。

じゃあ誰がお手入れしたんだろううって考えたら一人しか浮かばなくて――

私はまた、逃げた。

あおいちゃんとひなたにはとても感謝している。山に登る楽しさを思い出させてくれたし、一人じゃないと分らせてくれた。かえでさんには山でいろいろお世話になつてるし、ここなちゃんは辛いときいつも優しくしてくれる。みんなよりもいい友だちはこの先見つからないかも、と思うことさえある。

けれど――私はもう、みんなと一緒にいられない。

「みんなのことは忘れないよ……私の分まで楽しんできて……」

「もう、拗ねないの」

谷川岳へ向かう電車内、別の車両に向かうとする私の肩をかえでさんが掴んだ。

振り返ると、二人ずつが対面して座る四人がけの座席に座つた、あおいちゃん、ひなた、ここなちゃん、かえでさんの四人が見える。

そう、四人だ。四人しか座れない。

シートを動かして対面を辞めても、二人、二人、一人になる。奇数グループから一人余り物をはじき出す、魔の座席。

「分かっていますよ。どうせ私なんて一生ぼつちなんです。日陰者なのです……」

「ま、マヤさん、そんな悲しいことを言わないでください。ほら、私のここが空いてますよ!」

「ここなちゃん……!」

魔の座席にあつてもここなちゃんは天使だった。ここ、と言いなながら膝の上を手でたたく。私は感涙しつつ、スパッツで覆われた華奢な太ももの上に腰を下ろす。

「大丈夫? 重くない?」

「へ、平気です。マヤさんはむしろ、もっと大きくならなきゃ、ダメですよ」

絶対無理してる。天使の微笑みから苦しみがにじみ出てるし、空調効いてるのに辛そうな汗かいてるし。体重は私のが軽いとはいえ身長同じくらいだからね。一刻も速くこの健気な気遣いを無下にしない感じの口実を考えないと。

「仕方ないなあ。こつちおいで」

「あつ」

頭をひねっていたらひよい、とひなたに持ち上げられ、膝の上に運ばれた。

「わ、私もちよつといい?」

続いてあおいちゃんの方にも。抱き枕みたいにぎゅつとされて、あおいちゃんのぬくもりが伝わってくる。その腕は華奢だけど私よりも力強くて、動きたくなくなる包容力があつた。

このまま目的地まで膝の上で過ごすのも悪くない。

「つて、私はマスコットか! 恥ずいわ!」

その場の流れで正気を失うとこだった。危ない。

その後、一人分の座席に無理やり体を押し込んで二人座ったり、一周回って私の上にここなちゃんが座ったりなどのすったもんだがあつたものの、行儀が悪いから諦めて別の座席に行った。

実は昨日寝付きが悪くて一人でゆつくり寝たいのを伝えると、申し訳なさそうにしてたみんなも納得してくれた。

谷川岳。あおいちゃんとひなたの約束の山に登る山行は、こうしてどたばたと始まったんだ。

初っ端からハブられてメンタルが死にかけるトラブルがあったけど、それ以降特に問題なく電車を乗り継ぎ、谷川岳にほど近い土合駅に着いた。

ホームから出口までは四百段以上もの階段がある。階段の下から上を見下ろすと、長いトンネルの彼方に出口の光が見えた。

「ひなた、これも覚えてた？」

「覚えてるけど、記憶よりもすごいような……」

あおいちゃんとひなたがやり取りしてる。今日は二人の約束を果たしに行くのがメインだから、私の登山経験マウントは控えめ。というのは建前で、本音はまだ寝足りないだけだった。

えつちら、おつちらと足並み揃える二人の後ろを、眠気をこらえながらついていく。先頭はかえでさんとここなちゃんだ。

無心で登っているともう出口に着いていた。

土合駅の駅舎にある箱に登山カードを提出する。いつもはネットで登山届を出してるけど、ここの登山カードを書くために出さずにおいたんだ。

書く項目の多さにあおいちゃんが驚いてる。

「結構いろいろ書くんですね」

「面倒だけどちゃんとしなきゃ。死にたくないし、ね、マヤちゃん」

「その通り。いざってときの生命線だからバッチリ書こう！」

「マヤが言うと言得力ありすぎる……」

「……ほめられてる、んだよね？」

「ほめてるよー」

一番登山届のお世話になってそうだもんね、というひなたの心の声が聞こえた気がしたけど、気のせいだったみたい。登山届を書き込んで提出、下山届を失くさないようザックに仕舞い込んでから、みんな

でロープウエー乗り場まであるき出す。この前登ったときは別ルートだったから新鮮だ。

駅舎を出ると一面の緑が広がっていた。青い空をバックに、緑一色の山がそびえる。みずみずしい新緑の香りとセミの大合唱を全身で味わいながら、道路を歩いてロープウエー乗り場へ。途中給水を挟んで、二十分ほどで乗り場が見えてきた。

「おーい、ほのかー!」

「あ……」

乗り場の建物の前に、ほのかの姿を発見。いつもどおり涼し気な表情とショートカット、ボーイツシユな動きやすい服装と、手には愛用のカメラ。声をかけながら近づいて、計画通りに合流した。

さて、ここからが正念場だ。

勢い任せでほのかといっしょに登ることにした今回だけど、ほのかは割と人見知り。言い出しっぺの私が華麗な仲介で縁をつなぐのが筋だろう。

できるお姉ちゃんの気分で口を開こうとして――

「どうも、黒崎ほのか、です」

「あおいだよ」

「私ひなた!」

「ここなです」

「かえでよ、よろしくね」

「よ、よろしく、お願いします」

「……」

閉口した。

普通によくしてるじゃん。私だけしゃべってないじゃん。私、要らなかつた。

いや、緊張してるっぽいほのかが痛いくらい私の手を握りしめてるから、要らないわけじゃないか。

「写真、好きなの?」

「は、はい、かえでさん。きれいな風景、撮るのが好きで……」

「素敵です! 山にはきれいな景色がいっぱいありますもんね!」

「う、うん。景色だけじゃなくて、花とか、岩とか」

カメラを目にしたかえでさんとここなちゃんが早速距離を詰める。すごいや、初対面で下の名前呼び。そうか！ 自己紹介で下の名前しか明かさなないことで、一気に距離を詰める高等テクニクだ。これがコミュニケーション強者の力なんだ。

いつの間にかほのかの手は私を離れて、お話に夢中になっていた。

「あつ、むーまくん！」

「この前、飯能に行ったときの。かわいかった」

「そうなんだ。今度飯能で納涼祭があるのよ。よかつたらまた来ない？」

「か、考えときます」

かえでさんとここなちゃんとのお話に、若干の間が空く。

その瞬間、火花が散った。

「へ？」

ように見えた。

ふと振り返ったほのかの視線の先にいたのは、あおいちゃんとひなた。目が合うやいなや、ほのかが私の手を再び握り、また火花が散る。

あおいちゃんはニコニコ余裕の笑み、ほのかは無表情で、ひなただけ不満げに口をとがらせてる。

「……いつまでも話していると邪魔だから。行こう」

ほのかはふい、と顔をそらして乗り場の中へ行ってしまう。当然、握られた私の手も引かれていく。お馴染み山ガールズもついてくるけど、バチバチと火花の散る幻聴は、その後も何度も聞こえた。

きつとまだ寝たりないんだ。睡眠不足で変な音が聞こえてるんだ。きつとそうなのだ。

土合口からロープウエーで天神平へ、天神平からリフトで天神峠へ。

ロープウエーに乗り込むとき、あおいちゃんは「私は日本一、日本

「一、にほんいち……」と必死で自分に言い聞かせてた。気合が入りすぎて般若みたいな形相で、同乗した人は引いてたけど、第一関門は突破。

でも第二関門のリフトはロープウエーより高度感がすごくて、ひなたに手を引かれどうにか乗り込んだみたいだった。なんにせよ、あおいちゃん一番の危険箇所を乗り越えたので、後は体力に気をつけつつ登山するだけ。

「あの出っ張ってるところがトマの耳、オキの耳。尾根伝いにあそこまで歩いてく」

「あれが山頂かあ。山の形が猫に見えるからそう呼ぶんだよね」

「猫さん！」

「うん。山小屋は肩の小屋って言うて——」

天神峠の開けた場所で、ほのかが淡々と語ってる。谷川岳の経験回数はほのかの方が多。私が出しゃばる機会はなさそう。普通にみんな仲良くなってるそつちの意味でも機会なさそう。

別にいいし。仲良くなるのはむしろいいことだし。

「……」

口をつぐんでトマの耳を見つめるひなたが構ってくれないのも、静かでもいいことだ。あおいちゃんとの約束のこと、考えてるんだろう。

私が気を回すことは特になくなったらしい。

じゃあ——いつものノリに戻ろう。

まずは見晴らし抜群の峠で食べるお昼ご飯。私の女子力をみんなに褒めてもらうチャンス——

「天井かつ！」

「マヤさん？」

「天井!? って、普通のお弁当じゃん」

「変なマヤちゃん」

「マヤが変なのはいつものことだから、気にしなくていい」

「それもそうね！」

またお弁当が傾いてひどいことになってた。まさかこの私が二度も同じボケをするとは……それとほのか、誰がいつも変だった? か

えでさんも同意しないで。

みんなの声とシャッター音を聞きながらお弁当をたいらげ、何かの神様を拜んでから出発。まず目指すは山頂付近の山小屋、肩の小屋だ。ここで一泊してから明朝発ち、朝日を見る。富士山と同じ要領だね。

道中、ヤブの中に『谷川岳は美しい反面、多数の遭難者が出る魔の山です』という看板が立っているのを見つけ、気を引き締めた。遭難者の多くは難易度の高い別ルートから出ているとはいえ、ここは山だ。初心に帰ってしっかりと登ろう。

黙々と最後尾を歩く。

少し離れた前方にあおいちゃん、ほのか、かえでさん、ここなちゃん。私のすぐ前にひなたが歩いている。

「岩つて、撮って楽しいの？」

「ちよ、かえでさん！」

「……写真で見ると、違った趣がある、ので。ほら」

「わあ、ほんとです！」

「ちよつと視点を変えただけで、見え方も変わるんです」

「なるほどー。お見それしました！」

登りながらもシャッターを切るほのかに、かえでさんが直球を投げる。あおいちゃんがインターセプトを試みるも、ほのかがゆるつと返投。のんびりと言葉のキャッチボールが続く。

ぐぎぎ、ほのかの奴め。コミュ障派閥の同胞だと思ってたけど、そうじゃなかったみたいだね。あおいちゃんだって初対面であんなに話せるタイプじゃないと思ってたのに……！

「マヤ、どしたの？」

「はっ!? いやごめん、陰のエネルギーが暴走してた」

「ははあ、高一病だね？」

「そんなキリの悪い病気になるかっ！」

ひなたの声で我に返った。危なかった。

ひなたは「ふふ」と笑う。

「なんだ、大人しいから調子悪いのかと思った。いつもの変なマヤだ」

「ま、おしゃべりなタイプじゃないしね。でもそれを言うならひなただって、今日大人しいじゃん」

「……分かった？」

分からないわけない。

いつものひなたなら、わざと遅れて歩く私の手を引いて四人と合流し、六人でわいわい話しながら登ろうとするはず。そうしないのは元気がないのか、やる気がないのか、初対面のほのかに引いているのか。そのどれでもない、と思う。

「不安なんだ」

ぼつり、とこぼした。

「谷川岳の山頂で約束を果たしたら、どうなっちゃうのかなって。ずっと今のままがいいの……あおいと私のどっちかが、変わっちゃうのかな——」

「ないない」

「……即答だね」

即答するわ。即答しちゃうくらい分かりきったことを、なんで悩むのか。いやきつと、それがひなたなんだろう。

「ひなたは山登るの、楽しかった？」

「うん」

「山登るの好き？」

「うん」

「あおいちゃんは大好き？」

「うん……つて、ええ!?!」

「じゃ、そういうことだよ」

顔を真っ赤にするひなただけど、今更だ。普段の二人を見てたらお互い大好き同士なのはすぐに分かる。

「大好きなことって、絶対嫌いにはなれないの。何があっても、たとえ嫌いになろうとしても。ひなたとあおいちゃんが教えてくれたことだよ?」

「マヤ……」

横に並んで、肩に手を置く。

「そう、約束が果たされ、山から遠ざかったとしても。人生とは、山に似ている、だからずっと、山は続くのさ」

「最後、意味不明すぎて台無しだよ！」

「うるさいやい！」

しんみりした空気に便乗して名言かまそうとしたら、滑った。滑落した。くそう。

頭を抱えて悔しがってたけど、「ありがと」と苦笑いするひなたの声が聞こえた。だから恥ずかしい思いした甲斐はたぶん、あったと思う。

鎖場を越え、天狗の留まり場の絶景を楽しみ、懺悔の岩が見えたころ。雨が降り出した。

私は聖母の如き微笑を浮かべ、ひなたに向かって両腕を広げる。

「ひなた、あなたは言いましたね。レインウェアがあるからむしろ雨降れ、と」

「えっ、私のせい!？」

「さあ、懺悔しなさい」

「ごめんなさい！　って、なんであんなに謝んなきゃなんないのよ！」

じゃれ合いながら各自レインウェアを着込んで、すぐそこまで迫っていた肩の小屋までペースを速め向かう。

小屋に入ると木の香にまじって夕飯のいい匂いがする。お客さんはまだ少ない。人の良さそうなおじさんが、「いらっしやい。雨の中たいへんでしたね」と迎えてくれた。

夕飯まで時間があるので、寝床となる二階に上がって各々くつろぎ始める。あおいちゃんは誰もいない部屋の片隅をぼうつと見つめてて怖かったけど、ひなたが声かけに行ったら大丈夫だろう。

みんなのことを横目に見つつ、私はザツクの奥にしまいこんだ重要なブツを確認する。よしよし、念のためビニールに入れといてよかつ

た。濡れてないし変形もしてない。

「ここなちゃんの誕生日が谷川岳とかぶってなければ、プレゼントの
ブツをここまで運ぶこともなかったのに。」

「ほのかやかえでさんがずっと近くにいるから、なんとなく渡すタイ
ミングもつかめない。」

「消灯の直前にこっそり渡すか。」

「準備できましたよー」

「おじさんの声が聞こえ、私たちは一階の食卓に集まる。」

「山の上なのに焼き魚がある不思議に、あおいちゃんが驚いてる。」

「山の上なのに魚が食べられるんだ」

「そこんとこどうなんですか、マヤ先生？」

「ひなたくん、山にも川や池はあるのだよ。勉強になったかな？」

「これ、サバなんだけど……」

「しやらっぷミセスほのか！」

「えっ、ほのかちゃん結婚してたの!？」

「まあ、お相手は？」

「ひなたのせいで私が知ったかしてるみたいになったじゃない。で
も焦って言い間違えたら矛先がほのかに向いた、らっきー。」

「ほのかは「いや、その、まだしてないです、はい」としどろもどろ
に言いながらこつちをちらちら見てきた。まだってことは、候補がい
るの? 初耳なんだけど?」

「恋バナの気配にみんなががつついていっているうちにも、食事が進む。ほ
のかへの追及はみんな諦めて、ゆったりと時間が過ぎていく。」

「ごちそうさまして、食器も片付けて。」

「他愛ない話を続ける中で、唐突にあおいちゃんが言った。」

「ところでひなた。今日は何月何日?」

「え? ……あつ、八月十一日だね」

「その通り。八月十一日といえぼ?」

「八月十一日といえぼ?」

「いえぼ? ほら、ほのかも」

「い、いえぼ?」

なんだか訳のわからない小芝居が始まった。とりあえずその場の空気に乗っておく。ついでにほのかも乗せといた。

といつても察しはつく。八月十一日といえば、せーの――

「ここなちゃん、お誕生日おめでとう！」
知ってた。

なんだ、みんなサプライズ用意してたんだ。ひなたは一瞬忘れてたみただけど、私に伝えなかったのは隠し事できないと思われたからかな。ちよつとその判断には後で文句言つところ。

ここなちゃんは一瞬うるつと瞳を揺らがせて、涙目になっている。誕生日祝われたら、うれしいよねえ――

「そしてマヤちゃん！ 遅れたけど、お誕生日おめでとう！」

「おめでとう！」
えっ。

「この日のためにケーキを焼いてきたんだよ。バイト先の店長にレシ
ピ聞いて――」

あおいちゃんが取り出したるは、美味しそうなパウンドケーキ。バイト先はひかりさんが働いてるすすきだろう。バイトなんて修羅の道に自分から足を踏み入れずとも、って呆れたっけ。

じゃない。

え、何これ。何この状況。

食べて食べて、と言われたここなちゃんがケーキをかじって、幸せそうに笑った。次に、私の方をみんなが向く。

まさか、まさかこれって。

体が勝手に動き、ケーキを口に運ぶ。

「……………」

「マヤちゃん？」

祝われてるんだ。誕生日、祝われてる。おめでとうって言われてる。

何年ぶりかと思つたらどんどん風景がにじんできて。下向いて目を閉じたら視界がクリアになって。泣かないと決めたから、みんなの顔を見たいから、ケーキを呑み込み顔をあげる。

「おいしい、よ」

山小屋で食べるご飯より美味しいものはない、と思っていたけれど。

このケーキだけは、どんな山ご飯よりもおいしかった。そう伝えるとまた見えなくなる。

でも、みんなきつと笑ってる。

ほのか視点

私、黒崎ほのかは友だちがいなかった。

誰かに歩調を合わせるのが苦手で、自分のペースで動いちゃう。そのくせ話すのも得意じゃないから、空気が読めない子って言われてクラスでも浮いてた。一人でいろんな景色を撮って回る趣味も、分かってくれる子はいなかった。

そんな私がかかってくれる子——マヤと出会ったのは谷川岳だった。

その日は曇り。曇り空を背景に天狗の留まり場を撮ろうとしたら、ファインダーの中にマヤがいた。

岩の上で膝を抱えてぼうつとしてたけど、私に気づいたらすぐにカメラ目線。きりつとした顔でピースするから仕方なく撮った。

そしたら天狗みたいに素早く下りてきた。

「きれいに撮れた？」

「う、うん。ちよつと待って」

カメラを操作して確認。

写真の中のマヤは目を閉じてた。ピースサインが空しく見えた。

「リテイクっ！」

とりあえずもう一枚撮ってあげたら、笑顔で手のひらを出してきて。

「撮影料」

「……いくら？」

「百万円」

「ごめん、無理」

「あつ、君は同胞だな！ 友だちになろう！」

「え、ええー……？」

意味不明だったけど、同じ年くらいの女の子と山で話すのは初めて。それにマヤの方がたくさん話してくれるから話下手の私にはうれしくて、山小屋までいっしょに歩いた。

「いやー、冗談を大真面目に返すあの話術！ まさしくほのかは陰の

者だ！」

「むっ、マヤが冗談下手なのが悪い」

「そんなことないよー」

「ある」

マヤは山に来るとはしゃいでおしゃべりになる性格みたいで、山小屋だと終始話しっぱなしだった。でも変に踏み込んでこないし、私が眠くなってきたら声を潜めてくれたり、変なところで気が利く子だった。

だから私の方から一步、踏み込んでみたくなった。

「ねえ。会ったとき、岩の上で何してたの？」

「んー？ お父さん山頂にいるかなーって考えてた」

「山頂に？ 待ち合わせ、してるの？」

「この山じゃしてないね。つーかお父さん死んでるし。でもワンチャンいるんじゃないやね、ってさ」

「??」

マヤも寝ぼけてたんだと思う。私も眠くて、この日は言葉の意味も分からないまま寝た。

意味が分かったのはつい最近だった。

消灯後の山小屋。カメラの液晶から漏れるかすかな光だけを頼りに、私とあおいちゃんの話し合う。

話題はずつとマヤのこと。初めて会う子でもマヤの友だちなら、共通の話題があるから仲良くなれる。そう開き直って今日を迎えたら、本当にそのとおりであった。飯能でもマヤらしく元気にやってて、そのことをとつかかりにたくさん話した。

二人つきりがいい。マヤ以外の友だちなんていらぬ。そうやって拗ねる私を心配してたんだ、とは分かった。分かってもついい心がざらついて、マヤと距離をとっちゃった。明日はたくさん話したい。

「そうなんだ。昔から変わらないんだね、あいつ」
「……うん」

今はマヤと会ったときのことを話し終えたところ。あおいちゃんは穏やかな笑みを浮かべてる。

「あのさ、ずつと言いたかった」

「なあに？」

「ありがとう」

「へ？」

マヤのご両親がいないことは知ってたし、そのことで何か悩んでも察してた。でもマヤは弱みを見せたがらなくて、寂しそうにしててもすぐにふざけて誤魔化しちゃう。一歩踏み込めないまま時間だけが過ぎ、あの日がやってきた。

マヤの故郷に遊びに行った車中のこと。何気ない口調で語られたマヤの近況報告で、悩みの正体を知った。

友だちの力になれなかった悔しさ。何もできなかった罪悪感。いろんな気持ち湧いたけど、一番はマヤを助けてくれた友だちへの感謝だった。

「困ってたマヤを助けてくれて、ありがとう。私じゃ何もできなかった」

「ううん、いいの」

「そうだよ。それに何も出来ないなんてことない」

あおいちゃんの隣から、ひなたちゃんが急に顔を出す。あおいちゃんいわく一番うるさいやつ。にぎやかな面白い子だけど、なぜか本能的に警戒しちゃう不思議な子。

「知ってる？ あいつがあんなにニコニコしてるの、ほのかちゃんの前だけなんだよ」

「え、そうなの？」

「うん。きつとほのかちゃんにだけ見せられる一面があるの。それはきつと、あいつの助けになってると思うな」

そうなんだ。

何もしてあげられないと思ってた。肝心なとき傍にいてあげられ

ないって不安だった。でもマヤが私にだけ特別に見せてくれることがあるなら。友だちとして、うれしいな。

「ま、一番付き合い長いのは私だけだね！」

あおいちゃんが急に付き合いの長さをアピール。なぜかイラっとした。

「付き合いの長さは関係ないじゃん。大切なのは距離感だよ。私みたいに近くで付き合うのがいいの」

ひなたちゃんは距離感アピール。やっぱりイラっとした。

「何よー！」

「何?！」

けれど仲良く頭を突き合わせてにらみ合う二人を見ているとおかしくて。その中心にマヤがいると思うとアタフタする姿が見えるみたいで、よけいおかしくて、つい笑いが漏れちゃった。

「ほら、ひなたが変なこと言うから。ほのかちゃんに笑われた!」

「はあ!? あおいが訳分かんないこと言うからでしょ!」

小声でケンカを始める二人は息が合ってた。そういえば、二人が小さいころ交わした約束を果たすために谷川岳に来たんだっけ。こんなに楽しくて優しい二人に思われてるなんて、マヤの幸せ者め。

当の本人はここなちゃんに抱き枕にされて寝ている。寝る前に、ザックと登山靴装備のむーまくんストラップをプレゼントにあげたら、感極まったここなちゃんが抱きつき、そのまま寝ちゃったんだ。大分強く抱かれているからか、「ううん、ドラゴンスリーパー……」ってうめいてる。

いいなあ、ここなちゃん。私もマヤが欲しい。

欲しいなあ。

「ねえ」

言い合いを続けるあおいちゃんとひなたちゃんに、割って入る。

「渡さない。マヤは、私のものだから」

同時にカメラの電源を落として真っ暗に。

暗闇の中、雨音しか聞こえないけれど、二人が絶句しているのが見えるようで。

私は変に高揚しちゃって、結局その日はよく眠れなかった。

第21話

私には登山しかなかった。

どこかの山頂に隠れているお父さんに会いに行くことだけが私の生きる理由だった。だから脳みそのほとんどが登山で埋まっちゃって、やることなすことそっかしく、要領が悪くなってたんだと思う。

実際、山に登る楽しさを思い出させてもらってからはできることが増えた。友だちのおしやべりとか、料理とか。本当の私はドジなポンコツじゃなくて、超有能な完璧ウーマンなんだ。

つまり何が言いたいかというと、

「早く謝りなさいよひなた！」

「はあ!? 謝るのはあおいの方でしょ！」

「あわ、あわあわ」

ものすごい剣幕でぶつかり合うあおいちゃんとひなたを仲裁することだって、できるはずのこと。完璧ウーマンだもん。

谷川岳山頂で二人が約束を果たしてから数週間後。夏も終わりに近づいて今日は納涼祭だ。いつの間にかみんなと約束してたほのかも、また遊びに来ることになってる。

そんな日に私は特段の用事もなくあおいちゃんの家呼び出された。暇だからお祭りの時間まで遊ばない、みたいなノリで。

昼過ぎにやってきて部屋に来たら、二人がケンカしてたというわけだ。

「あのあの、二人ともケンカは……」

「大体あおいは趣味が暗いのよ! そんなだからモテないの!」

「人の趣味なんだからほっといてよ! ていうかモテないのはひなたもでしょ、マヤちゃん全っ然気づいてないじゃん!」

「あいつが朴念仁なの! そっちだって付き合い長いくせに何にもないじゃない!」

「むきー! 言っってはならないことを!」

二人はつかみかかってキャットファイトを始めた。お互いのほつぺたがお餅みたいによく伸びてる。

よーし落ち着け私。あおひなのケンカはよくあることだ。なんなら毎度の会話でケンカ一歩手前まで行ってるくらいはある。焦る必要はない。

必要はないんだ。

ないけど……仲の良い二人が声を荒げてるのを見ると、無性に辛い。ケンカするほど仲が良くても、ケンカしないで笑いあつてほしい。そう思うのは、人付き合いの浅い私の勝手に無茶な思いなんだろう。

だけどたとえ勝手な思いでも、貫いてこそ完璧ウーマン。

思い切り息を吸って、お腹から声を出す。

「二人ともっ！」

「うるさいー！」

「申し訳ございません！」

そしてノータイムで土下座。

「ちようどよかった、マヤちゃんはどっちの味方!？」

「もちろん私のだね！ 悪いのはあおひだもんねっ！」

「ちよつと、マヤちゃんを脅さないでよ！」

「そつちだつて脅してるようなもんじゃん！ 大体あおひは——」

「お邪魔しましたー！」

土下座からダツシユで部屋を飛び出し、あいさつしつつ外へ。

逃げたんじゃなくて戦略的撤退だ。争いは時間が鎮めてくれることもある。私の完璧ウーマンな脳細胞がそう判断したんだ。けつして二人の剣幕が怖くて逃げ出したわけじゃないんだから。

「マヤさんは大きな声が苦手ですからね。よく頑張りました」

「うええん、ここなちゃん大好き」

「はい、私も好きですよ」

そう、私の撤退にはもう一つ意味があつたのだ。

今日の夕方、みんな浴衣姿で集まって納涼祭に繰り出すことになつ

てる。私はそんな高価な服持ってないから、ここなちゃんから借りる。そのために一度ここなちゃんの家に行く必要があったんだ。

寄ったついでに事情を話してここなちゃんが慰めてくれるのは、けっして狙ったわけじゃない。

ああでも、ここなちゃんは優しいな。いきなりやってきた私を優しく抱いて、頭などでしてくれる。もうここなちゃんと結婚したい。

「心配しなくても、きつと明日には仲直りしますよ」

「そうかなあ。拗れて疎遠になったりしない？」

「ありません。ケンカがするほど仲が良いんです」

「でも私、ここなちゃんとケンカしたことないよ」

「……じゃあ、してみますか？」

「えっ」

体が後ろに傾いたと思ったら。

仰向けになった私の上に、ここなちゃんが馬乗りになってた。両手首は顔の横で抑えられ、抵抗できない。普段の私が取ろうとしているポジションの物理バージョン。冗談から始まったケンカは、ここなちゃんの不意打ちですぐに終わったようだ。

ここなちゃんは暑苦しいのか頬をりんごみたいに赤く染め、天使のように笑っている。

「ふっ、やるじゃない。降参だよ」

「……」

「や、あの、降参。参りましたってばー！」

なんだか陶然とした目つきで顔を近づけてきた。ぱっちりした目、さくらんぼみたいな唇、健康的な柔肌とか、ここなちゃんの可愛らしい顔つきがよく分かる。

「マヤさん……お人形さんみたいです……」

「あばばば」

「そんな顔もするんですね。ほのかさんと会ってる時も、肩の小屋の時もそうでした。私の知らないマヤさんがたくさん……もっと、見せてください……」

そういえば何かの授業で習ったけど、天使は神様の使いであって必

ずしも人間の味方をするとは限らないんだって。人から見ると怖いことや悪いこともする。

今のここなちゃんとはたぶん悪い方の天使だ。谷川岳の山小屋で抱きまくらにされて以来、ちよくちよく悪くて怖いここなちゃんが出てくるようになった。

そんなときは少し距離を置けば元に戻ってくれるんだ。今回も距離を――

「こ、ここなちゃん、タイム！ タイムアウト！」

とれない。身動きもとれない。うつとりしたここなちゃんが近づいてくるのを見るしかできない。一体どうしちゃったのさ、もう。

これ以上近づかれると私とここなちゃんの大切な何かが散る。

そう感じた私にできたのは、ぎゅつと目を閉じることだけだった。

「ただいまー、今日昼上がりだったわ。ここないる――!?!」
できることなら、しばらく目を閉じておきたかった。

玄関の方からここなちゃんのお母さんっぽい人の声が聞こえて、その人が居間の私たちを見つけ絶句しているらしい現実なんて、目を閉じて見なかったことにしたい。

うん、私は何も見ない、見えない。

きつと変な夢だったのさ。

土日に入れてるバイト先の社員さんに、青羽さんというおばさんがいる。おばさんといっても一見お姉さんで通じるような若作りさんで、私は仕事に慣れないころすごくお世話になった。毎日遅くまで残業して社会と家計に貢献してらっしゃる仕事熱心な人だ。将来はこんな人になりたい。

「あらー、ここなの言ってたマヤちゃんって山ちゃんのことだったのねー」

「そつちこそ、自慢の娘ってここなちゃんだったんですね。こんな子がいればそりゃあ自慢したくもなりますよ、あっはっは」

「でしょー、うふふ」

「ははは」

沈黙。

正座で向かい合う私と青羽さん。それから私の後ろに、耳まで赤くなつてうつむいてるここなちゃん。分かるよ、ケンカごつことはいえ傍から見ればやらしい場面に見えなくもなかったからね。でも大丈夫、失敗と言いつのりのプロであるこの私に任せてほしい。

考えていると、青羽さんが「さてと」と言いつつ立ち上がった。

「ちよつとこの部屋暑いから、外で涼んでくるわ。お邪魔してごめんなさいね」

「待った!」

「いいのよ、火遊びは若いうちにしときなさい。山ちゃんになら任せたいわ」

「だから待ってえ! 話聞いてえ!」

「クリーニング屋さんで浴衣受け取ってくるわねー」

そうして青羽さんが帰ってきてそうそう出ていき、部屋には私とここなちゃんの二人だけが残される。正確にはちよつと暴走気味のここなちゃんが、私の真後ろに陣取ってる。

気まずくて振り返れない。そもそも私が変なこと言い出したのが悪いんだ。ここなちゃんは乗ってくれただけ。気まずくても、きちんと謝らなきゃ。

「ごめんなさい、マヤさん」

でも先に謝ったのは、なぜかここなちゃんだった。

振り返るとしよんぼりうつむく彼女がいる。

「急にあんなことして……気持ち悪かったですよね」

「いや別に。ここなちゃんならいいよ」

「そうですね——えっ、いいんですか?」

ぱあつ、と輝く笑顔が戻る。

「いいに決まってるじゃない。友だち同士じゃれ合うのは普通だよ。びっくりはしたけどね」

「そうですね……」

しゅん、とまたうつむいた。何か言葉選びを間違えたっぽい。とにかく話を続けろ、そして笑顔を取り戻せ。

「それにしても意外だった。ここなちゃんでもあんな風に悪ふざけするんだ」

「……自分でも、意外です。でもきつと、マヤさんにしかしませんよ」
「じゃ、さっきのここなちゃんは私しか知らないここなちゃんか。なんか、得した気分」

「はい、マヤさんだけのここなです！ だからマヤさんも——」
ずい、とここなちゃんの顔が目と鼻の先に迫る。光のない目が私を覗き込んだ。

「私だけのもの、ですよ」

「はっ、はい」

悪ノリだよ？ さっきのマウントポジションから始まった悪ノリが続いてるだけだよ？

そう確認したくてもここなちゃんの気迫はあまりに強烈で、私は赤べこみためにココクコク頷くしかできなかった。逃げるように目線を逸らすと、先日渡したストラップがザックについているのが見える。よかった、気に入ってくれたんだ。

「ここなを見てください」

両ほっぺに熱くてやわらかい感触。手で顔を固定され、じーつと見つめ合う形になる。

これが数分間続いた後、またここなちゃんの顔が赤くなり始めたので、脳内アラートが鳴り響く。どうにか「喉がかわいた」と切り出して雰囲気のリセットすることに成功した。

たしかにこれだけグイグイ来るここなちゃんは初めて見たし、私だけに見せてくれるのはうれしんだけど。それ以上に本能的な身の危険を感じる。

そんな新しい、ここなちゃんの一面を発見したお昼だった。

帰ってきた青羽さんに浴衣の着付けをしてもらって、待ち合わせ場所に出発。

いつになく甘えんぼなこなちゃんが、何とかつなぎとかいうやり方で手を握ってきて。合流したみんなが怖い顔になってた。ほのかは相変わらず薄い表情で「……油断した」とか訳分かんないこと言うし。あらあら、と唯一笑ってたかえでさんに救われる思いだった。

だけど納涼祭の出店で金魚すくい、ヨーヨー、射的にわた飴りんご飴と、お祭りを楽しんでるうちにみんないつもの雰囲気。

あつという間に日が暮れて、飯能河原で花火を見る。右手にこなちゃん、左手にほのか。火花の音は幻聴か、そうでないなら花火の音だ。

夜空に咲く大輪が私たちを明るく照らす。

あおひなは仲直りした後、ケンカした理由すら覚えてなくて。ケンカが怖くて逃げ出した私の気苦労はなんだったのさと拗ねていたら、みんな笑って。

つられて私も笑ったら、その場の全員笑顔だった。

バイトして、登山とお出かけ繰り返し。

私の夏は、ただ穏やかに――

「学校やだあああ！・夏休み短すぎィー！」

穏やかに過ぎ去らないでよ、学校やだよ。つてか遊びすぎたせいで登山貯金も食費もほぼゼロなんですけど！

自分の家で一人になって楽しい夢の夏から覚めた私は、頭を抱えてごろごろ転げ回る。

壁にぶつかったら隣の人から壁ドンされ、反射的に土下座。

そんな夏休み最終日だった。

第22話

九月はもつとも残酷な月である。

学校に行かなくていい、クラスに馴染めない苦痛を味わわなくていい。夢のような一か月を過ごした生徒たちをいつぺんに現実のどん底へ突き落とす。

そんな生徒たちの一人である私の視界は、黒く陰っていた。心のバリアたる前髪だ。一月も登山スタイルで過ごしていたから邪魔に感じるけど、すぐに慣れる。というか慣れないと学校に通えない。

「はあ……」

「二人とも暗すぎー」

校門をくぐって教室に向かう道中、あおいちゃんとため息がかぶった。ひなたは呆れたように笑ってる。ええ、学校が楽しくてクラスにも馴染んでるひなた様には分からんでしょう。陰の者の苦しみは。

「おっはよー!」

「おはよー」

元気なあいさつと共に教室へ入っていくひなた。その後ろから私とあおいちゃんが続き、ぐにょぐにょによとあいさつ未満独り言以上の呪文を唱えた。

ひなたはなんでこう元気なんだろう。もしあいさつが無視されたらとか、声が裏返って注目されたらとか、考えないのかしら。考えないんだろうな、ひなただから。

あおいちゃんの陰に忍びつつ、とぼとぼと席に向かい、着席。ひときわ大きなため息とともに、二学期が始まった。

第一種警戒態勢、デフコンレベルを最大値に設定。机に突っ伏す陰の者特有のステルスモードで休み時間を過ごす。あおいちゃんは無言で編み物してて、ひなたはクラスの陽キャグループとお話してる。「夏休みの思い出について、三人でサンシャインのスカイデッキに行っ

たの」

「夜景すつごくきれいだった。宝石箱みたいだったよ」

「風強かったー」

「いいなー。夜景がやけーにきれいだね。なんつつて」

くつ、ひなたにしてはいいギャグを詠むじゃないか。私に流れる関西人の血が騒ぐ。

サンシャインというと、池袋かな。こつそり前髪の隙間から、話すひなたを覗き見る。

話し相手は三人で、ポニテの子がみおさん、眠たげな目つきのメガネっ子がかすみさん、小柄なボブカットの子がゆりさん。クラス内でもおなじみの仲良し女子グループだ。よく会話を盗み聞きしてるから、名前は覚えてる。

宝石箱みたいな夜景か、きれいだろうな。でも私たちだって負けないぞ。富士山の御来光はきれいだったし、手をつなぐあおひなど谷川岳の朝日は絵画じみた美しさだった。充実度じゃ負けてないもんね。

そうなんだ、山本さんは登山が好きなんだよね。他にどんな山登ったの？

えつとねー——

「マヤちゃん、聞いてつてば」

「わ、私は脳内会話で友だち作るのに忙しいから……」「聞いてるほうが悲しくなることしないですよ……」

陰の者にもみ伝わる由緒正しき技、悲しみイメージネーション。たぬき寝入り中に聞こえてきた会話に脳内で参加する離れ業だ。シミュレーション効果によりコミユ力が上がると言われている。

欠点は夢中になりやすいこと。あおいちゃんに話しかけられたけど気づかなかつたみたい。

私が顔を上げると、ドン引きしてるあおいちゃんが気を取り直した。ひなたの方をうかがいながら、声を潜めて言う。

「夜景と登山を組み合わせることってできないかな？」

「ナイトハイクってこと？ いいじゃん、やろう」

「俳句の話はしてないよ!」

「私だっしてないよ!」

水を得た魚。登山の話題で一気に目が覚めた。

態度からして、ひなたには知られたくないんだろう。ひなたはみおさんたちとの話に熱中してる。聞かれる心配はない。

「ナイトハイクは夜に登山すること。夜景見たくなつたの?」

「あ、俳句ってハイクか。うん、ひなたに富士山のお土産もらったから、そのお返しにサプライズしたいなって」

ほとんど忘れてたけど、言われてみればあおいちゃんは富士山のぬいぐるみ受け取ってた。下山のとき子鹿みたいに膝震わせてたあおいちゃんに、ひなたが「よく頑張ったね!」って五合目で買ってあげたんだ。そのお返しにナイトハイクと。

いわく、何の変哲もない山を登ると見せかけて、山頂でどどーんと夜景を——ん? どっかで聞いたことあるな。

「どこかい山ないかな?」

「筑波山とかいろんな意味で二人にお似合いだけど……無難に天覧山とか高雄山は?」

「それじゃ夜景があるってバレるじゃない!」

「えー、でもナイトハイクって暗いんだよ。道が見えにくくて迷いやすいし、行ったことある山の方がいいって」

「マヤちゃん、ガイドお願い」

「絶対ヤダ」

「なんでよ!?!」

ナイトハイクなんて二度と行かない。特にこの季節には。だって山には特攻野郎があふれてるからね。

一度経験のためにナイトハイクに行ったら、ヘッドライトの光に寄ってくる羽虫が顔面に何度も特攻してきてすつごく不快だった。視界の隅に映った黒い岩陰をクマと見間違えて絶叫するし、案の定道に迷うし。

「嫌なものは嫌なんですうー!」

「もう、何よ。いいもん、マヤちゃんいなくてもナイトハイクくらいで

きるわ」

「つてことは天覧山？」

「筑波山！」

えっ。

「私は日本一を制した山ガールなのよ。初めての山もきつと大丈夫！」

「は、はあ」

あおいちゃんは自信満々だ。胸の前で拳を握ってふんす、と気合を入れてる。

初めての山が不安でガタガタ震えてるよりかはいいメンタルだと思うけど、見ていると私の方が不安になってきた。慣れたときが一番危ないって言うもの。

いや、筑波山なら大丈夫かな。たしか登山道がきれいに整備されてたし、岩場はあったけど観光名所じみた巨岩、奇岩が多かった。それに下山コースには登山の装備もそろえてないリア充どもだって——そうだ、これだけは念押ししとこう。

「あおいちゃん、筑波山は山頂もいいけど、もう一ついいスポットがあるんだよ」

「いいスポット？」

「そうそう。御幸ヶ原広場つてところ。下りるときに二人で寄つてくるといいよ。二人きりで、ね」

「そりゃ、ひなたと二人になるだろうけど。そこに何が——」

「二人とも、何話してるの？」

「ひえっ」

ポニテのみおさんが話しかけてきた！ 声が裏返って視界が回る。あおいちゃんも「うええ!？」とテンパってて頼りにはできない。

「ど、同胞の約定を確かめておりました」

「同胞？ 仲間つてこと？ 何の？」

「忍びでござる」

「忍び、忍者かー。なに、二人とも忍者好きなの？」

「違うから！ もう、マヤちゃんは何言い出すのよ!？」

陰の会話術なのだ。意味不明なことを言っただけで無理やり会話を切ることができる。しかし類稀なるコミュ力オバケには普通に話題として利用される恐れがある。今のうちに。

「あばばば」

「壊れた!? しっかりして!」

「あはは、二人って面白いのね! あ、チャイム。また後でね」

チャイムと共にホームルームが始まり、コミュニケーションという名の果たし合いが終わる。

陽のエネルギーに焼かれた私が復活したのは、出欠確認で三回も呼ばれた後になるのだった。

後日、私はスキップでもしそうなウキウキ気分登校した。今日はおおいちゃんとひなたに褒められることが確定してるんだ。そう考えると足取りも軽くなるというもの。

理由は筑波山。二人は無事筑波山の女体山山頂に登り、ナイトハイクを成し遂げたらしい。昨日夜景の写真が送られてきた。インドア派のおおいちゃんも計画から実行まで一人で登山できるようになったのはすごいと思う。私の素晴らしい誘導により、御幸ヶ原広場でひなたとの仲も深まっただろう。

そう、御幸ヶ原広場はカップルの巣窟なんだ。一人で行くときごく寂しいけど、あおいちゃんとひなたみたいなお似合いの二人が行けば、最高のデートスポットになったはず。二人の仲を進展させたキューピッドとして今日は褒められること間違いなしだ。

「おはよー」

「お、おはよう……」

「あれ、今日はちよつと声が大きだね。何かいいことあった?」

早朝の教室で机にひじ突きながらワクワクしていると、みおさんが入ってきた。続いてかすみさん、ゆりさんも。朝からハードな言葉のキャッチボールの予感。

あの日以来、みおさんは私とあおいちゃんによく声をかけてくるようになった。仲良しで席も近いかすみさんとゆりさんもいつしよに話してるうちに三人で盛り上がり出して、私たち二人がフェードアウトするパターンが多い。

今はあおいちゃんがいらないから三対一。難しくてもやるしかない。

「い、良いことをした。徳、積んだ」

「どういうこと?」

「あおひなは、いと尊し……世のため、人のため、あおひなを尊ぶべし……」

「ああ、あの二人仲良いよね。尊いっていうのは分かるな」

分かっちゃったよこの子。要領を得ない大暴投を難なくキャッチされた。みおさんが強すぎる。

「でも山本さんだって——」

「マヤあ!」

「マヤちゃん!」

みおさんの言葉を遮るように、話題の二人が現れた。あおいちゃんとひなたが足並み揃えてズカズカと近づいてくる。えっ、なんか怒ってるんだけど。

「お、おはよう。御幸ヶ原で何かあった?」

「何も無いよ! 言っとくけど、私とあおいはそういう関係じゃないから!」

「あくまでも幼馴染の親友でしかないんだからね! 勘違いしたらダメよ!」

あおいちゃん、本人の前で親友って言い切るんだ。ひなたもそれを聞いて特に恥ずかしがることはない。足並みが揃ってて息も合っていて、本音で言い合える二人の関係は、やはり尊い。筑波山は不発に終わったみたいだけど、これからもキューピッドさせてもらおう。

「うんうん、分かってるよ」

絶対分かってないでしょ、と口を揃えるあおひな。分かってるよ、二人の気持ちも、二人の仲に入り込む余地がないことも。だけど割り込むのが無理だとしても、外から応援して関わっていく分にはいい

じゃない。私も二人のことは好きだから、いつしよにいたいんだ。

愛の名探偵こと私は分かっている分かってると繰り返しながら、あおひなの言葉を受け止める。しかしみおさんたちが「二人も苦勞するわね」と言いながら私たちに呆れた視線を向けていた理由は、私の優れた頭脳でも分からないまま。

でも一つ分かったのは、あおいちゃんとひなたがいれば学校もあんまり苦じゃないってことだった。

第23話

カラオケボックスとは人の生み出したもつとも忌まわしい業の一つだ。

狭い空間に集団で入ることにより、互いのパーソナルスペースを殺す。来たからには何か歌わなきゃという集団心理がオンチにさえマイクを握らせ、微妙な空気を作り出す。まさに陰の者だけをピンポイントで狙い撃ちする非人道的兵器と言えよう。私の将来の夢はこの兵器を地球上から根絶する国際的組織を設立することかもしれないし、ないかもしれない。たぶんねーな。

「さ、次は山本さんだよ！」

「期待してる」

「山本さんって多芸だもんね！」

「あ、あはは……」

そんな、ぼつちだけを殺す箱であるカラオケボックスで、私はマイクを握っている。ニコニコ笑顔で見守ってくれているのは、みおさん、かすみさん、ゆりさんの三人。あおいちゃんたちの姿はない。

すでに聞いたこともない曲の伴奏が流れ始めている。タブレット端末みたいな機械をいじってたら間違つて曲を入れてしまったんだ。間違えました、やっぱ歌わないと言える空気じゃない。

今から私は、知らない仲ではないけどそこまで親しくない人たちにオンチを晒す。そうしてメンタルが破壊され死ぬのだろう。

嗚呼、死地に追い込まれるまでのいきさつが、走馬灯のように脳裏をよぎる――

——

……この起こりは昼休み、私が職員室に呼び出されたことだった。

「すみませんでした……この後すぐ返しにいくのでなにとぞ命だけは……」

「いやいや、そこまで謝らんでも。お昼を食べてからでいいからな」

「はい……」

一学期の初めに図書室で借りた本のことをすっかり忘れてて、早く返すように注意されたんだ。平身低頭謝りたおして担任の先生の苦笑に見送られ、職員室を出た。

教室に戻ってみると、あおいちゃんとひなたの姿はなかった。今日のはかえでさんといっしょに四人で食べると言ってたのに、いない。

私忘れられたんだと絶望しかけたけど、よく考えればかえでさんは先輩だ。一年生の教室じゃなくて別の共用スペースで食べるはず。その場所のこと聞いてなかった、つまりぼっち飯確定。

ぼっち飯するくらいなら先に本返しに行く。道中でみんなに合流できるかもだし。そう考えて、かばんに入れっぱなしだった二冊の本、『剣岳点の記』と『サイレントブラッド』を取り出した。

前者は文章が難しく途中で挫折、後者は読みやすかったけどひたすら怖かった。何が登山関連の本だよ、パニックホラーかミステリーじゃないか。もう図書委員さんの宣伝は聞かないもんね。

「あ、それ読んだことある」

「ホッ!」

「ほ?」

表紙を眺めてたらいきなり声かけられて奇声が出た。こてん、と首をかしげるのはかすみさん。地味に中学で同じクラスだったこともあるメガネ美少女さんだ。

「面白いよね。中盤のどたばた感と終盤のしんみり感が好き。山本さんは?」

「わ、私は……クマさん、すごいと思いました」

「そっか。じゃ、今度『巖嵐』とかどう? クマさん、出てくるよ」

「ま、前向きに検討させていただきます」

「うん」

「……」

ぼーっと眠たげな瞳を向けてくるかすみさん。何この冬眠し損ねたクマさんみたいなプレッシャー。動けないんですけど。

しばしのにらみ合いの後、かすみさんがぼつりと言う。

「今日、一人？」

「えっ」

「お昼、一人？」

「はあ。そうなります」

「じゃ、いっしょに食べよ」

見た目によらずグイグイ来なさる。

かすみさんが指さした先には、席をくつつけてお弁当を食べながら、物珍しそうにこちらを見るみおさんとゆりさんの姿があった。私と目が合うと、につこり笑って手招きしてくれる。

教室でのぼっち飯と、付き合いの浅い人たちのお昼——以前の私なら迷うことなくぼっちロードを選んでいただろう。

でもそれじゃいつまで経っても変わらない。苦手なものに挑戦してこそ成長があるんだって、あおいちゃんが示してくれたじゃないか。

自分から声をかけるといっふ一番高いハードルはすでにない。ここで挑戦しなければいつやるのか。

「かすみ、それから山本さんもおかえりー」

「何の呼び出しだったの？」

「か、借りた本早く返せと」

「ああー、あるある。いつでも返せるって思ったらつい先延ばしにしちやうよね」

分かるー、と相槌を打つゆりさん。かすみさんがしずしずと座る隣に、さりげなく私も着席する。

お弁当箱を机の上に置くと、三人はわずかに目を見開いた。

「お弁当派になったの？」

「一学期は菓子パンばかり食べてたよね」

「じ、自炊しろと脅されたので」

「脅された？ ていうか自炊ってことは自分で作ってるの!？」

「は、はい一応」

「「すーいー」」

「……すーいー」

そうでしょうとも。かえでさんに弱みを握られて嫌々初めた自炊
だけど、やってるうちに楽しくなって女子力がどんどんついた。お弁
当の出来栄えにも自信がある。

というか、お昼が菓子パンだけだったのよく知ってるなあ。コミュ
力のある人って観察力もすごいよね。

えっへん、と胸を張っていると、かすみさんが「あれ？　でも」と何
かを思い出したよう。

「中学のとき調理実習ですごくいいことになってなかった？　たしか―
―」

「あーっ!?　お口チャック！　あのときの私はもう死んだ！」

なんとたって高校生になってから何度も辞世の句を詠んでるからね。
指を切るどころか野菜でいっぱいのボウルをひっくり返したり、肉
じゃが作りで火災報知器を鳴らした私はもういない。生まれ変わっ
たんだ。

というかなんで恥ずかしいところだけ覚えてるかな、このメガネさ
ん。

慌ててかすみさんの口をふさぐと、みおさんとゆりさんは唾然とす
る。しばらく後、おかしそうに嘔き出した。

「ふふっ。山本さんってやっぱり面白いところあるわね」

「ほんと、ひなたちゃんと言ってた通り」

「あの脳内晴天ガールの戯れ言は聞き流してね」

あやつめ、何か入れ知恵しおったか。私の情報売ってどうするつ
もりだ。

警戒心を強めていると、みおさんたちは顔を見合わせてまたクスク
ス笑い出す。バカにされてる感じはしないけど、どこか釈然としな
い。

そうしておしゃべりしていると、出し抜けにみおさんが言ったん
だ。

『放課後遊びに行くんだけど、よかったら山本さんも行かない?』

このときは遊びの内容が邪悪なる死の合唱ボックスとは分からな
くて。みおさんにリードされる形ではあってもそこそこの会話が成立

した慢心もあつて。行きますと即答しちやつた。

放課後にカラオケボックスと明かされたときには衝撃のあまり吐血。足つったフリと同等のよろけっぷりを披露しつつ、あおいちゃんとおひなたに助けを求めた。どうかついてきてくださいと。

だがヤツらは無情だった。

『カラオケ？ でもかえでさんとの約束が……何よひなた？』

『ちよつと耳貸して』

ひなたがごによごによと耳打ちしたかと思うと、あおいちゃんは「ごめーん、放課後かえでさんと山道具見に行くのー」と満面の笑み。なんなのさ。耳打ちを盗み聞きしても「オシテダメナラー」「一理あるわね」としか聞こえなかつたし。ダメナラーでどこの偉人よ。

一度行くとつた以上行かないわけにはいかず。

私はメンタル拷問ボックスに連れられてゆくのだつた――

十。

それがモニターに表示された私の歌唱の点数だ。百点満点中の十点。回想しているうちに歌い終わっていたようだ。

みおさんとゆりさんは苦笑。かすみさんは無表情。空気は、死んでいた。そして私も今から死ぬ。

「ふっ……」

みんなが温めた空気を瞬時に死なせるこの陰パワー。これこそ私の必殺技だ。空気と私のメンタルの両方を必ず殺すの意である。

そんな必殺技いらなかつたよ。クレバスがあつたら入りたい。存在してごめんなさい。

「はい、最下位確定！ 山本さんは罰ゲームね！」

「わー！」

「わー」

「わー、って。えっ？」

もう笑うしかねえと開き直つて不敵に笑っていると、みおさんが変

なことを言い出した。棒読みでノッてるかすみさんがシユール。罰ゲームとは？

「最下位の人は一位の人の言うこと、何でも聞いてもらいます！」

「初耳なんですけど!？」

「ぼーっとしてたから聞き逃したんじゃない？」

かすみさんの言う通り人生に絶望してぼーっとはしてたけど、ほんとに言ってた？ 今テキストに決めたんじゃーと考えているうちに、みおさんが動いた。

一瞬の早業。

ボックス内に転がっていたネコミミカチューシャを私の頭につける。

「丁寧の前髪をかきあげる形で。」

「ぐああっ!？」

「そのネコミミ帰るまで外しちゃダメだよ！」

「鬼、悪魔、コミュ力オバケ！」

「おお、ほんとに雰囲気変わった」

「ひなたちゃんの言った通り」

またひなたの入れ知恵か！ これほど陽キャ濃度の高い空間で前髪バリアを外せば再起不能になる恐れもあるというのに。ゴキのときといい、やはりひなたは我が敵なのか。

が、おかしい。

恥ずかしいことは恥ずかしいけど、ボックスを飛び出してお家でふて寝する気にはならない。それはみおさんたちが優しい笑顔で見えてくるからか、私が自分を晒すのに慣れたからか。

分らない。

でも思ってたほど恥ずかしくはない。空気も生き返った。まだ誰も次の曲を入れてない。ならばやることは一つしかないだろう。

「山本マヤ、歌います。『翼をください』——」

歌で失った信頼は歌で取り戻す。それこそが私のロツクンロールなのだ。曲名を聞いたみおさんが「歌うの!？」と慌てて曲を入れてくれた。恩に切るぜ相棒。

お礼に必殺のアルピニスト歌唱法を見せてくれよう。三千メートル級の霊峰で培った我が肺活量と声量に震えるがいい——!

「採点は、所詮ポンコツ機械なり。我が声解す、はずもなきかな……」
「あつ、辞世の句」

「いじけると詠みだすってほんとだったんだ」

「……季語は？」

三十。計三度歌い直した私の最終スコアだ。

まあ採点が機械だから、山で鍛えられた私の歌唱センスを理解できなかったに違いない。だから別に悔しくないし。上を向いて歩くのは夕暮れ空がきれいだからってだけだし。目元からは何もこぼれない。

「でもすごいね、山本さん。最初の十点は声が小さかったただけとしても」

「あんなに大声で歌ってあの点数なんて」

「言わないでよ泣くよ!」

「ねえ、季語は？」

「知らないよ、マイペースか!」

この子ら遠慮なしにいじってきやがる。やめてよ、マイクが音拾ってるのにあの点数なんてまるで私がオンチみたいじゃない。あとかすみさんはマイペース過ぎ。

その後も散々点数と、キャラの変わりようについていじられた。キャラ変わってるのは仕方ない。だってこの三人思った以上に性格が濃くて、前髪バリアが逆に相性悪いんだもの。素の状態で話す方が楽。

「だから私はオンチじゃない。悪いのは全部あの機械で——」

「分かった分かった。でも正直、少しほっとした。二人もそうじゃない?」

不名誉な誤解を解こうとすると、みおさんが変なことを言い出し

た。ゆりさんとかすみさんもそれぞれうなずいてる。何の話だろう。

「山本さんって何でもできる子でしょ？」

「は？」

「勉強できて、体育も球技以外すごく得意で、先生にも気に入られて。ひなたに聞くまでは、話しかけにくい完璧超人って感じだった」
「でも、ふふっ、さっきの歌みたいにな、っふふ、できないこともある普通の子って、ふふふ」

「ゆりさんは笑うのやめて！ いいかげん傷つく！」

ツボに入ってるな、ゆりさん。

さておき、高校の私ってそんな認識だったんだ。勉強も体育もできるといふか、それ以外のステータスがなくてとりあえずキープしてただけなんだけどな。何でもできる孤高の完璧超人か。

最高じゃん。維持しよ。

「何でもできるよ。勉強も歌も楽勝だよ」

「もう手遅れだと思う」

ばつさり言い放つかすみさん。いやいや、諦めるのはまだ早い。幸いあおいちゃんとひなた、みおさんたち三人組以外にとつて私はまだ孤高の完璧さんのはず。どうせならそのイメージを貫きたい――
「ひなたちゃんが色んな話バラまいてるから」

「あの女ア！」

今度会ったらただじゃおかない。

あ、でもひなたがそうしてくれたから、今日みおさんたちと仲良くなれたのか。それならまあ、何が目的かは知らないけど勘弁してやるか。私は優しいんだ。

その後、オレンジに染まる飯能の町を四人で歩いた。

宝石箱みたいにきれいな、スカイデツキからの夜景。富士山で見た御来光。脳内会話通りには行かなかつたけど、話そうと思つてたことをたくさん話せた。

あおいちゃんと登つたことを話せば、今度遊びに誘ってみようとおささん。私よりも激しく焦るあおいちゃんが目に見える。ぜひお願いしたい。

そうして何か忘れてるような感覚を気にせず、帰宅したのだった。

「山本オ……」

「まことに申し訳ございませんっ！」

翌日の朝、担任の先生にすごまれた私は全力ダツシユで図書室に駆け込んだ。

本、忘れてた。

第24話

かすみさんとは中学で三年通して同じクラスだった。

ふわふわしたくせつ毛、眠たげな目つきとメガネ、おっとりした雰囲気からして最初は同胞かと思ったものの、その実クラスの誰とでもいつの間にか仲良くなれるコミュ猛者だ。

そんな彼女に本をおすすめされたら、気になるのが人情。もしかすると読書歴からコミユ力の秘密を探れるかもしれないし、話の種になるかもしれない。だからこの前本を返しに行ったついでにかすみさんおすすめの本を借りて、読んだ。

後悔した。

「かすみさんコラあ！」

「おはよう」

「あ、はいおはようございます。じゃない！」

登校して朝イチでかすみさんの座席に直行すると冷静にあいさつされる。いつしよにいたみおさんとゆりさんにもあいさつ。

それから徹夜で読了した貸本をかすみさんに突きつけた。

「これ読んだ！ 怖かった！」

「そうなんだ。でも面白かったでしょ？」

「夜通し読んじやうくらいには！」

気に入ってもらえてよかった、と微笑むかすみさん。くっ、そんな顔されてもすごく怖い思いしたことは変わらないんだから。どこが登山関連の本だよ、山を舞台にしたモンスターパニックものじゃないか。しかもノンフィクション。先が気になってつい読んじやったけども。

「なになに、何の話？」

「二人ともいつの間にか仲よしだねー」

勢いのままかすみさんと感想を語り合っつて。話が気になったみおさんとかすみさんが入ってきて。四人でワイワイやっているとチャイムが鳴り、ホームルームが始まった。

ちなみにお話している間、あおいちゃんとひなたの方から「何が押

してダメならよ！ めちやくちや仲良くなってるじゃない！」「マヤがあそこまでチョロいなんて知らなかったんだよ！」と言い争う声が聞こえた。途切れ途切れだったけど一つ文句を言わせてもらおうと、私はチョロい女ではないのだ。少し優しくされただけで心を開くようなことはない。その点、ひなたは勘違いしないでほしいのだ。

市街地に隣接する天覧山、その先の多峯主山は飯能ではおなじみのハイキングコースだ。さらに北西方面へ足を伸ばすと、飯能アルプスと呼ばれる連峰を楽しむことができる。

今日はその連峰の一角である天覚山と大高山に登る。いつものメンバーは都合がつかなかったので、私とおおいちちゃんの二人だけだ。今は飯能駅から東吾野駅に移動、天覚山への道中を歩いている。

「何か視線を感じるような……」

「こそこそっ」

おおいちちゃんが振り返る。私はこそこそという言葉霊でカモフラ率を高めた。すぐに「気のせいかな」と再びおおいちちゃんが歩き出し、ストッキングを再開する。

おおいちちゃんと二人きりといっても同行はしておらず、尾行中。バイト先の先輩に貸してもらった迷彩服と帽子を装備しているので、緑豊かな道中のみならず山中でも風景に溶け込める。距離を維持していればバレることはないだろう。

なぜこんな忍びのマネごとをしているかという点、おおいちちゃんの慢心が原因だ。

『登山靴も買ったし、どんどん登るわよ！ エベレスト！ K2！』

北岳剣岳ジャンダルム！』

『待った！ 登山は自分の技術と体力をきちんと考えた上で——』

『へーきへーき、私は日本一の女なのよ！』

富士山だけでなく約束の谷川岳まで制したことで、おおいちちゃんは悪い方向に自信をつけてしまったみたい。グレーディング表の技術

的難易度DからEの山ばかり目指すようになった。

このまま調子に乗って冬になれば一人で雪山登山までしちゃうかも。その前に一度痛い目見てもらって、初心を思い出してもらおう。ということでオススメしたのが飯能アルプスだった。

天覚山と大高山は低山の割に、景色の変わらない道中、分かりにくい登山道などのしんどい要素が詰まっている。今のあおいちゃんならたぶん、天覚山の山頂でリタイヤするくらいの難易度だと思う。

後ろからコソコソついていくと、あおいちゃんは弾むような足取りで登山口に入っていく。

「ゆっくり歩いたり、速く歩いたり、全部自分の思い通り。この山全部、私のもの！」

はしゃいでるなあ。独り言がすごい。いい感じの枝を拾って、どうするの？ あ、ぶんぶん振り回しながら、大きな声で歌い出した。セミのいなくなった静かな秋口の山中に、あおいちゃんのキレイな歌声が響く。

するとコースの分岐にさしかかる。

「沢筋コースと尾根コース。尾根は谷川岳で歩いたし、沢筋コースにしようかな」

幸い、難易度の低い沢筋を選択。

しかしはしやぎすぎたのか、少しずつ歌声から力が抜けていき——「疲れた……楽しくない……」

天覚山山頂のベンチでぐったり横になっていた。

もう帰ろうかな、とぼやくあおいちゃんは山頂からの景色を眺める余裕もないようだ。さすがにこれだけ疲れたなら、登山のしんどさも思い出したはず。

そう思って木陰から出ていこうとした私だったけど、

「わっ！」

「?!?!」

突如耳元で響いた美声に腰が抜けた。

声にならない悲鳴をあげて振り返る。

そこに居たのはここなちゃんだった。悪い天使のようにクスクス

笑いながら手を差し伸べてくれる。

「驚きました？」

「ぜ、全然。それより奇遇だね」

しかし手はとらない。腰抜けて立てないのバレたら年上の威厳が死ぬ。

話を変えると、「カモシカさんに会いに来たんです」とのこと。相変わらず動物好きだな。

「マヤさんは何してるんですか？ 隠れてるみたいですけど」

「ん、あそこ見てみ」

「あつ、あおいさん!？」

かくかくしかじか。

「そうですね、あおいさんが自信をつけすぎちゃったんですね。だからって隠れることはないんじゃない？」

「いっしょに登ったらペース作っちゃおうと思ってさ」

「ああ、富士山のときみたい——」

「えっ」

「い、いえ何でもないです！ えつと、心配だから私が声かけてきますね！」

まるで富士山でペースを作るための演技をしたことがバレてるような発言だったけど、聞き間違いだつたみたい。ここなちゃんは木陰から出て、あおいちゃんに声をかけに行った。

二人は二三言葉を交わすと、大高山まで登ることに。ここなちゃんは一度私の方にいたずらっぽい笑みを向け、あおいちゃんと共に山道へ姿を消した。

「ちよっ、動けないんですけどー！」

そして後に残ったのは、まだ腰が抜けて動けない私だけ。

動けるようになったところにはもう二人とは大分引き離されて、すぐすご下山して帰った。最近いいことが多かったから、その繰り返しか来てるのかな。

繰り返すというより、登山にたとえた方が分かりやすいかもしれない。登山道はふとしたとき険しくなったり、緩やかになったり、下り坂になったりする。でも山頂を目指すなら、下りの後にまた登らなきゃいけない。長い休憩をとったなら、その分急ぐ必要がある。きっと高校に入ってからからの生活は、下りでも平坦な道でもない、休憩ポイントだったんだろう。

飯能に帰り着いたとき、傾いた日が空をオレンジに染めていた。遠回りして飯能河原の赤とんぼを見ていく。うだるような夏の暑さはとうに過ぎ去り、涼しい秋の風が心地よかった。

でもアパルトに着いたとたん、嫌な汗が出る。

私の部屋の前に、二人の男女が立っていた。

一人は白髪を短く刈り込んだおじいさん。

もう一人は身なりのいい女の人。私に似て身長は低く、胸も薄い。たぶん私がやせてる原因は食生活じゃなくて遺伝なんだろうな。

「——お母さん」

お墓の手入れしてくれる人は、お母さん以外いないと思った。

私を捨ててもお父さんのことは大切にしてくれてると思った。

私のことが嫌いでもいつか会いに来てくれるかもと、思った。

だけど早すぎるよ。心の準備ができてない。どんな顔して会えばいいのか、分からない。

頭が真っ白になってる間に、お母さんが振り返る。

目が合った瞬間、私の人生登山における最大の難所が始まった気がした。

第25話

唇に柔らかく、温かい感触。もちっとしたお饅頭みたいに、甘い味がした。

お菓子を食べる夢でも見てたのかな。そう思い、寝ぼけ眼を開いてみると、

「おはよー、ひなた」

「……お、おはよう」

ほっぺを赤く染めたひながいた。あくびでもしたのか、潤んだ目元が色っぽい。私の顔の横に両腕をつけて、覆いかぶさるようになっていたのが分かった。こいつ、人の寝顔まじまじと見てたんか。

慌てて起き上がるとひなたはさつとどいた。目覚し時計は午前五時前を指しており、五時のアラームより早く起きたようだ。私より先に起きていたひなたは、いつから起きてたんたる。

「ちゃんと寝た？」

「……なんでそんなこと聞くの？」

「寝不足は登山の敵だから」

そう、今日はいつものメンバーで登山に行く。それも縦走だ。

季節は秋、十月半ば。前回あおいちゃんの天覚山についていつてから色々なことがあったけど、靄がかかったように曖昧だ。夢を見ている間のような不鮮明で不自由な感覚が、起きているときもずっと続いていた。

みおさんたちとまたカラオケに行った。今度はあおいちゃんとひなたもいっしょだったけど、「オンチ過ぎ！」と口を揃えて爆笑された。やかましいわ。

ほのかの案内で、群馬の観光スポットに遊びに行った。伊香保温泉は気持ちよかった。でもほのかが無言かつ頻繁に裸のスキンシップとうとうとしてくるのは身の危険を感じた。

そしてまたみおさんたちと、今度はあおいちゃんを連れて池袋まで遊びに行つて——そしたらひなたが拗ねた。

伊香保温泉と池袋はひなたの都合がつかなかったのだけど、あおい

ちゃんに対してどこかそっけない態度をとるようになった。

『池袋、どうだった？』

『楽しかったよー。プラネタリウムがすごくキレイだった。クレープもおいしかったな。三十分も並んだんだよー！』

『ふーん』

『……ひなたは映画、楽しかった？』

『うん。お母さんも喜んでた』

『そっか……』

私はというと、妙にぎくしゃくした二人の間で彫像のごとく固まっていた。二人が気まづくなると元々仲良しな分すごくきつい。

生活が激変して現実味を失ってた私に仲裁とか橋渡しをやる元気はなく、気まづい二人はずっと続いている。

今回の縦走はその気まづさを打開してくれそうだ。

瑞牆山と金峰山の縦走。どちらも標高、累積標高ともに高く、道中の難易度もそこそこ。険しい道のりをともに乗り越えればきっと元の二人に戻るはず。

とりあえず起きて出発の準備をしよう。

「ごめんね。無理言っちゃって」

「はい？」

そうして立ち上がろうとすると、ひなたが急に謝りだす。

「知ってるよ。あおいとここなちゃんにも誘われてたんでしょ。あおいの家に泊まるって」

「ん、まあね。でも先に誘ってくれたのはひなただし」

「……無理、させちゃったよね。私というより二人といた方が——」

「ネガティブスパイラルっ！」

「ふえ？」

ひなたはあおいちゃん欠乏症で後ろ向きになってるらしい。一喝してやった。

「あおいちゃんが構ってくれないからっていじけすぎ！ 本妻はもつとどっしり構えてなよー！」

「べ、別にそういう訳じゃないよー！」

「いいや、そういう訳だ。だって私だってそうだもん！」
「え？」

「友だちが他の子と仲良くしてたら寂しいよ。でもひなたはあおいちゃんの特別じゃんか。他の誰よりも思い合ってる特別同士。いじけてもいじけなくてもそれは変わらないでしょ」

だから拗ねる必要なんてないんだ、と締めくくると。

ひなたはしばらくぼかんと呆けてから、わたわたと慌てだした。

「た、たしかにあおいは大切だけど、大親友だけど！ 特別っていうのは違うよ！ 私にとつての特別は——」

何かを言いかけたその瞬間。

カチリと何かが噛み合う音とともに、大音量のアラームが鳴り響く。

「うるさっ!?!」

目覚し時計をひなたがタップするとともに、今度こそ私は起き上がる。いつまでもベッドの上でおしゃべりしてたら二度寝しそうだからね。

顔洗ってご飯食べて、その他色々準備して。

瑞牆山と金峰山目指し、いざ出発。

今回の山行は山に着く前から難所が用意されていた。

東飯能駅に六時集合だったのだけど、あおいちゃんところなちゃんが遅刻したんだ。電車には間に合ったものの、張り切っていたひなたは水が差された気になったのかご機嫌ななめ。電車内での空気は最悪になっちゃった。

「なんで時間ギリギリなのよ。電車に間に合わなかったらどうするつもりだったの？」

「ごめんなさい……」

「ごこなちゃんまでどうしたの？」

しよぼくれる二人にかえでさんが聞いた。たしかに基本何でも

きるしつかり者のここなちゃんまで寝坊するのは解せない。

「山で食べるご飯を準備してたら遅くなってしまうて……」

「かえでさんには計画立ててもらって、ひなたにはテント準備してもらったから、何かしなきゃって二人で……」

ひなたの雰囲気は剣呑になった。ムカムカしたオーラがにじみ出てるみたい。ニブい私だけどひなたが反応したワードが「二人で」ってことは分かった。ひなたは心根の部分が私の同胞だから、割と気持ちばかりやすい。

分かったからには止めさせてもらう。

「だからって——」

「ははーん、遅刻するくらいこだわった山ごはんか」

だからって遅れてもいい理由にはならないよ、って言うつもりだったんだろうな。いいやひなた、おいしいご飯は十分遅れてもいい理由になると思う。

「あおいちゃんはともかくここなちゃんまで寝坊するレベルにこだわったってことは、相当豪華なごはんってことだよな?」

「ちよ、私はともかくってどういうこと!?!」

「はい!・きつとみなさん気に入ります!」

「それは楽しみね!・ね、ひなたちゃん!」

「えっ、あ、はい……んもう、これでおいしくなかったら承知しないんだからね!」

私の上げたハードルは、ここなちゃんがあっさり飛び越えていった。

ひなたもそこまで良いご飯を食べられるなら、と矛を収めたようだ。むつつり口を尖らせてるけどムカムカオーラはなくなった。

って、なぜそこで私を見るんだかえでさん?

「ねえ、今気づいたんだけど。マヤちゃんって今回何もしてくない?」

「あっ……」

空気が凍る。

言っちゃった、みたいな目でみんなが私に注目。計画を立てたかえ

でさん、ごはんを用意したあおいちゃんところなちゃん、テントを用意したひなたの視線が痛いぜ。

その通り私は何も貢献していない。

考えないようにしてきた現実を突きつけられた私の体は、勝手に動いていた。座席から立ち上がって隣の車両へ。

「帰ります……」

「わーっ！ 冗談、冗談だから！」

「マヤさんはいるだけで楽しい人ですから！ 大丈夫ですから！」

ほんと？ 私なんてホントはいないほうがいいんじゃないの？

みんなも陰では要らない子とか言ってるんじゃないの？

……ダメだ、ネガティブになってる。かえでさんの膝の上で宥められてるうちに正気が戻ってきた。最近色々ありすぎて冗談が分からなくなってるんだな。ひなたのこと笑えないや。

ちよつときこちない空気にはなったけど、それ以降大きなトラブルはなく。乗り換え一回を経て、目的の駅に着いた。

韮崎駅から片道のバスに乗り、瑞牆山の登山口へ移動。瑞牆山荘前から徒歩で五十分かけ富士見平小屋へ向かう。道中は紅葉の赤と落ち葉の褐色で染められていて、深まる秋の色彩がたくさん楽しめた。富士見平小屋では富士山ビュースポットなる看板があり、そこから名前を通り富士山が望めた。あおいちゃんは「あそこに登ってきたんだ」と感慨深そう。

小屋のポストに登山届を提出し、テン場にテントをたてる。この頃にはひなたもすっかり調子を取り戻していた。

「テントたてるの久しぶりだねー。あおい、たて方覚えてる？」

「覚えてるわよ。ええとまずはこれとこれを下に敷いて、風向きを気にしながら——」

「あおいさんすごいですー」

設営を手伝いながら、私は胸をなでおろす。もし何かの間違いでギ

スグスした空気になってたら私のメンタルが死ぬところだった。

ただ、私以外の四人が時折何かを思い出したかのように、四人集まってひそひそ話してるのは気になった。しかもチラチラ私の方を見てくる。分かってるよ、つまりこれは――

「陰口叩かれたので帰ります……」

「わーっ！ だから違うってばー！」

くっ、ナデナデしたりハグしたりで私をごまかされると思うなよ。十七歳の女子高生がその程度でなびくわけ……いやいや、四人で話したいときだってあるさ。それにみんなに限って私の悪口は言わないはず。気にせずいこう。別になびいたわけじゃないけど。

テント設営が終わり次第、瑞牆山に出発。道中は見晴らしが良く、富士山のみならず明日登る金峰山、その他奥秩父の山々が見渡せた。

一つ目のスポット、桃太郎岩にたどり着く。家一軒分はありそうな大岩が二つに割れたものだ。

「桃太郎岩？」

「たしかに桃に見えますー」

「これは本当の桃だよ。太古の巨大桃が化石化してこうなったんだ。中から巨人桃太郎が生まれた痕跡も発見されてる」

「そうなんですか!？」

「マヤちゃん、なんでそんな？ つくの？」

かえでさんのジト目が痛い。「?なの!？」「?なんですか!？」とおおひな、ここなちゃんが驚いてる。

私思ってたんだ、中途半端な知識でツッコまれるくらいなら最初から?でいいやつて。

開き直ったらみんな呆れ顔で、かえでさんはジト目のまま「嘘つき」と言ってる私のほっぺを引っ張った。少し痛い。

道が少しずつ険しくなってきた。

岩場もあって難易度はちょうどいい。ただし岩場のアップダウンと下りが多い山道が連続するので、油断するとヒザを痛めそうだ。先頭を行くかえでさんのルート選択が重要になるだろう。

任せましたぜ、かえでさん――

「今からあおいちゃんが先頭歩こつか」

「え？」

「えーっ!？」

言ったそば、いやさ思ったそばから!？ みんなのペースを作って、どのコースが歩きやすいか考えながら歩いてね、って。

「責任重大だね。あおいにはまだ早いんじゃない？」

「む、そんなことないわよ。見てなさい」

あおいちゃんは登山を初めてまだ半年しか経ってない。どう考えても無茶ぶりだ——と思っただけど、ひなたの激励がきいたのかな。

岩場は近道じゃなく遠回りでも登りやすいコースを。足元の不安定な沢筋ではきちんと事前の声かけを。模範的なペースメーカーの姿がそこにあつた。

適時休憩を挟みつつ、何事もなく山頂に到着。

切り立った岩の上に立つと心地よい風が吹き抜けていく。三六〇度に広がる絶景。携帯コンロで沸かしたお湯で、ティータイムを楽しむ。

「山頂で飲むお茶は格別ねー」

「はい、疲れた体にしますよ!」

「あおいやるじゃん! すっごく歩きやすかったよ!」

「そ、そうかな? えへへ……」

みんなも楽しそう。

かえでさんにとっては受験勉強の合間の息抜き登山。私の名前を出して発破をかけるゆうかさんの指導により、志望大学の模試判定は軒並みAだったらしいけど、気を抜かないためこの登山を機にしばらく山から離れるそう。お茶の味は格別だろう。ここなちゃんは、まあいつもどおり良い笑顔だ。

あおいちゃんとひなたも笑顔。ひなたはあおいちゃんの成長が少し寂しいみたいだけど、そこは慣れるしかない。誰だって成長するんだから。

誰だって。

ざり、と隣から音。見上げると、かえでさんだった。

ヒザを抱える私の隣に、座る。

「どう？ 元氣出た？」

「私はいつでも元氣いっぱいですとも」

「茶化さない。ずっとふさぎ込んでるの、知ってるんだから」

いつもにこやかで余裕のあるかえでさんの声が、一段低くなる。

寂しそうな瞳がメガネの奥から覗いていた。背後からは視線と聞き耳を感じる。

「言っただうにかなることじゃなくても、言葉にすれば楽になるかもしれないわよ？」

「言葉にできません。何に悩んでるのか、苦しいのか。自分でも分からないんです。だから……すみません」

「謝るところじゃないでしょ、もう」

結局、みんなにはバレバレだったわけだ。最近生きることと現実味が無いこと、フワフワしてること。まったく、ゴキブリ騒ぎのときと良い食生活の件といい、心配かけてばかりじゃないか。こんなだから私はダメなんだよ。

ってまたネガティブになってるし！

「さ、そろそろ下りましょう！ 秋の日はだるま落とし！」

「……釣瓶落としね」

「そうとも言う！ ほらみんなもなに辛気臭い顔してんの！」

ほらほら、とみんなを急かす。かえでさんは「待って待って、マヤちゃん先頭だと悲惨なことになるから」だって。失敬な。私は初見の道に弱いだけで、さつき通ってきた道くらいはさすがに覚えて……あれ？

「そっちは道じゃなーい！」

「一本道をなんで間違えんの!？」

「さすがマヤちゃん、やるわね」

「マヤさんらしいですー！」

らしいと言われても全然うれしくないわ！

下山後のテン場で出されたのはあおいちゃんところなちゃんの自
信作、トマトクリーム鍋。さっぱりしたトマトの酸味とクリームのま
ろやかさが絶妙な味を出してた。具材がなくなつてからはごはんを
入れてトマトソースのリゾットに。量も味も文句なしだ。

夜はみんなで星見て、明日に備えて早く寝て。朝の目覚ましはかえ
でさんの裏拳。寝相悪いんだよねこの人。

金峰山もサクサク登った。途中、ひなたがヒザを気にするような素
振りを見せてたけど、ストレッチと適宜休憩で乗り切り、登頂下山を
果たす。

楽しかったけれど、その間も現実感がない。まるでドラマの回想
シーンみたいに白く霞みがかつてて、他人事みたいだった。

たとえ他人事でも楽しいみんなが見られたならいい。
そう開き直つたのが悪かつたのかもしれない。

帰りの電車の車中。東飯能駅まであと一駅の時きだった。
ほのかに山行中の写真でも送りつけてやろうとスマホを取り出し
たんだ。山中はどうせ電波がないからと触りもしなかった。

電源を入れてホーム画面へ。

「マヤ?。」

ひなたの声が遠くで聞こえた。

スマホってよく出来てる。電話やメールがあれば分かりやすいア
イコンですぐに分かるようにできてるんだ。ご丁寧に誰から何件
あつたのかまで。

『着信2：お母さん』

『メール1：お母さん』

現実感が戻ってきた。

訳の分からない現実が。帰ってきたお母さんといっしょに暮らす
ことになったっていう現実と、そのことをなぜか受け入れられない
私っていう現実が、戻ってきたんだ。

「マヤ——!?!」

そうと分かつた瞬間に、私は走り出していた。電車を飛び出し駅を

出て、迫る現実から逃げ出して。
ただがむしやらに、駆け回る。

最終話

走って走って、気づけばたどり着いていたのは天覧山だった。時間も時間だからか、真つ暗な展望台には誰もいない。

いるのは泥と擦り傷だらけになった汚い私だけだ。ハイキングコースとはいえ下界よりも悪い足場を、ヘッドライトもつけず走り抜ければ傷だらけになって当然。

「……このっ。嫌いだ、嫌いだ！」

もういつそ、この傷が広がって死んじやえばいいのに。

コンクリートの手すりを力いっぱい殴りつける。鋭いのと鈍いのと、二種類の痛み。新しい擦り傷とアザでもできたのかな。

その調子だ。最低で意気地なしの私でも、痛い思いをたくさんすれば、誰かが許してくれるから。生きてもいいと、言ってくれるかもだから。

こぶしといっしょに額を地面に叩きつける。鈍痛が現実味を強めるものの、視界を塞ぐどろりとした赤でまたぼんやりに戻る。傍から見れば土下座してるみたいだろう。

みじめだ。みじめな私が大嫌いだ。

大嫌いなのに、まだ誰かに許してほしいと考える、未練タラタラなところも。現実から目をそらしてきたのは私なのに、いつまでも受け入れられない自業自得なところも。何もかもが大嫌いだ。

「マヤっ！ 見つけた！」

「な、何してるの!?! 血が——」

のたうち回る私の体が、誰かに抱き寄せられる。

ヘッドライトを装備した、ひなたとあおいちゃんだった。肩で激しく息をしながら、悲痛な表情をしている。

友だちにこんな顔をさせるところも大嫌いだ。

「と、とにかく血を止めなきゃー！」

ザックから救急キットを取り出したあおいちゃんが、ガーゼと包帯で処置してくれた。勝手に動こうとする両のこぶしは、ひなたに強く抑えられてる。

登山装備のままだから、二人とも駅から直接探しに来てくれたんだろう。疲れた体を引きずって。そんな迷惑をかけるところが――

「いい加減にしてー!」

処置が終わったとたん、ひなたの怒声が響く。

赤い靄の向こうに、まっすぐな瞳が見える。

「悩んでるなら相談してよ! 私がどうにかできるかは分からないけど――ううん、絶対、何が何でもどうにかしてみせるから!」

「……」

「マヤちゃん。これ、見たよ」

あおいちゃんが取り出したのは私のスマホだ。放り出してきたみたい。

「お母さんが帰ってきたんでしょ? それでひどいこと言われたんじゃない?」

「そういうことか……なんでよ、勝手にマヤを置いてけぼりにして、帰ってきたら悪口言うの? そんな人お母さんなんかじゃない!」

私がやつつけて――」

「違う」

違うんだ。お母さんは悪くない。悪いのは全部私だったんだ。

「お母さんは、私を捨てたんじゃなかったの」

お父さんとお母さんは、どっちもお金持ちな家の出身だった。

どっちも許嫁を用意されてる身分だったけど、出会ってからすぐ両想いになって。大学時代に私をこさえたら、許嫁なんて放って二人で駆け落ちしたんだって。

だから大好き同士で仲良しだった。私が生まれるまでは。

体の弱いお母さんはお父さんの登山に付き合えなかったんだ。でも私はお父さんの登山にたくさんついてった。それに嫉妬するうちにお父さんとは気まづくなって、そんな時にお父さんが死んじゃった。

元々病弱だったお母さんはショックで心も体もぼろぼろ。病院に通いながら女手一つで私を育てるのは無理だった。

お母さんは、自分から縁を切った関西の方の実家に頭を下げた。容態が安定するまで、私の面倒を見てって。

でも実家の人はお父さん似の私を嫌ってて、貸しのあつた遠縁の親戚さんに私を預けた。偉い人からの頼みで仕方なく、って感じだったみたい。

だから。

だから——お母さんは私を捨てたんじゃなかったんだ。口座のお金をくすねたのだから、親戚さんの嫌がらせみたいなの？だった。その時小学生だった私に真偽を確認するすべなんてなかったもの。

お母さんはやっぱり最高のお母さんで、自分の病氣と戦って、帰ってきてくれた。

お母さんは悪くない。

自分がどんな風に話しているのか、どのくらい伝わったのか、何もかもが曖昧なままだった。

あおいちゃんとはひなたはぎゆつと口を真一文字にして、私から目をそらさない。その後ろには、いつの間にかかえでさんとここなちゃんまでやってきていた。この二人も登山装備のまま、探しにきてくれたのかな。

やっぱり私は、人に迷惑をかけてばかりだ。

「結局、全部私が悪いんだ」

感覚のはつきりした夢のよう。口は勝手に動いていた。

「勝手に捨てられたと思ひ込んでた。でも実際はそうじゃなくて、お母さんはお母さんでたいへんだった。話せなくてごめん、って謝ってくれた。なのに——私はお母さんのこと恨んでる」

泣きながら謝ってくれたし、帰ってきてから作ってくれるご飯はおいしいし、山行中にもメールと電話でたくさん心配してくれる。

それでも私はお母さんにキツく当たっちゃう。

ひとりぼっちだったお葬式とか、要らない子扱いの親族会議とか。高校に入るまでは当たり前だった親戚さんのパンチキックとか罵声とか。傍にいてほしいとき傍にいてくれなかったことを、根に持っている。

「最低じゃん。お母さんもたいへんだったのに、私ばかり辛かったみたいになってさ」

どこまでも自分勝手に、しかもそんな自分に向き合うのが怖くてお母さんからも逃げていた。お父さんのいない現実を受け入れて強くなったと思ったのに、今度はお母さんが受け入れられないんだ。

「大嫌いだよ。大嫌いだ……」

私は要領が悪い。やることなすこと鈍くさくて、人に迷惑をかけてばかり。できるできる、私はすごいと思いつつも、いつも失敗する。誇れるものなんて何もない。

「そもそもお母さんが心壊したのだから私にせいだよ。仲の良い二人に割り込んで気まずくさせたんだ。仲直りできないままお父さんが死んじゃってさ」

仲の良い二人にはいつまでも仲良くしてほしかった。でも私がお父さんと話すたびにお母さんは機嫌を悪くしていった。娘に嫉妬するくらいお母さんがお父さんを好きだったなんて、考えもなかった。

子はお父さんがいつまでかわが子か？

私が生まれなければ二人は。

迷惑と不幸をバラまいてばかりの私さえないなければ。

「私なんて生まれない方が——」

パンっ、と乾いた音が響いた。

ほっぺたにじんわり広がる熱。滲んでいた視界がクリアに。平手を振り抜いた姿勢のひなたが見えて、叩かれたと理解するのに数秒。

「ばかっ」

理解できたころには、涙声のひなたに抱きつかれてた。

呆然としてると、あおいちゃんとここなちゃん、あのかえでさんま
で涙ぐんでるのが目に入る。

「なんで全部自分一人のせいにしてんのよ……何にも悪くないじゃん
か……」

「……」

「マヤはがんばってるじゃない。一人でもめげずに笑って。みんなの
ために体張って」

「……違う」

「違うよ、と答えたのはあおいちゃんだった。」

「高尾山のときも富士山のときも。ううん、中学のころからずっとマ
ヤちゃんはがんばってる。絶対お母さんにだって負けてない」

「そんなこと……」

「あるわよ、とかえでさん。」

「何度道を間違えても、クマに会っても、予定が狂って空回りしても。
マヤちゃんは絶対足を止めなかった。私がお母さんならみんなに自
慢しちゃうわね。がんばり屋さんで根性のある、最高の娘ですって」
だから、とここなちゃん。

「だから、だからマヤさん……生まれたい方がなんて……大嫌いだな
んて……そんな悲しいこと、言わないでください……」

滝のような涙だった。

ここなちゃんにはいつも笑っていてほしい。なのにこれほど涙を
流させていることを思うと、また自分が嫌いになった。

見れば、みんなの体も土や汗で汚れている。よっほど慌てて探して
くれたんだ。友だちに心配をかけてばかりの自分が、もっと嫌いに
なった。

「やっぱり大嫌いだ。」

「仲の良い二人を引き裂いて。」

「お母さんを逆恨みして。」

「心配と迷惑ばかりかけて。」

そんな自分を強がりです飾って、現実から逃げ回る。そんな自分が憎くて疎ましくてしょうがない。

どうすれば許してもらえる？ 痛い思いをすれば生きててもいいのか？ 要らない子でも生きてていいと認めてもらうには、どうすれば――

「マヤ」

痛いくらい抱きしめていたひなたが体を離す。

目と鼻の先にあるひなたの顔は、涙と鼻水で濡れていた。

ぐしぐしと顔を拭くと、強い瞳があらわになる。

「あんたが、自分のこと大好きっていうなら――私はマヤのこと、それよりもずっと大好きだから」

大好き、と紡ぐ唇の桃色が、やけに目を引いた。

「ひなただけじゃないよ。私もここなちゃんも、ほのかちゃんだって」
「私もよ。ま、若干ニュアンスが違う気もするけど」

かえでさんは思わせぶりな視線を私たちに向ける。ひなたたちの顔がみるみる朱に染まつていった。

意味は分からない。でも――

「私のこと、好き？」

「うん！ 大好き！」

「大好きだよ！」

「大好きです！」

「……私は私のこと、大嫌いだよ」

一度好きになったものを嫌いになることは難しい。それと同じで、元々大嫌いなものを好きになることもすごく難しい。だから私はやっぱり大嫌いだ。この山本マヤとかいうポンコツ女が。

けれど大好きな友だちが、私を大好きと言ってくれるなら――

「生きてても、いい？」

当たり前でしょ！ と答えてくれたから――

もうちよい頑張ろう、頑張って生きてみようって、生んでくれてありがとうって、そう思えるんだ。

「きりーっ」

放課後を知らせるチャイムとともに、クラスみんなで号令。

今日も一日を乗り切った生徒たちが、家へ部活へと向かう。万年帰宅部の私は基本的に直帰コースだ。

「マヤちゃん、付き合っただけとこあるんだけど、今からいい？」

「無理でござる」

「ええー!？」

我が同胞たるあおいちゃんに誘われても今日は直帰。

「お母さんと約束があるんだ」

「それなら仕方ないけどお……」

くっ、もじもじしながら上目遣いしたって私の意志は変わらないぞ。

変わらないぞと言いつつもあおいちゃんの眼光にたじたじなっていると、明るい声が割って入る。おなじみ仲良しトリオが筆頭、コミユカオバケのみおだ。

「マヤーー! この後どっか行かない？」

「ごめん、先約があるから。また今度誘ってよ」

「そう？ 残念だなー久しぶりのマヤの美声聞きたかったのに」

「お、おだてても無駄なんだから」

みおはニヤニヤ笑ってる。そうやって私の意志が揺らぐのを見て楽しんでるんだな。効果てきめんだよくそう！

しばらくすると諦めたのか、三人そろって教室を出ていく。さり際に「もう漫画の影響でヘッドバット練習なんてしちゃダメだよー!」と言いつつ残して。言われた私は恥ずかしくて、反射的に頭の包帯に手をやった。

頭のケガは数針縫う羽目になり、あの日から一週間たった今も包帯を巻いてる。表向きにはみおが言ったようにヘッドバットの練習してたっただけで通した。担任の先生も友だちもドン引きしながら「フィクションと現実はず」って叱ってくれたよ。色んな意味で泣き

そうだった。

さて、今日はお母さんとの約束がある。会ってほしい人がいるとか。あおいちゃんとはひなたには悪いけど、早く帰らなきゃ。

あおいちゃんは悩ましげにひなたの方をチラチラ見てる。きつと今度のひなたの誕生日で何をプレゼントするか悩んでるんだろう。私はもう用意できてるから高みの見物だもんね。

余裕のドヤ顔をしつつ、私は教室を出た。

「ほ、ほのか!?」

「……………ごめんね、マヤ」

お母さんと私の新居に帰ってすぐ、待ち構えていたのはほのかだった。居間でお母さんと話していたらしいほのかは私を見るなり抱きついてきた。

「私また、マヤが苦しいときに何もできなかった。悩んでるのに話も聞けなかった。辛かったよね、痛かったよね」

「いやいや正味、物理的な距離はどうにもならないというか……………」

「私もマヤのこと大好きだよ」

それだけのために。

それを言うためだけに、平日のこの時間に学校を休んでまで、会いに来てくれたんだ。

そう思うと——大嫌いな私でも、もつと生きたくなるじゃない。

ほのかの背中をぽんぽんと叩く。本当に迷惑ばかりかけてるダメダメな私だけど——ん?　なんか、体がぐいぐい引っ張られてく。寝室の方へ向かって。

そうそう、六畳一間のアパートと違って今の暮らしはすごいんだ。なんとかかでいーけーとかいって、お風呂とトイレは別々だし寝室とベランダまでついてる。お母さんの実家が管理してるところなんだって。

「あの、ほのかさん?」

で、問題はほのかを私を寝室に連れ込もうとしてるってこと。何こ

れ。

ほのかは潤んだ目で私を見下ろしている。

「私が本当にマヤを大好きだって証明する。もう二度と自分を嫌いになれないくらい、私の大好きをたくさんあげる」

「えっ、ええっ!?!」

「大丈夫……痛いことはしないから……」

たいへんだ。ほのかが血迷った。仲間はずれにされた寂しさでおかしくなっちゃったみたい。

ここは大人の力を借りないと。へるぷみーお母さん!

ちよ、なんではらりと涙流してるの? いい人を見つけたのね、マヤ、って——

「ほのかは女の子だから!」

「大丈夫だよ、私とマヤならそのくらい」

「大丈夫ちゃうわ! あっ、やめっ、どこ触ってんの変態!」

体格で劣る私がほのかに抵抗できるわけもなく。

若いっていいわねとポンコツを發揮しているお母さんに見送られ。私にマウントを取ったほのかは暗くなるまで、大好きな気持ちをたくさん教えてくれたのだった。

いつかひなたと話をしたとき、私はいかにも名言らしく「人生とは登山に似ている」と言った。でも間違いだ。人生は登山というより、縦走に近い。

山あり谷あり、上ったり下ったり。いくつもの頂があつて、それぞれに辛い核心部、拠点になるテン場が用意されている。

私が高校生になってからは急登だった。急に友だちが増えて、お父さんの死を受け入れたと思っただらお母さんが帰ってきて。そして十月下旬の今、私は山の頂にいるのだろう。

優しくて頑張り屋なお母さん。大好きと言ってくくれる友だち。

失ったものは戻らなくても、代わりにたくさん思い出ができた。

山頂でずっと止まっているわけには行かない。辛くてもいつかは次のピークに向かわなきゃいけない。でも今の頂から見えるものが次もあるなら、鎖場も岩場もきつと越えていけるだろう。そこにあるのは辛い現実なんかじゃないと、分かったんだから。

さて、この山行から得られる教訓を一言でまとめると。

山の頂にあるものは――